勇者と魔王と聖女はぼくの嫁！

岡部勇吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王と聖女はぼくの嫁！

【Ｎコード】

Ｎ９８２３Ｖ

【作者名】

岡部勇吾

【あらすじ】

十六歳の高校生ヒロトは、ある日召喚された異世界で、勇者、魔王、聖女、騎士、王女、奴隷娘、ドラゴン少女といった美少女たちと恋愛しながら出世の階段をのぼりつめていく。その上、呪われた魔槍を手にしたことから世界最強の力も手に入れ――はたして超八方美人少年の薔薇色の人生の結末は？　ハーレム要素と、若干生々しい性描写を含み、途中から主人公最強ものになります。

はじめに

この小説は超ご都合主義異世界八方美人なりあがりファンタジーです。その種のものが苦手な方はご遠慮ください。

また、この作品はある程度生々しい性描写を含む箇所があります。その種の物語が嫌いな方もご遠慮くださったほうが良いと思います。

それ以外の方はなんの問題もないので、ぜひこの物語を楽しんでいってください。ぼくが書けるかぎりの面白さを狙って書きました。非才の身の上でどの程度書けているのかはわかりませんが、もし良ければ感想をお願いします。

それでは、物語の世界へようこそ！

第一話「戦闘中毒」

回廊の前方にあらわれたその一群を見たとき、ぼくの背中を心地よい興奮が駈けぬけた。

いままで敵対したなかでも最強といっていい、恐るべき魔物たちの集団だった。ひと目見て、ひとに勝てる相手ではない、と悟る。

自然界には決してありえない見るからにおぞましい造形をした、あの怪物は〈上位悪魔〉だ。その横に赤いひとみを爛々と輝かせ、たたずんでいるのは〈吸血鬼貴族〉。それも侯爵か公爵級の化け物。その後ろには三つの首のそれぞれが貪婪な獣欲を感じさせる〈地獄の番犬〉がいる。一見すると巨大な薔薇の花のようにも見える〈食人植物〉がいる。そのほかにも、見たことのない怪物たちが何匹も連なっていた。

このダークランドでもここ〈無限迷宮〉のほかでは決して出逢うことがないはずの最強の魔物たちが、ひとつの群勢を形成して、ぼくたちに襲いかかろうとしている。並の使い手なら、震えあがって逃げ出すことすらできないであろう、暗黒世界の王侯たちだ。

しかし、ぼくが感じるものは、重度の戦闘中毒患者だけが感じる、あの暗い魂の興奮だけだ。

いいぞ、とぼくは小さく呟く。少しは楽しませてくれよ。

「悪魔と吸血鬼と番犬は引き受ける。ほかの魔物どもは頼む」

ちょっとうんざりしたような顔で魔物たちを眺める女勇者ミュウ

と、後方にひかえる聖女ソーニャにそう頼むと、ぼくは返事を待たず、怪物の一群に超高速で突進していった。

己らの威厳に恐れをなしているものと思い込んでいたに違いない。怪物たちの反応は一瞬、遅れた。一瞬。超高速戦闘においては十分な隙である。ぼくが片手で持つ〈魔槍グングニル〉は、あわてて攻撃呪文を詠唱しようとする吸血鬼の幾重もの防御結界をあっというまに打ち破って、その呪われた心臓を貫いた。刹那、その肉体そのものが渦巻き状に歪み、グングニルに吸い込まれてゆく。この邪悪な魔槍の餌食になったものは、魔槍を通してぼくの力となる末路なのだ。

それが戦闘のゴングだった。

ぼくは狂ったような怒りを込めて上下左右から同時に襲ってくる悪魔や地獄の番犬たちの攻撃を紙一重で避けながら、魔槍を縦横にふるった。グングニルは闇の生きものたちの生命を吸い取ることができる歓喜に叫び、いつも以上に冴えた切れ味を見せた。

この世に貫けぬものなし。

そう伝承されてきた魔槍グングニルの実力は、果たして、偽りではなかった。本来、ひとなどまたたく間に殺し尽くせるはずの地獄の住人どもを相手取ってすら、その力は圧倒的だったのである。ほんとうに頼りになる相棒だ。

予想外の方向から攻撃してきた番犬の牙が、ぼくの被った兜を吹き飛ばす。これで、この戦闘におけるぼくの死亡率は一気に十倍にもなった。ぼくは烈しい歓びと慄きを同時に感じて微笑する。いいぞ、やっとおもしろくなってきやがった！

右、左、上、右、左、左、下、一度でも読み間違えれば死につながる超高速の連鎖攻撃を、ぼくはついにことごとく読み切り、そのたびにカウンターで上級悪魔の頭を貫き、番犬の背中を切り裂いた。ぼくが身につけた〈黒の鎧〉は何度か敵の攻撃を受けたか、そのすべてを受けきった。この伝説の鎧がなければ、ぼくはいまごろ無残な死骸となって迷宮の床に転がっていたに違いない。しかし、この鎧の防御力も絶対ではない。一回でも正面から攻撃を食らえば耐えられない。

殺せ！　殺せ！　殺せ！

脳蓋から送られくる殺戮信号に従順に、ぼくは何十匹もの魔物をほふりつづけた。もし、ひとが見ていたら、一瞬ごとに血を巻き起こす黒い旋風としか理解できなかったことだろう。そして、客観時間としては数十秒だが、主観時間としては限りなく長い時の末に、戦闘は終わった。

憎悪を込めたぼくを睨み据える最後の一匹にとどめをさして、ぼくはようやく長いため息を吐き出した。となりでやはりミュウが、のこされた一匹を聖剣で貫くところを確認する。

「終わったね」

火のような戦闘興奮がしだいに冷めてゆくことを感じながら、ぼくはミュウに話しかけた。ミュウは何だか怒ったようすで、その場で地団駄を踏んだ。

「無茶だよ！」

彼女は叫んだ。

「あの数の魔物と初見でたたかうなんて。いったん退いて陣形を考える場面だったでしょう？」

「ごめん」

ぼくは素直に謝った。その通りだと感じたからだ。同時に、しかし、とも思う。もういちどあのような場面があったとしたら、ぼくはそのときも必ず敵の群れに飛び込んでゆくだろう、と。

「まったくヒロトはめちゃくちゃなんだから！　その武器も防具も無敵じゃないんだからね！」

「知っている。でも、自分の実力をためしてみたかったんだ。巻き込んじゃうみたいな形になってごめんなさい」

「もう！」

ミュウは怒り冷めやらないようすだった。ぼくにもわかる。彼女が、ぼくの戦闘中毒を心配しているのだということが。しかし、この手で絶望の死者たちをひとり、またひとりと屠ってゆく快絶は何ものにもかえがたい。

「まあ、まあ」

ぼくとミュウのあいだに、ソーニャが入り込んでくる。肩までとどく黒髪の美少女、幾千万の信徒を抱える〈銀十字教会〉の頂点、聖女ソーニャだ。初めて出逢ったからだいぶ経つが、いまでもため息をつきたくなるほど可憐だ。

「ところで、ミュウ」

と、彼女はいった。

「その下着は、わざと見せているの？」

「え？」

ミュウが自分の格好を確認して、お尻が丸出しになっていることに気づく。

「わ、わ、下着が見えちゃっているよ！　ヒロト、み、見ないで！」

いまさら下着くらい、とぼくは思ったが、ここは紳士的に視線を逸らした。世界にたったひとりの勇者だというのに、ミュウにはこういう子どもっぽいところがある。

「あら、大丈夫よ。あなたのくまさんパンツなんて見たがるひと、だれもいないから。ヒロトだって、幼児性愛の趣味はないわ。安心して、子どもパンツを見せていなさい」

「ぼ、ぼくは子どもじゃないよ～」

「子どもじゃない」

そういいながらも、ソーニャはさりげなく〈修復〉の魔術を使って、ミュウの格好を直してやった。ミュウが満面の笑顔になる。

「ありがとう、ソーニャ。ぼく、ソーニャのこと、大好きだよ！」

「わたしはあなたのことなんて嫌いよ。わたしはヒロトが好きなの」

「ぼ、ぼくだって、ヒロトのこと好きだよ！」

「でも、ヒロトはあなたのこと好きじゃないわよ。なに、その小さなおっぱい。男の子みたいじゃない？　ヒロトはわたしみたいな大きなおっぱいが好きなの」

「そ、そんな――」

「もちろん、あの〈魔王〉みたいな人間ばなれした乳はべつよ。ものには適度なサイズってものがあるんだから。でも、あなたのは、全然適度に達していないみたいね」

「そんなことないよ。ぼくだって女の子だもん。ちゃんといまでも育っているんだから！」

「へえ、じゃあ、見せてみなさいよ！」

「いいよ。よく見てみ――」

「やめなさい、きみたち」

ぼくはミュウとソーニャの間に割って入って、コントをやめさせた。ミュウはやるといったら、本当にやりかねない。ソーニャのほうを見ると、澄ました顔をしている。この子はこの子で、本当に性格が歪んでいるというかなんというか。

しかし、いちばん悪いのはぼくなのかもしれなかった。ふたりと

も、ぼくのことが好きだから張りあったりするのだから。このふたりに、いまは〈魔都イスカリュウム〉にいる魔王アスカが絡むと、大変なことになる。この三人が戦いあったら世界の破滅なのだ。

ぼくはいま、この三人全員と恋愛関係にある。そのほかの恋人もたくさんいる。どうしてもひとりに選べないのだ。この八方美人な性格が悪いんだということはよくわかっているんだけれど、最強級の使い手にまでなりあがったいまでも、生まれつきの性格だけはどうしようもない。

どうしてこんなことになったんだろうか。

ぼくは遠い目をしながら、この世界に召喚されたその日のことを思い出していた。

第二話「召喚」

物語をどこから始めるのかは、本来、手練を要求される技術だ。

なぜなら、そもそも時に始まりも終わりもなく、ただひたすら連綿と続いているだけなのだから。それを物語のかたちに切り取り、語る作業には、自然、ひとの意思が必要になる。しかし、この場合、どこから始めるかはごく簡単。なぜなら、〈その瞬間〉以前のぼくの人生には、語るべき何ものもないからだ。

朝、だらだらと目覚め。

昼、いいかげんに学び。

夜、なんとなく眠る。

それだけの人生を、ぼくは特に疑問もなく送っていた。

平和なこの国の、平凡な一高校生。それが、ぼくのすべてだったんだ。

だから、まさか自分が家族や友人と離ればなれになり、本物の異世界に召喚されて命がけの冒険をくりひろげるはめになるなんて、想像もしていなかった。もちろん、そういう物語を読んだことはあったが、すべて自分とは無関係の話だと思っていたんだ。

しかし。

現実は小説よりも奇なり。

ある朝、その瞬間はやってきたんだ。

ぼくは村上ヒロト。

十六歳。

平凡な名前の、平凡な高校生。身長こそいくらかひとより高いが、それ以外には特別の特徴がない、つまらない人間だ。

趣味は読書と映画鑑賞、といえば、いかにぼくがありふれた人間かわかるだろう。たしかに本は平均よりずいぶん読んでいるが、この世界には膨大としかいいようがない量の読書をする人間がいることをしっているから、特に自慢する気にはなれない。

性格は温和。いや、むしろことなかれ主義者といったほうがいいかもしれない。争いごとがきらいで、喧嘩している友人がいるとまっさきに仲裁に入るタイプだ。その性格がのちに問題となるのだが――それは、この時点では、想像もしていないことだった。

「よう、ヒロト」

ぼくが初夏の太陽を恨みながら登校路を歩いていると、いつもいっしょに登校している友人の戦部槙久がだるそうにあいさつしてきた。

「今日もだりぃなあ」

槙久のあいさつはいつもこれだ。戦部なんていう勇壮な苗字に似合わないことはなはだしい。しかし、いまどきの高校生としては、

ごくふつうといえるかもしれない。当然ながら、ぼくも気だるげにうなずく。

「うん、だるいね」

かぎりなく生産性に乏しいが、平和といえばこの上ないくらい平和なやり取りだ。

ぼくと槙久は、親友といえるような間がらではないが、それなりに親しい仲ではある。ゲームソフトの貸し借りはするし、いっしょにちょっとはめを外したこともある。成績も同じくらい、運動能力もたいして変わらない、といういい友人の条件を満たしているのだ。ただひとつ、槙久がぼくと違うところは――

「お、由芽じゃん、おーい、由芽」

まるでもてないぼくと違い、ちゃんとした恋人がいるということだ。

雑賀由芽。

ショートカットがよく似あう、ちょっと可愛い女の子だ。

しかし、突然声をかけられた由芽は、槙久の言葉を無視して、ぷいっと横を向いた。

「なんだよ、由芽、おれだよ。きみの彼氏の槙久くんだよ」

「知らない」

雑賀由芽はひと言そう言い捨てた。

全身から、わたしは機嫌が悪い、というオーラを放っている。

ようやく危険事態を悟った槙久が、彼女のところにそうっと近づいてゆき、となりに並ぶ。

「ごめんな」

「何が？」

「何かはわからないけれど、おれが由芽を怒らせたんだろ。だからおれが悪い」

「そんな誠意のない謝り方じゃ赦さない」

「うん、ごめん」

「もう、すぐそうやって謝る！　自分が何で怒らせているかも気づいていないくせに！」

「ごめん」

「だから――！　ああ、もう、いいや、怒っているの、ばからしくなってきた」

「ありがとう。由芽は優しいな」

「そうだよ。槙久の彼女なんてやってあげるの、わたしだけなんだから。大切にしなさい！」

「うん。大切にするよ」

と、聴いているほうがよほどばからしくなってくるような会話をくりひろげながら、ふたりは歩きつづけた。そのあいだ、当然、ぼくは無視。この男と親友になれないのはこういうところがあるからかもしれない、とちょっと思う。

しかし、正直にいえば、ふたりの会話はひき裂いてやりたいくらい妬ましかった。

ああ、ぼくにはこういう会話は一生縁がないのだろうな、と思う。何しろぼくと来たら、女の子の前に立つだけで緊張してろくに言葉が出てこなくなるたちなんだから。

ぼくはクラスでもまるで目立たないし、特に強烈な個性や才能を備えているわけでもない。演劇をやったら、村人Aにしかなれないタイプだ。主役の勇者や、王子さまは、べつのやつがやっている。もちろん、槙久だって大差ないはずだけれど、彼にはちゃんとたったひとりの恋人がいるんだから、話が違う。

ぼくはひとり。

ひとりぼっち。

これからも、ずっと、ひとりぼっちのまま生きて行くんだ。

そう考えると朝から憂鬱な気分になってきて、めまいがしてきた。目の前の風景が揺らいで、まっすぐ歩けない。

いや？

なんだ、これは？

ただのめまいじゃない。

目の前の風景が、ぐるぐるまわり始めた。

思わずその場に膝をつく。

しかし、そうしても視界が元に戻ることはなく、それどころか、どんどんぐるぐるはひどくなっていった。呆然としているうちに、やがて風景は混沌、としかいいようがない色彩の渦に変わり果てた。となりにいるはずの槙久の姿すら確認できない。

何だこれ……！

そう叫んだつもりだったが、はたして、その声がひとに届いたか、どうか。ぼくはあまりの気持ち悪さに震えながら、その場にうずくまった。

ぼくは死ぬのか、あるいは狂ってしまったのか、と思った、そのとき。

「見つけたぞ」

たしかにそうつぶやく声が聴こえた。

「多元宇宙にただひとりの〈天秤の保ち手〉――お前の力を貸してもらおう」

男のものとも、女のものともしれぬ、ただ永劫に年老いているかのような声音――それが、ぼくの耳もとで大きく響きわたった。

と。

足もとの地面がぐにゃりと歪み、ぼくはゼリーのようになった地面に吸い込まれた。あるいは、それも錯覚であったかもしれない。なぜなら、すぐにからだは楽になったし、呼吸にはまったく困らなかったからだ。ただ、無窮の闇をどこまでも落ちて行く感覚だけが続き――そして、ぼくはいつのまにか気を失っていたんだ。

第三話「勇者参上」

運不運とはわからないものだ。

何が幸運で、何が不運なのか、そのときだけを見ていてはわからないことは往々にしてある。

ジャナスリアンに召喚されたことも、果たして幸運と捉えるべきなのか、不運と考えるべきなのか、正直、いまでも判断がつかないくらいだ。しかし、ひとつだけいえることがある。茫漠たる大草原のただなかで目を覚ましたそのとき、ぼくは呆然として、自分の運不運について考える余裕など全くなかったということだ。

「なんじゃこりゃーっ」

ぼくは視界の続くかぎり続く大草原を見まわして、ひとり、叫んだ。

当然だと思う。ついさっきまでたしかにアスファルトとコンクリートで固められた街を歩いていたというのに、突然に見しらぬ場所に放り出されていたのだから。ぼくでなくたって、叫んだだろう。

はっとして確認してみたが、制服と学生鞄はそのままだった。また、半信半疑でふれてみると、土は紛れもなく柔らかであたたかい土そのものだった。頭上を眺めると、まぶしい太陽が燦燦と輝いている。とりあえず、夢を見ているわけではないらしい。

「なんじゃ、こりゃ……」

ひとり言も、思わず小さくなる。

突然誘拐されてどこかに連れてこられた？

実は夢遊病でひとりでここまで歩いてきた？

本当はすべてよくできたセットのなかの出来事？

いくつかの可能性が瞬時に頭に浮かぶが、どれも現実のこととは思わなかった。だから、ぼくは「困惑」とか「混乱」といった言葉の生きた見本となって、頭を掻きむしった。

何がどうなっているんだ……。

答えが返ってくるものなら訊ねてみたかったが、だれも返事を返してくれそうなひとが見あたらないので、ぼくはひとりで頭を抱えて目をつむった。ふたたび目を開いたときには何もかも夢だとわかるといいなあ、と淡い期待を抱いていたのだが、やはりその期待は叶わなかった。

ふたたび目を開いたあとも、眼前には大草原が広がっていたのだ。

呆然。

そうして、そこでどのくらいのあいだ、我を失っていたことだろう。たぶん、小一時間はそうしていたかもしれない。太陽がわずかに傾いた頃、ぼくはようやくはっとして、自我を取り戻した。どうやら、いくらここで待っていても、助けはやってこないらしいと悟ったのだ。

誘拐されたにしても、夢遊病にしても、とにかくひとに会いにいかなければならない。そう気づいた。

ひょっとしたら日本じゃないという可能性も捨て切れないが、それは考えないことにしよう。とりあえず道らしきものがあるから（しかし、なぜかアスファルトではなく石だたみだった）、これを進むしかない。ぼくはそう覚悟を決めた。

このときのぼくは、我ながら、偉かったと思う。そして、ある意味では、ぼくはついていた。灼熱の太陽の下、ほとんど泣きそうになりながら歩きはじめて三十分もしないうちに、数人の人びとと遭遇したのである。

ひとだ！

ぼくは大きく手を振った。

これで助かる！　保護を求められる！　そう思ったのだった。

甘かった。

そのことは、大きな馬を操ってこちらに近寄ってきた男たちの顔をひと目見た瞬間にわかった。どう見ても悪人づらだったのだ。なかには片方の目が刀傷で潰れた男までいる。しかも、かれらはひと目見て日本人には見えなかった。その日に焼けた面相は、ラテン系とおぼしく、ここが日本だというぼくの希望は瞬時に打ち砕かれた。

まさか、と一瞬だけ考える。

日本じゃないだけじゃなく、地球ですらないなんてことないよな

……？

まさかね。

「おい、小僧」

ところが、先頭に立つ男のくちびるから聴こえてきた言葉を、ぼくは理解できた。日本語だという意味じゃない。英語でも、中国語でも、イタリア語でもない、聴いたこともない言葉だ。それにもかかわらず、ぼくは彼がいうことを理解できるのである……！

「貴様、なぜ、こんなところをうろついている」

「は、はい。それが、えっと――」

「早く答えろ！」

「ぼくにもわからないんです！」

情けない話だが、ぼくはこのとき、本当になみだぐんでいた。ばかにされても仕方ないが、ぼくの立場ならほとんどの日本人がそうなると思う。何しろ、何が起こっているのかさっぱりわからないうえに、悪人づらの男たち数人に取り囲まれているのだ。これがＲＰＧだったらとっくにリセットしているところだ。

しかし、残念ながら、現実にはリセットボタンはない。

男たちのひとり、鋭い目つきの若者が、先頭の男に何か耳打ちするのが見えた。

「〈アーシアン〉？　こいつが〈アーシアン〉だというのか？」

先頭の男はぼくをじろりと見下ろすと、ぺっと地面に唾を吐き捨てた。

「おい、小僧」

「は、はい」

「貴様、〈地球〉からやって来たのか？」

「え、ええ。もちろん、そうですけれど？」

「ここがどこだか知っているか？」

「いいえ、知りません。教えてくれますか？」

男はにやりと獰猛な笑顔を浮かべた。

「いいだろう、教えてやるさ。ここはジャナスリアン。聖女と魔王が治める場所。お前がいた〈地球〉とはべつの世界。そして、そう――」

男は背中からたわむ刀を抜き取った。

「お前の墓場となるところだよ！」

それに合わせて、全員が馬上で刀を抜く。

ぼくは青ざめて、その場に腰をつきそうになった。しかし、なけ

なしの生存本能が、逃げなければ、と告げていた。逃げるといっても、あいては馬、こちらは徒歩、あいては複数、こちらはひとり、あいては武器、こちらは徒手、逃げられるはずもなかったのだが、それでも逃げなければここでゲームオーバーだということは本能が告げていた。

しかし、背中を見せれば、その瞬間、斬られる！

どうする、どうすればいい――？

ぼくの頭脳は、いままでの人生で一度もなかったくらいの速度で回転したが、それでも答えを見つけ出すことはできなかった。絶体絶命とはまさにこのことだ。こういうとき、物語ならまさにヒーローが助けに来てくれるはずなのだが――。

「待て！」

凛とした美しい声が響きわたったのはそのときだった！

「お前たち、悪行は赦さないぞ！」

悪漢たちが困惑した表情で振り返ると、そこに、ひとりの少年が立っていた。さっきまで影も形もなかったはずなのに、ものすごい速度で駆けてきたらしい。ひと目見て心を射抜かれるような、美しく、しかも気品に満ちた顔だちの少年だ。まさにヒーローにふさわしい容姿だといえる。年の頃は十五、六だろうか。それにしては声が高いが――。

いや。

ひょっとして――。

「女か？」

悪漢たちのひとりが目を細めた。続けて酷薄に笑う。

「綺麗な顔していやがる。獲物がふたりになりやがった。どれ、おもいきり犯したあと、売りさばいてやるとするか。声をかけたこと、後悔しても遅いぞ」

男は方向を変え、少年――否、少女に襲いかかった！

と。

その瞬間、少女の姿が消えた。

何のためもなく空中高く飛び上がったのだ、とわかったのは、彼女が弧を描いて空から降りてきたそのときだ。少女は男の顔に蹴りをくれると、そのまま空中で一回転して着地した。信じられないような身体能力、舞踏のような華麗な動作だった。いまや野盗のたぐいであることが疑う余地がない悪漢はそのままぶざまに地に墜ちる。

悪漢たちの顔色が変わった。

「なんだ、この娘、強い……？」

「貴様、何ものだ！」

のこり五名となった男たちの言葉に、少女は我が意を得たりと微笑した。

「そのセリフを待っていたんだよなあ。おそいよ、お前たち」

そして、彼女はゆっくりと見せつけるように抜剣すると、その透明に光りかがやく長剣を片手でかるくかまえた。見たこともないような異様に美しく繊細な造形の剣だった。

少女が叫ぶ。

「ぼくは〈勇者〉ミュウ・ミュウテイシア！　悪漢どもめ、覚悟しろ！」

第四話「漂流者」

そこから後のことを、くわしく記そうとは思わない。

圧巻、とだけ書いておけば十分だろう。

〈勇者〉と名のった少女、ミュウ・ミュウテイシアは、華麗な演舞を思わせる動作で、悪漢たちを次々と斬り捨てていった。ぼくはひとが斬られるところを生まれて初めて目にした。本来なら、吐き気をもよおしてもおかしくない惨劇であったかもしれない。じっさい、斬り伏せられた男たちはひとりのこらずどうっと血を吐いてその場に倒れた。しかし、醜悪であるはずのその光景は、ミュウという子の華麗さのために、非現実の光景と見え、ぼくはほとんど嫌悪を感じなかった。それほどに、ミュウの剣戟は優美だったのである。ぼくはひとが蝶のように跳ぶところを始めて目にした。

そして――

すべてが終わるまで、おそらく、数分に過ぎなかったことだろう。

唖然として見つめるぼくの前で、ミュウは透明な剣を鞘にしまうと（それが勇者のみが使いこなせる聖剣であり、だからこそ血が一滴もこびりつかなかったのだと知るのはずっとあとのことだ）、ぼくのほうを見た。

にこっと笑う。

ひとなつっこい猫みたいな笑顔で、ぼくはそれを見ただけで妙に安心した。

大丈夫。

この子は悪い子じゃない。

その顔を見ただけで、そう信じられた。

それが、たったひとりで世界を背負う勇者だけが持つ透明な笑顔なのだと悟るのは、やはりずっとあとのことだ。そのときはとにかく安堵して、僕はその場にへたりこんだ。

「大丈夫かい？」

それだけで心をとろかせるような優しい声で勇者は声をかけてきた。

「危ないところだったね。ぼくが駆けつけるのがもう少し遅かったら、きみはあいつらの獲物になっていたところだったよ。でも、そういう危機一髪の状況にうまく駆けつけられるのが、勇者の特権ってものなんだけどね！」

勇者は自慢そうに薄い胸を逸らした。男装しているせいもあるだろうが、その箇所はまるで目だたない。そういうところにまず目が行ってしまうぼくがいやらしいのかもしれないけれど……。

「どうしたんだい？」

そんなぼくの邪心も知らず、親切に訊ねてくる少女に、ぼくはあわてて首を振った。

「な、なんでもないです。それより、ここはいったいどこで、ぼくはいったいどうなっているのか、それを教えてもらえませんか」

ぼくがそういうと、ミュウは怪訝そうな顔をした。

「どういうことだい？　ここはもちろん、東方三カ国の一国、アイビスの国だけれど、そういうことを訊きたいわけじゃないよね？　ここから一番近い都市はあの〈銀作りの都〉ナナルルで、距離は２０パントーくらいだけれど、そのことも知っているだろう？」

ぼくは首を横にふった。

ミュウは怪訝そうに首をかしげる。

「知らないの？　じゃ、なんでこんなところをうろうろしているわけ？　そもそも、その格好は――」

と、少女は眉をひそめた。

「まさかとは思うんだけれど、きみは、ひょっとしたら、この世界の外から来たんじゃない？」

「は、はあ」

ぼくは先ほど、悪漢たちから聴かされた言葉を思い出していた。

「ここはジャナスリアン。聖女と魔王が治める場所。お前がいた〈地球〉とはべつの世界」

地球とはべつの世界？

ここはぼくのいた世界とは違う世界だとでもいうのか？

たしかにそれなら色々な不条理につじつまが合うが――いや、それはつじつまが合うなんていわない。ひとつの不条理をべつの不条理で説明しているだけに過ぎない。密室殺人事件の謎を魔法で解決しようとするようなものだ。異世界なんて、信じられるものか。

「それならわかる」

半信半疑のぼくに向かって、ミュウはひとりうなずいた。

「こんなところで偶然に伝説の〈アーシアン〉に出逢うなんて信じられないけれど、これも神の恩寵。勇者であるぼくに課せられた聖なる義務のひとつに違いない」

「〈アーシアン〉？」

ぼくが問い返すと、ミュウは湖面の色のひとみをそっと細めた。

「きみは〈地球〉から来たのだろう？　あの神秘の異世界から？」

「う、うん。たぶん」

「それなら、きみは〈アーシアン〉だ」

「そ、そうなんだ」

「そうか、〈アーシアン〉か」

ミュウは何やら考えこむようすだった。

それをみて、ぼくはほっと安堵した。

良かった。

この世界にただひとりの〈勇者〉だというこの子なら、きっとぼくを助けてくれるに違いない。いまでも異世界に召喚されたなんて信じられないが、とりあえず、この子は信じられる。この子に付いていけば、きっとうまくゆく。

「ねえ、きみ」

「きみは名前はなんていうんだい？」

「あ、はい、村上ヒロトです」

「ムラカミヒロト、か。変わった名前だな」

「そう？　普通だと思うけれど――。ミュウ・ミュウテイシアだって、ずいぶん変わっているよ」

勇者はひとつ肩をすくめた。

「ぼくは辺境の生まれだからね。ミュウテイシアなんて俗な名だ、というものもいる。神に選ばれた勇者は王侯貴族のなかから生まれるのが正しいと思っているような輩さ。そいつらは、ぼくが女だということも気にくわないらしい」

「へえ」

それはそうだろう、とぼくは思った。

こんなキュートな女の子が勇者だなんて、じっさいに目の前でその実力を目にしていなければ、ぼくも信じられなかったことだろう。こんな特殊な状況でなければ、ぼくはたぶん彼女と話をすることにすら臆していたはずだ。何しろ、ぼくはふだん全く女の子と会話したりできない人間なのだから……。そういう意味では、これもラッキーといえなくもないのかな、と考えて、自分で否定した。これ以上のアンラッキーがあるものか。いやまあ、この子がぼくを助けてくれるなら、それはラッキーというべきだろうけれど……。

しかし。

ぼくのかってな思い込みに反して、〈勇者〉ミュウ・ミュウテイシアはその可愛い顔をしかめると、ふたたび超高速で腰間の剣を抜き放ったのだった！　ガラスのように透明に輝くふしぎな光沢の剣がぼくの額をひと筋切り裂く！　文字通り皮一枚のみを切って、血の一滴すら流さない、天才の技としかいいようがない一閃だった。

ぼくは身動きひとつできず、だらだら冷や汗を流してミュウの顔を見つめた。

「ゆ、勇者さま……？」

「この世界のルールを教えてやろう」

金いろの髪の〈勇者〉は、かぎりなく冷ややかにほほ笑みながら真実を告げた。

「この世界では〈漂流者〉はひとりのこらず処刑することになっている。そして、ぼくは〈勇者〉。処刑許可権を持っているんだ。運が悪かったな、ヒロトくん」

第五話「黄金の未来」

「驚いた？」

無邪気な口調でミュウがいう。

「驚いたよね？」

心臓が口から飛び出るくらい驚いたよ！とぼくは言い返したかったが、口を開いたら舌を噛んでしまいそうだったので無言を通した。ミュウは特に気にしたようすもなく、陽気な鼻歌など歌いながら馬を駈けさせる。そう、ぼくたちはいま、一匹の馬のうえに乗っているのだ。悪漢たちが遺していったものだ。もちろん、操っているのはミュウ。ぼくはただ、そのおなかにしがみついているだけ。男として情けなくないといえばうそになるが、しかし、どうしようもないことだ。さっきも一方的に助けてもらったことだし。

このとき、ぼくはこの先、何度かミュウの命を助け、彼女に溺愛されることになる運命だとは、まったく思っていなかった。そりゃそうだ。

それにしても、馬というものが、これほど乗りづらいものだとは思わなかった。ぼくはミュウの背中に捕まっているのが精一杯だった。ミュウの乗馬技術は信じられないほどのもので、まるで馬がからだの一部であるかのようだが、それでも鞍が上下することはどうしようもない。慣れない身には辛い。

しかも、ミュウはそれを無視して一方的に話しかけてくる。

「驚いたのなら、いいんだ。きみを驚かせるためにやったんだから。この世界では、きみのような〈アーシアン〉とか〈漂流者〉とか呼ばれる人間は問答無用で殺されるんだってこと、憶えておいてほしい。ぼくは〈勇者〉だから、きみを殺したりしないよ。でも、ぼくだって立場というものがあるから、きみが〈アーシアン〉だとバレたら、助けることはできない。わかった？」

「わ、わかった」

ぼくはなんとか俊足で駆ける馬の上で返事をした。

ミュウは満足そうにうなずく。

それにしても、運動神経のかたまりのような子だ。ぼくより年下だろうに、やたらにしっかりしている。さすが唯一無二の勇者というべきか。感心せざるをえない（実はしっかりしているどころか抜けているところが多分にあるのだということをぼくが知るのは、やはりあとのことだ）。

ぼくたちはそのまま２０パントー（ぼくの体感だと、だいたい１０〜２０キロメートルに相当するらしい）の距離を駆け抜け、アイビス国の首都、〈銀作りの都〉ナナルルにたどり着いた。途中、うっかりミュウの薄い胸をさわってしまって、冷たい目で睨まれたりしたのはここだけの話だ。

ナナルルは、大草原のなかにぽつんと存在する都、というわけでもないらしい。ただ、都の東側が開発が進んでおらず、草原地帯になっているだけのようだ。ナナルルから西には、いくつもの町や村が存在しており、それは〈黄金街道〉と呼ばれる街道で繋がっているという。黄金というには、いかにも貧相な街道ではあるけれど…

…。

ひとの身長の三倍ほどもある巨大な門をくぐり、ナナルルに入ると、そこはたしかに「都」だった。

人、人、人。

満員電車を思わせるたくさんのひとがひしめき合いながら歩いている。それそのものは、このナナルルを遥かに凌駕する大都会からやって来たぼくにしてみれば驚くべきことではなかったが、人びとの格好の多彩さ、さらに人種の豊かさには驚かされた。

赤い目のひとがいる。青い目のひともいる。きれいに梳かした長い黒髪のひともいれば、これまたきれいに剃った禿頭のひともいる。ターバンを被っているひとと、黄色い幅広帽を被ったひとが会話をしているかと思えば、物乞いらしい子どもが、大人たちの袖を引いている。ありとあらゆる人種、ありとあらゆる格好、ありとあらゆる階級が、ここには混ざりあって生きているようだった。

点在する家は、日本からやって来たぼくからしてみると粗末なものだったが、どれも意匠を凝らされていて、美しかった。ふしぎなかたちの、物理法則に逆らっているかのような家がたくさんあることにもびっくりさせられた。こうしてみると、わが日本の建築など、いかにも画一的でつまらないものに思えてくる。しかし、いったいどうやって作っているんだろう。やはり魔法の力なのだろうか……。

ぼくはついに、自分が異世界にやって来たのだということを受け入れつつあった。さすがに、そうでも考えなければ納得できそうになかったからだ。

ぼくとミュウは馬を降り、ひといきれに揉まれながら、ゆっくりと歩いていった。そのあいだ、ミュウは一方的にぼくにこの世界の常識や文化を話して聞かせてくれた。どこの国でも貴族が横柄な態度を取るからかかわってはいけないこと、教会の人間を見たら十字を切って頭を下げることが常識であること、色々な人種が混ざっているから、ぼくの顔かたちもそうおかしくは見られないだろうということ。ただ、服装は問題だということ。

ぼくたちは一軒の着物屋に入って、そこでぼくの服を売り（おもしろい光沢の服だと喜んでくれた）、その代金でこの世界の平凡な服を買った。なんだかだぼついて歩きにくいと思ったけれど、それがこの世界の常識であるというのなら、仕方ない。

ぼくはそうっとミュウの顔を覗きこんで訊ねた。

「ねえ、勇者さま」

「何？」

「どうしてぼくにこんなに親切にしてくれるの？　本来、ぼくはきみが助けちゃいけない人間なんじゃないの？　助けたらきみが困るんじゃ？」

「助けちゃいけない人間なんていない」

ミュウはきっぱりといい切った。

「ぼくは勇者だ。勇者はあらゆる政治および宗教権力と無関係のところに立っている。そして、自分の信じる正義を行うんだ。先代勇者もそれは立派なひとだったと聴いている。ぼくも偉大な勇者にな

って、そして、いつか、魔王を倒すんだ。それができるのは、ぼくだけだといわれているんだからね」

そういい切るミュウは、何というか、とてもかっこよかった。ただその日をだらだら生きることしか考えていない、ぼくたち日本の高校生とは次元の違う、使命感があるのだとわかった。

このとき、ぼくはミュウを尊敬したんだ。その尊敬は、あとになって、色々な事件を経ても、何も変わることなく続いていくことになる。

「さて、それじゃ、目的地に行こうか、ヒロト」

「目的地？」

「そう、このままきみを保護してあげたいのは山々だけれど、ぼくにはぼくの仕事があるからそうするわけにはいかない。だから、きみを〈聖十字教会〉に預ける。ぼくの名前で預けたのなら、教会も無碍にはできないはずだ。ぼくと教会はそんなに仲が良くないんだけどね。あの連中は、世界を救うのは自分たちの聖女だと思っているからさ」

そうして、ぼくたちはひとごみのなかを歩き、歩き、歩き、歩き疲れてへたりこみそうになった頃、ひとつの壮麗な建物の前にたどり着いた。イスラムのモスクを思わせる、半たまねぎ型の建築物だったが、ステンドグラスのような色硝子が所どころに使われていることが印象的だった。美しい、たしかにひとの宗教心をそそる建物だ。

「ここだよ」

と、勇者はいった。

ぼくは思わず唾を飲み込んだ。この世界でたったひとりの知りあいであるミュウと別れてこんなところに預けられるかと思うと、不安でたまらなかった。いったいこれからぼくはどうなるんだ？　元の世界に帰ることはできるのか？　この世界でひとり孤独に生きて死ぬ運命なのだろうか……。

そう。

ぼくはこのとき、想像していなかった。

自分が、この教会で出世し、〈聖女〉その人とも出逢い、さまざまな困難をくぐり抜けていくことになろうとは。ついでにさまざまな栄誉や権力を手にしようとは。この時点では、まったく想像していなかったんだ。

しかし、そうなるのだ。

第六話「聖十字教会」

「失礼するよ」

ミュウは友人のうちの扉をあけるように気楽に入っていった。ぼくも仕方なく続く。

なかに入ると、そこは高壮なホールで、上下非対称の赤い十字架を刺繍した服を着た男性があらわれた。いかにもうんざりしたといわんばかりの慇懃無礼な態度でぼくたちを出迎える。

「何でしょうかな。お嬢さんたち。ここは子どもが来るところではないのだがね」

しかし、かれの無礼な態度は、次の瞬間、ミュウが発したひと言によって粉砕された。

「ぼくが〈勇者〉でもかい？」

男の顔いろが、塗りかえたようにさっと変わった。表情が困惑と打算を経て、あまりにも不気味な笑顔に変わる。

「〈勇者〉ですと？　ほんとうのことかな？　失礼ながら確認させてもらってもかまわないかな」

「いいよ。ほら」

ミュウは腰間の佩剣をすらりと抜き放った。あとでぼくは思い知ることになるのだが、これが意外にむずかしいのだ。たちまち、室

内に聖剣の光がみちる。男の表情が今度は極度の緊張のそれに変わっていった。どうでもいいが、わかりやすい奴だ。

「たしかにそれは〈ただひとりのための剣〉。わかりました。勇者さまのご用となれば、話は違います。して、きょうは何用でこの教会を訪われたのでしょう？」

「簡単さ。ひとり、あなたたちに保護してもらいたいひとがいるんだ」

男の視線が、始めてぼくに据わった。ミュウに向けるのとはまるで違う、敬意のかけらもないまなざしで睨みつけてくる。ぼくの能力をどう見積もったものか、とにかく偉大な勇者の仲間にはとても見えないと判断したのだろう、軽蔑に耐えないといわんばかりの態度で鼻を鳴らした。

それなりに屈辱を感じたが、この建物に入る前にミュウにいわれていた言葉を思い出して耐えた。

「いいかい、ここから先は「はい」以外の言葉は使っちゃいけないよ。きみはたぶん、聖十字教会を知らないだろうけれど、それでも「はい」といいつづけるんだ。さもないと、ひどい目にあいかねないからね。わかった？」

ここでは、ぼくの地位はかぎりなく低いのだ。ここはおそらく、わが日本ほど平等や公正といった理念に重きが置かれている社会ではない。ぼくは勇者の言葉によってかろうじて身分を保証されているだけなのだから、調子に乗らないよう気を付けなければならない。屈辱は覚えておいて、いずれ晴らすとしても、だ。

そう、このとき、ぼくは奇妙にポジティヴな気分だった。それもおそらく、ミュウという少女の影響だろう。神に選ばれた光の勇者である彼女には、何かひとを前向きにさせるふしぎな影響力とでもいうべきものがあるのだった。そうでなければ、ぼくはひとりで泣きながらうずくまって助けを求めていたかもしれない。

「ふむ」

と、男はいった。

「勇者さま。あなたはわたしたちにこの少年の保護を求めなさるんですな？」

「そうだ。教会の一員として生活の面倒を見てやってほしい。ぼくはここで別れるが、時々はようすを見に来るつもりだ」

「勇者さまのお願いとあらば、すぐにでも叶えてさしあげたきは山々なれど」

男は芝居がかった口調で続けた。

「ざんねんながら、わが教会に受けいれる仲間はすでに飽和しております。これ以上の仲間を受けいれることはむずかしく――」

「些少だが、寄付の用意がある」

ミュウは背中に背負った鞄から、こぶしほどの大きさの袋を取り出した。それを渡されると、男は中身を覗き込み、そして、欲望にみちた下品な笑顔を浮かべた。

憶えておこう、とぼくは思った。こいつは小物だ。この金は自分の懐にいれるつもりに違いない。

「寄付はありがたくいただいておきましょう、勇者さま。そして、おお、わが聖十字教会は、神と救世主と聖女の美名を掲げるもの。新たな仲間を拒みはしますまい。さあ、少年よ、こちらにおいで。わたしたちの仲間として遇しよう」

「はい」

本当はこんな怪しい宗教団体に入るのなんてまっぴらだったのだが、ほかに行く場所がない以上、仕方ない。ぼくはなるべく従順に見えるようにこうべを垂れて男のほうに歩み寄った。

男は満足げにうなずくと、なれなれしくぼくの肩を抱いた。

「少年よ、きみは神を信じるかね？」

「はい」

「救世主に忠誠を誓うかな？」

「はい」

「むろん、聖女のお力となるべく働くことであろうな？」

「はい」

嘘つきになったことにかすかなやましさを感じながら、ぼくはただひたすら肯定しつづけた。男はそれで満足したらしく、ぽんぽん、

とぼくの肩を叩くと、勇者に向けて大きくうなずいた。

「勇者さま。たしかにこの少年の身柄はお預かりいたしました。今後はわが仲間として聖務にたずさわっていただくこととなるでしょう。ご安心ください」

「教会の暖かな御こころ、大変感謝するよ。それでは、失礼させていただこうかな」

「ぜひまたおいでください。教会は勇者どのに対し閉ざす扉をもってはおりません。ところで、この少年の名前は何と？」

本人に訊けよ、と思ったが、ぼくは黙っていた。ミュウが簡潔に答える。

「ヒロト、と」

「では、ヒロト、行きましょうか。教えなければならないことがいくつかあります」

「ヒロト！」

ミュウが鋭くぼくの名を呼んだ。

「ぼくは必ずまた来る。それまで、ここの生活に慣れるんだぞ。いいか、明けない夜はない。どんな夜にも、ぼくが必ず光をもたらしてみせる。だから、耐えるんだ。わかったね」

「うん。ありがとう」

ぼくは、涙が流れそうになるのを懸命にこらえながら、ミュウの言葉にうなずいた。本当は、離れたくなかった。この世界で、ただひとり信じられる人間なのだ。ずっといっしょにいたかった。すがりつきたかった。しかし、それをしてはならないということは、ぼくにすら、わかった。このとき、ぼくは自分にのこされた最後のもの――ひとかけらのプライドを守ったのだと思う。このあと、ぼくが何とかやっていけたのは、そのプライドがあったればこそだ。

そう。

どれほど重くても、捨ててはならないものがある。それが、ひととしての誇りだ。

「では」

ミュウは断ち切れぬ想いを断ち切るようにして背を向けると、そのまますたすたと出て行ってしまった。

「さて、と」

勇者が出ていくのを見とどけると、男の人相が――表情が、という次元じゃなく――別人のそれに変わった。それまで不気味ではあっても愛想よく振る舞っていた男だったが、その正体は下衆で身勝手な小物であることがその顔をひと目見てわかった。

「ヒロトとかいったな。勇者の知人だからといって甘く扱ってもらえるとは思うなよ。何も持たずにわが教団の世話になろうなどという輩には、それなりの用意をしてあるからな」

ぼくはその迫力に圧されて一歩下がりかけたが、かろうじてこら

えた。

これから先、どんな運命が待っているにしても、自分の力で乗り越えていかなければならないんだ。そう思った。

生きなければ。

そして、いつか元の世界に還るんだ。

このとき、ぼくにはまだかすかに帰還の希望があった。

しかし、このあとぼくを待っていたのは、想像以上に悲惨な扱いだったのである。

第七話「教会奴隷」

牢。

ぼくに与えられた部屋をひと言で表現するなら、そういうことになる。窓には鉄格子が嵌められ、ベッドには布団らしきものもなく、部屋の片すみの便器からは糞尿の匂いがただよってきていた。床は一歩進むたびにきしみ、壁には不気味な黒いしみがいくつかついていた。ひょっとしたら、これは血痕ではないだろうか？

「ここがお前の部屋だ」

先ほどまでミュウとやり取りしていた男、ラーセムは、部屋の扉をあけて薄くほほ笑んだ。ぼくが衝撃を受けているのが楽しいらしい。心底、下衆な男だ。

「なぜ、窓に鉄格子が嵌まっているんですか？」

ぼくが訊くと、ラーセムはばかにしたように鼻を鳴らした。

「決まっているだろう？　逃げさせないためだよ。逃げ出そうとする奴が少なくないものでな」

そして、それが何かとびきりおかしい冗談でもあるかのようにくつくつと笑う。ぼくのラーセムに対する反感は、このあとも根強く続くことになるのだが、それが決定づけられたのはこの瞬間であったかもしれない。

ラーセムは、ぼくの背中をどん、と押すと、部屋の扉をしめた。

あわてて扉を何度も叩いたが、開かない。それどころか、外から鍵をかけたらしく、どんな手段を使ってもあかないのだった。

「あしたの朝になったらあけてやる」

ラーセムは扉の向こうからせせら笑った。

「あけてください！　あけて！」

ぼくは悲鳴をあげたが、ラーセムは歩み去ったらしく、その言葉に返事はなかった。

「畜生」

ぼくの頬を、ひと筋、涙が流れ落ちた。

何ということか、ぼくはこの牢獄の囚人となったのだった。

窓の外を見ると、たそがれ時で、日が街の彼方へ沈んでゆこうとしている。

この町と日本の時差がどれくらいなのか検討もつかないが、つい今朝方まで平凡な学生だったぼくが、いま、この牢獄のようなところに閉じ込められているのだ。なんという境涯の変化だ。天国から地獄とはこのことだ。これからいったいどうなってしまうのだろう……。

異世界に飛ばされたうえに命を狙われ、馬に乗ったり歩いたりして最後は密室に閉じ込められるという、ひどく長い一日で、ぼくは疲れていた。

木製のベッドは、本来、寝られたものではなかったし、部屋に立ち込める臭気は耐えがたかったが、横になると、すぐに眠気が押し寄せてきた。さまざまな不安と、懸念、そして絶望に押しつぶされそうになりながら、ぼくは、あっさりと睡眠の園に旅立った。

翌朝。

ぼくは文字通り叩き起こされて、教会での生活を始めることになった。ラーセムは、ぼくが教会やこの世界のことについてまるで何も知らないことに気づくと、ぼくを白痴として扱うことに決めたようだった。屈辱的なことに、ラーセムはぼくを名前では呼ばず、ただ「知恵たらず」を縮めて「たらず」とだけ呼んだ。

「おい、たらず」

それがラーセムがぼくを呼ぶときの言葉だった。

そして、かれはぼくにあらゆる労働をいいつけた。もっともぼくは料理はおろか薪割りひとつできなかったから、ぼくのやる作業は単純な力仕事だった。何度怒鳴られ、そして殴りつけられたことか。よほど逃げ出したかったが、逃げ出したところで行く場所がないことはあきらかだった。ぼくは肉体の限界まで酷使され、夜になると倒れこむようにしてベッドで寝た。

そして、地味ながら辛かったのが食事だった。まともな栄養価のありそうなものを食べさせてもらえなかったのだ。ぼくは自分が日本で味わっていた料理、たいして美味だとも思ったこともない料理が、実はいかにたくさんの創意工夫の産物であるのか、ようやく思

い知った。うまいまずい以前にほとんど味のしないようなもの、ただ玉ねぎやじゃがいもを煮込んだだけの料理（ぼくにいわせれば、料理以前のしろものだ）だけを与えられて、ぼくはえづきながらそれを食べた。

ぼくが〈教会奴隷〉という言葉があることを知るのはあとになってからのことである。

日々、群雲のように憎悪がふくれあがっていったが、まったくどうしようもないことだった。

見ていろ。

ぼくは何度となく心のなかで叫んだ。

もういちどミュウがやって来たら、お前なんて、やっつけてもらうからな。必ず、そうしてもらうんだからな……！

しかし、いつふたたびミュウと逢えるのかは判然とせず、見捨てられたのではないかという不安は肥大化していった。本来、見ず知らずの身を金を払って預けてもらった以上、ミュウを恨む筋合いはないはずだ。しかし、ぼくはいつしかミュウのことを恨みがましく思い出すようになっていた。彼女もまた自分にひどいことをしたように考えた。

たったひとつ、救いだったのは、同じ〈教会奴隷〉の身の上と思しい少女、ナローラと親しくなれたことだった。同じ年頃の少女が苦手なぼくだったが、ナローラとだけは、ふしぎとあたりまえに話をすることができた。それくらい、親しみやすい女の子だったのである。

べつだん、ミュウのように輝くような美貌を持っているわけではない平凡な少女である。栄養状況が悪いせいか、がりがりに痩せていて、ひどく貧相な印象だ。それでも、ぼくにはその少女がとても可愛らしく見えた。彼女はいつもひとり編み物をしていて、それは華麗な刺繍をひとりで生み出し――そして、それをラーサムに没収されていた。彼女の身の上も、ぼくと同じくらい、あるいはそれ以上に悲惨だったはずだが、彼女はふしぎと明るかった。

「あきらめてはいけないわ、ヒロト」

ナローラはよくいったものだ。

「あなたは勇者さまの知りあいなのだもの。必ずここから出て行ける日が来るわ。きっと、神さまがそう計らってくださる。信じるのよ。わたしたちにできることは、信じることだけだもの」

その優しい声音に、どれほど励まされたことか！　いまでも、このことのことは彼女に感謝している。

それからの日々を、詳述することはしたくない。本来なら、目を背けてはいけない時期なのかもしれないが、正直、思い出したくもなければ、記憶もさだかではないのだ。ぼくは絶望的な現実に、心を凍らせることで対処していたのだと思う。そうでなければ、自暴自棄になって教会を逃げ出すか、それとも自ら命を絶っていたかもしれない。それは、あとから思い返しても、ジャナスリアンに〈漂流〉してから、最も辛い日々だった。

ラーセムの悪辣さは、卑しくも司祭の地位にあるものとはとても思われなかった。

「たらず！」

そう呼ばれれば、「はい、司祭さま」と叫んで飛んでいかなければならなかったし、そしてどんなに急いで飛んでいっても、「遅い！」といって殴られたり蹴られたりするのだった。現代日本で体罰が禁止されていることがいかに正しいか、ぼくは思い知った。体罰とは、ようするに暴力であるに過ぎない。そして、暴力は、ひとの心のなかの大切なものを挫く。

しかし。

ミュウがいっていたように、明けない夜はない。ある日、教会を訪れたひとりの若者とともに、ぼくにとっての夜明けは訪れたのだった。

彼の名は護法騎士ランパー・カルネイド。

のちにぼくの宿敵のひとりとして、さまざまに絡み合った運命を演じていく男である。

第八話「読める！」

その男は、ある日、ぶらりと教会にやって来た。

上下非対称の十字架が刺繍された青い服は、貴族の血筋であることを示すものだったから、玄関で拭き掃除をしていたぼくはひと目見るなり平伏した。恐ろしいものだ。この世界に来てからひと月ほどの生活で、ぼくにはすっかり奴隷根性が染み付いていた。

「お前は？」

男の質問に、ぼくは平伏したまま答えた。

「ヒロトと申します」

ちらりと見あげると、長身で端麗な容姿の男がそこに立っていた。ランパーは、この頃、二十二、三歳だったと思われる。ひとを威圧する冷ややかな美貌のもち主で、じろりと睨まれたぼくは、思わずその場に頭をこすりつけていた。くりかえすが、奴隷生活というものは恐ろしいものだ。ひとの心を根底のところでねじ曲げてしまう。

「ヒロト、か。ふん、くだらん名だ。わたしはランパー・カルネイド。この教会の司祭はいるか」

「は、はい」

名前にくだらないも何もないでしょう。もしぼくに少しでも反抗心がのこっていたらそう反論していたかもしれないが、この時のぼくにはそんなものはもうかけらものこってはいなかった。何かもの

をいえば殴られるということを学習していたぼくは、奥歯を噛み締めながらそのまま平伏しつづけた。

青年は、そんなぼくをかるく無視して、玄関ホールから奥へ歩いて行こうとしていた。このときのかれにとって、ぼくなど虫けらそのものに過ぎなかっただろう。

ところが、立ち上がったぼくは、ぼくは何気なくランパーの背中の刺繍の字を読みあげてしまった。

「護法騎士？」

ランパーはその声を聴きつけて振り返ると、怒りを込めたきつい視線でぼくを睨みつけた。いまにも腰の剣を抜き放ちそうに見える。

「貴様、なぜわたしが護法騎士であることを知っている？」

ぼくはふたたびその場に平伏した。そしてそのままの格好で説明する。

「お赦しください。その刺繍の字を読んだのです」

ランパーの表情がかすかな驚きに歪んだ。

「貴様、字が読めるのか？」

「は、はい」

そういえば、とぼくは思い返した。たしかにぼくは字が読めるのだ。それが何語であるのかもわからないにもかかわらず、すらすら

と読める。それだけではなく、いま、この瞬間も、どうも何語かわからない言語でしゃべっているらしい。どういう魔法なのかわからないが、とにかく言語についてぼくに心配する必要はまったくないようなのだった。

ランパーはじっとぼくを見下ろすと、何か考えこむように見えた。

「ヒロト、といったな」

「はい」

「貴様、何語を読める？」

「何語といわれましても――」

「自分が読んでいるのが何語なのかわからないのか？」

「は、はい。実は過去の記憶があいまいでして、ただ読めるだけなのです」

「記憶が？」

ぼくのうそに、ランパーはあごに指をあて、考えこむふぜいだった。

「ふむ。貴様がいま読んだのは古代カナン語だ。相当の教養を持つものしか読めないはずの〈失われた言語〉だよ。記憶があいまいだといったな。あるいは貴様、記憶を喪う前はそれなりの身分のものだったのかもな」

ひとりごとのように呟くと、ランパーは大きく手を叩いた。

「ラーサム！　ラーサムはいるか！」

呼びつけられて、ラーサムが飛び出してきた。一応、この教会では二番目に高い地位にいるはずの男だが、より高い地位の人間を前にすると媚びへつらうことしか考えられなくなるらしい。〈護法騎士〉というものが、どれくらいの地位なのか、ぼくにはわからないが、一教会の司祭より上なのはたしかであるらしい。

卑屈に媚びを売るラーサムの姿を見て、ぼくのなかで何か哀れみに似たものが生まれでた。結局のところ、この男もある意味で奴隷なのだ。地位と権力に媚び従う奴隷。

「何でございましょう、カルネイド様」

司祭の言葉に、ランパーはぼくへ視線を落とした。

「この少年は何ものだ？」

「は、この小僧でございますか？」

「そうだ。いったいどういう事情で教会に置いている？　まさか、お前が慈善に目ざめたわけでもあるまい」

「は、はい」

ラーサムはしばし視線を床に落として考えこむようすだった。きっと、どのように答えるのが最も安全か、計算しているのだろう。どこまでも自分の利益にだけ従う男だ。

「そうですな、実は、この小僧は勇者どのが連れてこられたのです。どうも、道ばたで拾うか何かしたようでして、わたしに預けるといってくださったのです」

「勇者が……？」

ランパーは青い目を細めた。そして、しばらく沈黙したあと、小さくため息をもらし、ラーサムに命令する。

「この少年にしかるべき部屋を用意し、また、仕事を与えよ。この少年はおそらく高い身分の出身だ。それなりの待遇を与えておかないとまずいことになる可能性がある」

「は……？」

ラーサムは小さく首をかしげた。

「お言葉ながら、こいつは何ひとつ常識もしらぬ白痴。そのような身分の出とは思われませぬが」

「この少年は古代カナン語を読むぞ」

「何ですと？」

「ほかの言語も読めるかもしれん。ためしに奥からいくつか本を持ってくるがいい。どうした？　さあ、早くだ！」

「は、はい！」

そうして、ラーサムはあきらかに半信半疑という表情で、奥の図書室から、何冊かの古びた本を持ってきた。どれも秘密の呪文を書き留めた魔法書といわれても信じてしまうくらい、ふしぎな雰囲気がある。しかし、表紙の文字はその雰囲気を裏切っていた。

「『草木辞典』、『ルシアの剣技伝承』、『イシュトリア戦記』、『恋の秘技』――」

ぼくが本のタイトルを順番に読みあげていくと、ラーサムの顔が驚愕でひきつった。

「読めるのか！」

「は、はい」

ランパーがあごで開いてみるよう命じたので、そうする。結果は驚くべきものだった。

読める！

それぞれ異なる文字で書かれた本であったにもかかわらず、どの本もみな、内容を読み、理解することができた。ありえないことに、日本語のほかは、英語も韓国語もフランス語もラテン語も読めないはずのこのぼくが、たしかにいま、見しらぬ文字を読んでいるのだ。どんな魔法かペテンがあるのかはわからないが、どうやらぼくはこの世界のあらゆる、いや少なくともほとんどの言語を読み解き、あるいは記すことができるらしい。異なる言語の本を横に置いて読んでいても、何の痛痒もなく読んでいけるほどだった。ぼくは感激のため、思わず震えた。

「いますぐ、この少年の部屋を変えるのだ」

そんなぼくのようすを静かに見下ろして、ランパーは呟いた。

「この少年はあきらかに語学に堪能だ。どう考えても下層階級の生まれではない。勇者が拾ったというのも偶然ではなかろう。貴族の出身ということも考えられる。へたな扱いをしたら、ラーサム、お前の首が飛ぶこともありえるぞ……！」

「は、はい」

そのときのラーサムの顔と来たら見ものだった。

ぼくは顔がほころぶのを懸命にこらえなければならなかった。

こうして、ぼくはまともな部屋とベッドと食事を与えられ、奴隷身分から解放され、客分として遇されることとなった。

そして、ぼくが頼み込んだために、ナローラはぼくの召使いということになった。純白のエプロンドレスを着込んでぼくの世話をすることが彼女の仕事だ。もちろん、待遇は大幅に改善されることになった。

「ナローラ」

歓喜のあまり思わず抱きつきながら、ぼくはいったものだ。

「きみが正しかったよ！　何もかもきみが正しかったんだ」

すると、ナローラは、とまどいながらも、小さくはにかむように

ほほ笑んだ。

「はい。ご主人さま」

ぼくと彼女の主従関係の、これが始まりだった。

第九話「世界の現状」

こうして、ぼくは奴隷の身分から脱した。

ラーサムは、あいかわらずぼくを疑うような目つきで見てきたが、とりあえずぼくを殴りつけることはなくなった。それどころか、時々、媚びるような態度を見せることすらあった。ぼくの正体が、貴族の御曹司だったなら、とでも考えているのだろう。教会のほかの人びとも、ぼくにふつうに接してくれるようになった。ぼくはきつくあたられた恨みを忘れられなかったが、ナローラが優しく接するべきだというので、そうすることにした。

その効果はてきめんだった。

内心、ぼくへの態度を後ろめたく思っていたひとたちは、ぼくが恨みに思っていないことを言葉と態度で示すと、ほっとして、あきらかに親切な態度になったのである。

人間とはこういうものか、と思う。

正直、そのてのひらの返し方に反感をおぼえないでもなかったが、ここは器の小さなところを見せるべきではない、ということくらいは、ぼくにもわかった。いつまた状況が逆転しないともかぎらないのだから。ぼくはなるべくひとに丁寧に接するように心がけ、そして、気分のよい日常生活という、そのことの報酬を手に入れた。

ぼくの折れ曲がった心はふたたびすこやかに成長しはじめた、といっていいだろう。

ぼくはランパーに感謝するべきだったかもしれない。ぼくの秘められた能力を見いだしてくれたのはかれなのだから。しかし、ぼくは時おり教会を訪れるこの男を好きになることがどうしてもできなかった。その蛇のように冷たいひとみを見ていると、威圧され、不安に駆られるのである。この感覚が正しかったことは、のちに証明される。

「ねえ、ヒロト、お話してよ」

ぼくが自分の部屋で本を読んでいると、教会孤児院の子どもたちがそういって集まってくることがあった。

ぼくは子どもの扱いが得意ではなかったが、粗末な食事でやせ細ったからだの子どもたちを見ていると、無視することはとてもできなかった。自分が同じ体験をしているから、かれらの苦しさがよくわかるのだ。そこで、ぼくはいままで読んだ世界の名作を適当にアレンジして子どもたちに物語ってやることにした。桃太郎ならぬ、オレンジボーイがダークランドへ攻め入って魔物たちをやっつける話はなかなか受けた。

「ヒロトの話はおもしろいなあ。作家になればいいのに」

子どもたちはそういって喜んだものだ。そう甘いものでもないだろう、とぼくは思ったが、しかし、ひょっとしたら、という思いがこのとき芽生えた。何冊か読んでみたのだが、この世界の物語は多く古めかしく形式化、硬直化したものがほとんどだった。名作もあるのだろうが、庶民が楽しむエンターテインメントのようなものは見あたらない。ぼくが日本で楽しんでいた娯楽物語を、この世界で広めてみたらどうなるだろう。そう思った。あるいは、人気を博すかもしれない。このときは思いつきだったが、ぼくはじっさいに小

説を書きはじめた。２１世紀日本の豊穣な物語を、ジャナスリアンに持ち込むのだ！

そして――

ぼくは教会の図書室にこもり、本を読みはじめた。

その図書室は、ぼくの通っていた高校の図書室と比べても、貧相なしろものだったが、知識に飢えていたぼくは、まさに砂漠のなかでオアシスを見つけたように本を読みあさった。

この世界では、本は現代日本よりはるかに貴重なものだったので、大切に扱うことを求められはしたが、基本的にはぼくはあらゆる本を自由に読むことができた。

ぼくが最も必要としていた知識は、この世界の地理、歴史、宗教にかんするものだった。そして、ぼくはこの世界の現状をようやく知ることができたのだった。

この世界、この大陸では、〈東方三カ国〉と呼ばれる三つの大国が覇権を競いあっているらしい。

まず、ぼくがいま住んでいるアイビス王国。

それから、西部の雄、イシュトリア王国。

そして、最大最強の国、ラマヌーン神聖帝国である。

ほかにもいくつか群小国家は存在しているが、この三カ国に比肩するものはなく、すべてが何らかのかたちで三カ国の傘下に入って

いるといっていい状況らしい。三カ国はそれぞれ長所と短所とをもち、実力的に均衡しているが、ラマヌーンの若く野心的な皇帝は、東方統一を企てているともいわれる。ここ数十年続いている平和が、さらにどれくらい続くのか、だれにも見えない状況だということだ。

それが〈東方〉の状況である。

それでは、大陸の〈西方〉はどうなっているのか。

それには魔王が支配する〈ダークランド〉と呼ばれる国々が広がっている。そこには〈ダークランダー〉と呼ばれる邪悪な魔物たちが住んでいて、時おり、〈ダークランド〉を飛び出して〈東方〉に襲いかかってくる。そこは〈永遠に夜が続く国〉とも呼ばれ、魔王の定めた悪夢のような法のほかには、秩序もなく、ルールもない、暗黒の領土であるのだという。この魔王の支配を終わらせることができるのは、ただひとり、〈勇者〉があるのみだといわれている。勇者が操る〈ただひとりのための剣〉と呼ばれる聖剣だけが、魔王の息の根を止めることができるのだと。

現代日本からやって来たぼくにはどうにも信じられない話だが、その勇者には、じっさいに逢ってしまったから、信じるよりほかないのかもしれない。

しかしなあ。

ミュウ・ミュウテイシア。

あのキュートな少女に、邪悪な魔王を倒すなんてことが本当にできるのだろうか？　それはたしかに強かったし、運動神経抜群だったけれども……。

「あまり根を詰められると、おからだに毒ですよ」

そういって、ナローラがお茶を持ってきてくれた。どうやって栽培して茶のかたちにしているのかわからないけれども、このお茶はなかなか美味しい。

ナローラはこのごろ、栄養状況が回復してきたせいだろう、少しふっくらしてきて、痛々しいようなところがなくなった。いまの彼女はとても可愛い。もし同じ高校のクラスにいたら、とても話しかけられなかったと思うくらいだ。しかし、その彼女はいま、ぼくの召使いなのだ。何ということだろう。

純白の清潔なエプロンドレスを着た彼女が、そばで穏やかに笑っていてくれると、ぼくはなんともいえない幸福感をおぼえる。このまま地球に帰れなくてもかまわないかもしれない、と考えてしまうくらいだ。おそらく家では両親がぼくのことを心配してくれているだろうし、帰らないわけにはいかないのだが……。

とにかく、病的にやせている子を綺麗だと思うひともいるだろうが、ぼくは少しふっくらして肉付きが良いくらいのほうが好きだ。だから、いまのナローラはぼくの好みのストライクゾーンど真ん中なのだった。もちろん、ミュウのようなきわだった美貌ではないかもしれないが、あれくらい美人だとかえって気負ってしまうので、そこもいいと思う。

ナローラはいつも穏やかにほほ笑んでいて、薄幸の境遇にもかかわらずしあわせそうで、近くに座っているだけで、ぼくは幸福のおすそ分けをもらっている気分になれた。

「ご主人様」

そのナローラが、何やら真剣な顔をして、ぼくの目を見つめている。何だろう？　ぼくの態度に不満でもあるのだろうか？　できることならいくらでも改善するけれど……。

「え、何？」

そんなまぬけなことしかいえないぼくに対し、ナローラはあくまでも真剣な表情を崩さなかった。ちょっと怖いくらいだ。

「召使いの身で僭越ですが、ご主人様にたったひとつだけお願いがあります」

「ご主人様なんて堅苦しいな。ヒロトって呼んでよ」

「ご主人様！　真面目に聴いてください」

「は、はい」

ぼくはしゅんとした。ナローラくらい柔らかで穏やかな子でも、女の子はやっぱり真剣になると怖い。

「ご主人様、わたしは召使いとしてご主人様にお仕えしています。このまま、一生お仕えしたいと思っています。ご主人様のためなら、何でもできます」

「う、うん。ありがとう」

「それなのに、ご主人様はなぜ、わたしに仕事を命じられないので

すか？」

「仕事？　いや、ふつうに仕事してもらっているけれど……」

「いちばん大切な仕事がまだです！」

「えっと。まさか……」

「そうです」

ちょっとほほを赤らめながら、しかしナローラはためらわず続けた。

「わたしのような女召使いは、ご主人様を夜、お慰めすることが大切なお仕事です。ご主人様、そんなにわたしは醜いですか？　そうだとしても、せめて一度くらいは抱いてくださってもいいでしょうに。まるで手をだそうとすらしないなんて、ひどいです」

「え、えっと、その、うん、まあ、なんだ」

ぼくはあわてふためいて意味のないことをつぶやきつづけたが、ナローラは、ぼくの周章狼狽を無視して、そっとエプロンドレスを脱ぎ、服のボタンをひとつ、またひとつと外していった。

しゅるしゅるという衣擦れの音をたてて、彼女の上着が地面に落ちる。ぼくは、彼女が着痩せするタイプで、意外に豊かなその箇所を持っていることを知った。あるいは、栄養状況の改善とともにそこも回復したのだろうか。

「わたしを、ご主人様のものにしてください」

ぼくは、大きくつばを呑み込んだ。

第九話「世界の現状」（後書き）

というわけで、軽い性描写（笑）であるわけですが、これって、どのくらいなら書いても許されるんでしょうかね。本格的な描写の需要があるようならノクターンノベルズで書いてみようか。

ちなみに、ここまで読んだらわかるかと思いますが、この作品には、勇者、魔王、聖女のほかにも、召使い（メイド）、王女、魔女など、たくさんヒロインが登場する予定です。

こんな職業のヒロインを出してくれ、という要望がありましたら、感想欄によろしく。応えられるかどうかはわかりませんが、善処はします。そろそろ男性も出さないとな……。

第十話「男の勲章」

朝だ。

東からまばゆい朝日が昇ってきてぼくの目を鋭く突き刺す。痛い。いまにも涙が流れ落ちてきそうなくらい、痛い。それはそうだ。昨晩ひと晩、寝ていないのだから。

ベッドに半身を起き上がらせて、腰まで布団をかぶった姿勢のまま、そっと横を見る。そこに、すやすやとしあわせそうに寝ている愛らしい女性の顔があった。

ナローラだ。

そっと、掛け布団をめくってみると、彼女の、輝くような綺麗な肌が視界に入ってぼくは思わずそっぽを向いた。

彼女は半裸のまま、ぼくのとなりで寝ていたのだ。

この状況だと、ぼくがひと晩、彼女と楽しい時間を過ごしたとだれもが思うことだろう。

違う。

ぼくは無実だ。

ナローラには、何も、まったく何ひとつもしていない。ただ、となりで寝ただけ。

半裸の美少女のとなりで指一本ふれずにひと晩を過ごす。これが、どれほどの拷問か、健康な男子諸君にはわかっていただけることだろう。そして、諸君はきっとぼくをあざ笑うことだろう。据え膳食わぬは男の恥という言葉をしらないのか、と。

違う。

違うのだ。

正直なところ、ナローラのからだをいただいてしまいたいと思わないわけではなかった。

否、それどころか、このまま抱きしめてしまいたいと心の底から思った。彼女の意外に豊かだった乳房をもんでしまいたいと思う手を止めるために、どれほど苦労したことか。

自慢ではないが、ぼくはいままで女の子と縁がない人生を過ごしてきた。それが、突然、「わたしをあなたのものにしてください」なんて、悪魔的な誘惑の言葉を吐く少女と出逢うことになったのだから、理性のすべてをかなぐり捨てて襲いかかっていてもおかしくなかったと、本当にそう思う。

しかし、ぼくはどうしてもナローラの裸の胸を抱きしめることができなかった。ナローラはべつに、ぼくのことが好きなわけではないとわかっていたからだ。彼女はただ、職業的義務感とでもいうべきものに駆られてぼくに身を任せようとしているだけなのだ。それを利用して彼女を抱くことは、あまりにも卑怯なことだ、とぼくの21世紀日本人としての理性が叫んでいた。

ほんとうはそんな理性など、袋にもでもつめて捨ててしまいたか

ったのだが、そうもいかず、ぼくはナローラの裸の肩を震える手で掴んで、ナローラにいった。

「ナローラ、正直いって、ぼくもきみに手を出したいよ。でも、ぼくは臆病だから、きみを傷つけてしまうことが怖いんだ」

「そんな――」

「これ以上いわせないでくれ！　きみは可愛すぎて、これ以上格好つけることはできないんだから。こう見えて、いや、そうとしか見えないだろうけれど、ぼくは童貞なんだ。きみみたいな女の子といやらしいことをしたいとは始終思っているよ。でも、頼む。今回だけは格好をつけさせてくれ。お願いだよ、ナローラ」

ぼくは頭を下げた。

ナローラは、びっくりしたようにまなこを見ひらいてぼくを見つめた。

ああ。

ぼくはばかだ。

この世にふたりといないくらいの大ばか野郎だ。

この機会を逃したら、二度とこんな機会は訪れないに違いないというのに、何を格好つけているんだ。もっと欲望に正直になれ。ぼくのなかの性欲が、涙を流さんばかりの勢いで理性に詰め寄った。しかし、ふしぎなことに、理性は負けなかった。たぶん、ぼくはナローラを抱くには、彼女を好きすぎたのかもしれない。それだけの

ことだったのだろう。

ナローラは、ぼくをふしぎそうな表情で見つめると、ふっ、と、男にはわからない何かに気づいた女の表情でほほ笑んだ。そして、いった。

「やっぱりあなたはいい人ですね、ご主人様。それでは、せめて、添い寝をさせてください。それくらい、いいでしょう？」

この誘惑を断れなかったぼくの意志薄弱に呪いあれ。

ぼくは「ど、どうぞ」などとわけのわからないことをいいながらベッドに入り、そして、ナローラは上半身裸というあまりに誘惑的な格好でいっしょのベッドに入ってきた。

彼女は石と化したぼくの耳もとでささやいた。

「わたし、ご主人様のことを、好きになっちゃいました。でも、ご主人様にはきっとこれから先、わたしよりもっと素敵なひとたちがあらわれるでしょう。わたしは、そのとき邪魔にならないようにしますね。でも、いま、このときだけは、あなたはわたしのものです」

それが昨夜のことだ。

それからぼくは、すぐに眠ってしまったナローラを横に、不眠の一夜を過ごした。

そのあいだ、ぼくの脳内で、ひとつの単語が無限リフレインしていたことはいうまでもない。

おっぱい……。

ぼくははちきれそうな欲望をどうすることもできず、ただひたすらに「おっぱい」とくり返し呟きながら、寝ずの夜を過ごしたのだった。

笑ってもらって結構。自分でもこっけいだと思う。しかし、女の子に免疫がない十六歳の童貞なんて、一般的にいってこんなものではないだろうか？　どうか、そうだといってほしい。

「あ、ご主人様。おはようございます」

ナローラが、眠そうに目をこすりながら起き上がった。布団がずれて、当然、それまで布団に隠されていたその胸部があらわになる。

驚いたことに、ナローラはきゃっ、と可愛い悲鳴をあげて、その部分を腕で隠した。そして、茹であがったように真っ赤になりながら、ぼくのことをねめつけた。

「見ましたね」

責めるようにいう。

「み、見ていないよ」

「本当は見たでしょう？」

「見ていない。見ていない。これっぽっちも見ていない」

「じゃあ、なぜ、そんなやましいような顔をなさるんです？」

「この顔は生まれつきだよ。ぼくはいつもそういうふうに因縁をつけられて生きてきたんだ」

「もう。ご主人様の、ばか。後ろを向いていてください」

きのうは自分のほうから迫ってきたというのに、いまさら何が恥ずかしいというのか。ぼくはふしぎでたまらなかったが、いわれた通りに後ろを向いた。どっちがご主人様なのかわかったものではない。

ナローラは、ぼくの後ろで服を身につけたようだった。しばらくして、ふりかえっても良いという合図があったので、そうすると、そこにいるものは、もう、いつも通りの、優しく、あたたかく、穏やかでぼくよりもずっと年上のようなナローラだった。

「ご主人様」

ちょっと照れながら彼女はいった。

「あなた様のお気持ちはわかりました。わたしはただ、あなた様の欲望のままに使われてもかまわない身の上ですが、あなた様のお気持ちはとても嬉しく思います。でも、いつか、本当に好きなひとと出逢えたときは、どうか自分に素直になってくださいね」

そして、彼女はそっとぼくの頬にくちづけた。

「ありがとう、ヒロト」

それはあまりにささやかな声で、あるいはぼくの幻聴に過ぎなかったかもしれない。しかし、ぼくはその声を聴いた瞬間、痩せ我慢して良かったなあ、と思ったのだ。

男なんて結局、いつも痩せ我慢して生きて行くだけの生きもので、それだけが唯一の男の価値なのだ。男はいつもそのことにちゃちなプライドを抱いて生きている。

それはひどく安っぽい細工をほどこされた聖なる勲章そのものなのだ。

幕間「ナローラの独白　奴隷娘の恋」

わたしは恋をしています。

ええ、ええ、信じていただけないかもしれませんが、いま、わたしはある方に恋焦がれているのです。たかが奴隷娘に恋など身分不相応ということはわかっております。しかし、胸に燃えるこの想いを止めることはできません。最も卑しい奴隷にも、心の自由だけはあります。そう、心のなかで恋をすることだけは、奴隷にも自由なのです。そして、そうやって想いを募らせていると、ただそれだけで、なぜかしあわせになれるようです。

わたしがお慕いするその方は、名を、ヒロト様と仰られます。英雄でもなく、美男でもありませんが、わたしにとっては、ほかのだれよりも大切なお方です。

ヒロト様は、初め、わたしと同じ〈教会奴隷〉の身の上でした。何でも記憶をなくされたということで、この世界での常識を何もご存じないようでした。

ヒロト様とわたしはすぐに仲良くなりました。奴隷には、たがいに相憐れむよりほかにすることはないのです。わたしたちは、たがいの境遇を憐れみあい、なぐさめあいました。

そのとき、わたしは、ヒロト様にこのようにいったものです。

「ヒロト、希望を捨ててはいけないわ。何が起こるかわからないのよ」

しかし、そういうわたし自身は、希望などとうの昔に捨てていました。なぜなら、わたしは生まれてすぐ教会に売られた身であり、かれこれ十数年も教会奴隷として暮らしてきていたからです。そのあいだには、色々なことがあり、わたしは、あらゆる希望を捨て、心を凍らせることだけで生きてまいりました。

わたしはこのまま、奴隷として生き、奴隷として死ぬのだ。そう思っていましたし、子どもの頃こそ辛いと思っておりましたものの、そのうちたいして苦しいとも感じなくなりました。そうです。わたしは物であり、人ではないのです。物が辛い苦しいと嘆いたりするでしょうか？

ひとの目には、わたしは優しい娘とも、あたたかな女とも見えたかもしれません。しかし、その実、わたしの心は固く凍りついたままだったのです。そう、わたしの人生にはたしかにそうなるだけのことがございました。わたしは十三の頃には既に処女ではなかった、と申しましたなら、わたしの過ごしてきた人生の中身がおわかりいただけるでしょうか。

ひとのように生き、動いてはいるものの、わたしは壊れた人形でした。そうして、一生そのままであろうとそう思い込んでいたのです。そうして、内心ではヒロトも早く壊れてしまえばいいのに、そうすれば苦しくなくなるのに、とそんなことを考えていたのです。ほんとうにひどい女だと思います。

ところが。

ヒロト様はあるとき、奴隷の身分から客分へとのしあがりました。それはわたしにとっては望んでも決して得られるはずのない奇跡でした。そして、ヒロト様は――ご主人様はなんと、わたしを召使い

に指名することで奴隷の身分から救ってくださったのです。一生、奴隷として生き、奴隷として死ぬはずのわたしが、なんということでしょう、人並みの自由を得たのでした。

しかし、そうはいっても、わたしの心は奴隷です。ただ、ご主人様に歓んでもらうことのほかに歓びはありません。このときもまだ、わたしの心は凍てついたままで、ただ表面だけをひとがましくつくろっていただけだったといっていいでしょう。

そして、あるとき、わたしはご主人様にわが身をさし出しました。それだけがわたしがさし出せるものでしたし、ご主人様は歓んでくださるのではないかと思ったのです。わたし自身にはよくわかりませんが、わたしのからだは、殿方にとっては、それなりに楽しめるものであるようなのです。ご主人様も楽しんでくださったら良いな、と思いました。べつだん、むりやり犯されてもかまいはしません。その程度のこと、いままでも何度もありましたから。しかし、ご主人様はお優しい方だから、そうはなさらない。そこで、わたしは自分からあの方を誘うことにしたのです。

それなのに。

ご主人様は、わたしを拒みました。

彼はいったのです。

「ナローラ、正直いって、ぼくもきみに手を出したいよ。でも、ぼくは臆病だから、きみを傷つけてしまうことが怖いんだ。これ以上いわせないでくれ！　きみは可愛すぎて、これ以上格好つけることはできないんだから。こう見えて、いや、そうとしか見えないだろうけれど、ぼくは童貞なんだ。きみみたいな女の子といやらしいこ

とをしたいとは始終思っているよ。でも、頼む。今回だけは格好をつけさせてくれ。お願いだよ、ナローラ」

わたしには初め、彼がいっていることの意味がわかりませんでした。わたしのからだが欲しいなら、抱けば良いではありませんか？

わたしなどただの物なのですから、いくらでも好きなように踏みにじり、犯せば良いのです。それなのに、彼はわたしを傷つけたくないと、そう真剣にいうのでした。

そうです。

このとき、生まれて始めて、わたしは物としてではなく、人として扱われたのでした。それも、そのひとはわたしのような卑しい奴隷娘のことを、宮廷の姫君か何かでもあるかのように扱ってくれたのです。夢のようでした。

ああ。

わたしは思いました。

なんだろう、この胸から湧きでるあたたかなものは。

ひょっとして、これが、あの、物語に聴いた恋ごころというものなのだろうか。わたしは、このひとを好きになってしまったのだろうか。わたしのような奴隷娘にも、ひとを好きになることができたのだろうか。そんな夢物語のようなことが、本当にあるのだろうか。

わたしは自分が歓んでいることに気づきました。歓び、などという感情を覚えたのは何年ぶりでしょう。しかし、それはたしかに歓びにほかならなかったのです。

わたしはそのとき、薄くほほ笑んだと思います。目の前のひとが、愛しくて、愛しくて、苦しいような気がしました。このひとを抱いて、犯して、壊して、自分のものにしたいという烈しい劣情がわき上がります。わたしには、きっと、それができる。

でも。

気づくと、わたしのくちびるはこんな言葉を発していました。

「やっぱりあなたはいい人ですね、ご主人様。それでは、せめて、添い寝をさせてください。それくらい、いいでしょう？」

今度はご主人様はうなずいてくださいました。

だから、わたしは彼の耳に向けてこうささやいたのです。

「わたし、ご主人様のことを、好きになっちゃいました。でも、ご主人様にはきっとこれから先、わたしよりもっと素敵なひとたちがあらわれるでしょう。わたしは、そのとき邪魔にならないようにしますね。でも、いま、このときだけは、あなたはわたしのものです」

そう。

いま、このときだけは、ご主人様はわたしのもの。わたしはご主人様のもの。

たとえ抱きあわなくても、かれの肉をこの身で感じなくても、わたしたちはひとつだ。わたしはそう、本心から思いました。

そして、わたしは彼の横で寝ました。そのひと晩を、わたしがあっさりと寝てしまって過ごしたと、ご主人様は思っておいででしょう。しかし、それは違います。わたしは、しあわせで、しあわせで、とても寝ることなどできなかったのです。ただ、寝たふりをしていただけでした。いまにもご主人様が気を変えてわたしを抱いてくださるのではないかと思い、しかしそんなことはありえないとも思い、わたしは千々に乱れる心を抱えて、その夜を過ごしました。

その一夜で、わたしは生まれ変わったのだと思います。物から、人に。

もちろん、わたしの心が卑しい奴隷娘であることに変わりはありません。恋など、わたしのようなものにはいかにも僭越に過ぎる想いです。だから、いつの日かきっと、わたしの身にはむごい罰が下ることでしょう。

しかし、いま、わたしはしあわせです。

わたしはご主人様に振り向いてほしいなどということは望んでいません。ただ、ときどき、ご主人様をからかったり、誘惑してみたりするだけで、わたしは十分に幸福なのです。

わたしのヒロト。

あなたを愛しています。

あなたがわたしを想ってくれている、その十倍も、百倍も、あなたを想っています。そして、その想いがわたしを内側からあたためてくれるのです。それはわたしの心のともしび。

いつか、この想いを、あの方にしっていただけたら、とそう思って、わたしは暮らしているのです。たとえご主人様に振り向いてもらえなくても、あの方の胸に、消えない疵をのこしてみたいとわたしは思います。一生涯、決して消えることのない疵を。

わたしは恋をしています。

奴隷娘の恋です。

しかし、それでもわたしは、己のこの想いが偽りない真実であると、いまも、そう、信じているのです。

いつかご主人様がわたしを忘れ、この恋が散るとき、わたしのいのちのろうそくも、ともに消え去ることでしょう。その日は、そう、きっと、それほど遠くはありません。

幕間「ナローラの独白　奴隷娘の恋」（後書き）

第１章はここで終わりです。

この作品は１章１０話前後で進み、全２０章、２００話前後での完結を目標としています。ちなみに各章のタイトルは以下のようなものを予定しています。

「淫魔事件」
「吸血鬼ジェナイト」
「勇者の実家へ遊びにいこう」
「ダークランド潜入」
「無限迷宮」
「魔剣の呪い」
「大団円」

しかし、これらはじっさいの展開に合わせて、フレキシブルに変化してゆきます。確実にいえることは、ここに書かれたタイトルで表されるようなイベントを消化し切らないかぎり終わらないということです。

もしこの作品をお気に入りになられたなら、お気に入りにいれたうえで評価ポイントをいれてくださると大変助かります。もっとも、長く続く作品ですのですぐに評価する必要はありませんが。そのほか、作者にご意見がありましたら感想欄によろしくお願いします。なるべくご意見は聞きいれます。

さて、それでは物語に出発しましょう。冒険の大地があなたを待っています。

第一話「勇敢な少女」

風が吹いている。

涼やかな良い風だ。

初夏を過ぎて盛夏を迎えようとしているこの〈銀作りの都〉を吹き抜けてゆくその風を頬に受けながら、ぼくはナナルルのとある裏路を歩いていた。このあたりはわりと治安も良く、安心して歩くことができる。石作りの街を眺めながら石だたみのうえを歩くのは、異国を観光しているようで、なかなか悪くない気分だった。

ナナルルはたしかに美しい都市だ。ひとつひとつの建物がひどく奇妙なかたちをしていて、見ていて飽きない。炭酸飲料の瓶を思わせるかたちをした建物や、羽根をひろげた鳥のようなかたちをした建物まであって、この世界の建築技術に驚かされるばかりだ。いやまあ、教会の図書室で乱読したぼくは、この世界に〈宝珠〉と呼ばれるものがあり、その力が生活の様々な側面で活かされているということを知識としては知っていたのだが、しかし、それでも、じっさいに奇妙な建物の数々をまのあたりにすると、圧倒された。

「本当にこの街は変わった建物が多いね」

となりを歩いているナローラにそういうと、彼女はくちびるに一本指をあてた。

「たしかにその通りですけれど、うわさに聴く古代魔導帝国の廃墟はこんなものではないそうです。ありえない角度で建っている建物

とか、柱とか、ひとの視覚を狂わせるようなものがたくさんあるところもあるとか」

古代魔導帝国、か。

かつて、世界が〈東方〉と〈ダークランド〉に分かれるよりもっと前、カナン帝国と呼ばれる巨大な超帝国が存在していたという。その帝国は〈宝珠〉の力で船を浮かばせ、世界の秘密を探り、しかし最後には神の怒りにふれて亡びたのだという。その〈廃墟〉と〈遺産〉はいまも各地にのこされており、〈冒険者ギルド〉の戦士たちの格好の遊び場となっている。何かひとつでも古代帝国の遺産を手にいれれば、それだけで一生安楽に暮らせるほどの富と名声が手に入るのだ。もっとも、それにふさわしい危険と困難が伴うことはいうまでもないが……。

たとえば、このナナルルの北にある〈黒の森〉にも帝国の廃墟が眠っているといわれているが、だれもそこまでたどり着いて宝物を手に入れた者はいないのだ。一攫千金を狙って森に挑むものは数しれないが、生きて帰ってきたものはほとんどいないという。

それにしても。

ナローラはさりげなくぼくの腕をとって、組んだ。ぴったりとからだをくっつけてくるものだから、彼女の胸の感触が伝わってきて、その、困る。

先日のことがあって、ぼくのからだはあきらめてくれたのだと思ったが、そのあと、彼女はこうして無邪気にからかうような誘うようなことをしてくるのだった。ぼくの理性はつねに試されている。

そうかといって、抗議してみると、たとえばこういう会話になる。

「あ、あの、ナローラさん？」

「はい」

「その、む、胸があたっているんですけど……」

「ええ、そうですね」

「その、淑女のたしなみとして良くないんじゃ……」

「わたしはただの奴隷女です」

「その、そういうことをされるとぼくも変な気になるんだけれど……」

「いつでもなっていただいてけっこうです」

「もう！　ぼくだって男なんだから襲いかかるかもしれないよ？」

「ぜひ、お願いします」

「ナローラ！」

ぼくが悲鳴をあげると、彼女はぼくの目を正面から覗き込んで、妙に真剣な顔をしていうのだった。

「いいですか、わたしはご主人様を大好きなんですから、誘惑するに決まっているじゃないですか。それに耐えられるかどうかはご主

人様の問題です。わたしのしったことじゃありません。それに、わたしに誘惑をやめさせたかったらひと言こういえばいいだけです。お前なんて嫌いだ、近寄られると迷惑だ、って」

「そんなことといえるわけないじゃないかあ」

ぼくは泣きそうになったが、正直、ナローラのふかふかの胸の感触は気持ちよかったので、強く抵抗することもできないのだった。

男って、ほんとうにばかだ。

そういうわけで、ぼくたちは仲良く路を歩いていた。奴隷だった頃の生活を考えると、この自由さはすばらしいのひと言につきた。その前はさらに自由な学生の身だったわけだが、もう、その頃のことは何だか夢だったような気がしている。

と。

ぼくたちがある広場に出た時、そのまんなかあたりで何か騒動が起こっていた。

「お赦しください！」

十一、二歳とおぼしい子どもが、道に平伏して頭をこすりつけている。

「わざとではなかったのです。どうか、どうか――」

見るからに薄よごれて、貧しそうな少年だった。

その子どもの前に、ひとりのでっぷりと太った男が怒りに震えながら立ち尽くしている。服装から、貴族らしいことがわかった。そして、その青い服の真ん中には小さなしみがついている。どうやら、この少年がぶつかって、彼の服にしみを作ってしまったらしい。

「ええい、これが許せるか！」

貴族は芝居がかった口調で騒いだ。

「初代以来、十三代続く偉大なアサンドラ伯爵家――の親戚筋にあたるこのロスタムの服に、こともあろうにこのような醜いしみをつくるとは。手打ちにしてくれるからそこになおれ！」

「お、お許しを。おれには食わせてやらなきゃならない妹もいるんです。おれがここで死んだら、妹は、そして病気の母さんはどうなるか――」

「知ったことか！　さあ、その素っ首、ここに落としてくれようぞ」

ロスタムと名のる貴族は興奮と自己陶酔でひくにひけないところまで来てしまっているようだ。

群衆からどよめきが起こる。

皆、少年の身を案じながらも、どうすることもできないようすだった。この世界、この国では、貴族あいてには平民は何をどうすることもできないのだ。貴族に逆らえば、待ち受けるものは死――そういう、不条理なルールがまかり通っているのである。

「ナローラ」

ぼくは小声でささやいた。

「いまから、あの少年をさらって逃げるから、きみはひとりで帰ってくれ」

「え？」

「ああ、べつに勇気とか正義とか、そういうもののためじゃないよ。ただ、目の前でひとが殺されるところを放置することには耐えられない気がするんだ。ぼくは軟弱だから。ここにあの〈勇者〉がいてくれたらいいんだけれど、ざんねんながらそういうわけもいかない。だから、ぼくが助ける。きみは巻き込まれないようにしてくれ」

「そんな、ご主人様――」

べつにぼくは格好をつけたわけではないし、勇気があったわけでもない。ただ、じっさいに21世紀日本人の意地みたいなものが、ひとが斬り殺されるところを座視することを赦さなかったのだ。ぼくはだれでもきっとこうするに違いないと思うことをすることにした。

しかし。

そのとき、群衆の後ろのほうから何かがすごい勢いで飛んでロスタムの服にぶつかった。べちゃり、という音をたててその服に大きな大きなしみができる。

だれかが屋台の露台から果物を取り出して投げつけたのだとわかったのは、次の瞬間だ。群衆の視線が一箇所に集まる。

そこで、ひとりの少女が、果物を投擲し終わったポーズのまま、ロスタムを睨みつけていた。

第二話「トラブルメーカー」

少女は、何ごともなかったかとのように懐から手巾を取り出して、手をふいた。自分が注目の的になっていることなど、まったく意に介してもいないようだ。

肩まで絹糸のような黒髪をのばした、悽愴なほどの美貌の娘だった。ぼくはこれほど綺麗な顔かたちの人間を、たったひとりしか見たことがない。あの〈勇者〉ミュウ・ミュウテイシアだ。しかし、ミュウがどこか少年めいた愛嬌をそなえていたのに対し、この少女の容姿はあまりに完璧でとげとげしさを感じさせるほどだった。何か烈しい情念を秘めて、鋭くかがやく黒い瞳が、その印象をさらに強くしている。ようするに、近づきがたい美人のいちばん極端なかたちが、ぼくの目の前にいた。

「小娘」

あまりの出来事に茫然自失としていた横暴貴族と、その従者らしい男が、少女のほうを睨みつけた。

「正気か。貴様がいま汚した服がだれのものかわかっているのだろうな！」

ひと怒鳴りなれているのだろう、雷鳴のような一喝だった。並の少女なら、追いつめられたうさぎのように縮こまるところに違いない。この少女もそうするだろうと、だれもが考えたと思う。ところが、そうはならなかった。

少女は、ひと目でそうわかるほど冷たい軽蔑を込めたまなざしで

貴族を眺めたかと思うと、路につばを吐き、こういい捨てたのである。

「ばかじゃないの？　あんたじゃあるまいし、だれが無意識のうちに果物を投げるっていうのよ。何よ、どっからどう見ても低能貴族じゃない。その口、ここまで臭い匂いがただよってくるんだけれど、さっさと閉めてくれないかしら。公害だから」

しいん、とその場が静まりかえった。

あまりにもひどい暴言は、それが暴言であることに気づくまで、時間がかかるものだ。このときもそうだった。だれもが、いったいこの少女が何をいったのか、一瞬では理解できなかったのだ。凍りついたような数秒が過ぎ、そして、彼女の言葉の意味に気づいた人びとは一様に青ざめた。

何てことを！　あの子、殺されるぞ！

その場にいた全員がそれぞれ、そのように考えたのである。

見ると、貴族の顔は、ひとの顔がこれほど赤くなれるのかと驚かされるほど真っ赤に茹だっていた。怒りのためにひどい形相となり、気品のかけらもない。

それを見た少女は生意気としかいいようがない口調でさらにたたみかけた。

「おお、こわい。ひとを見ては威張ることしか能がない貴族さまはほんとにこわいわね。ふん、どうせ自分の力では何ひとつやることもできない能なしなんだから小さくなって生きていけばいいものを、

平気で大手をふって歩いているんだから恥しらずは恐ろしいわね。何、その真っ赤な顔。あんたみたいな恥しらずの化け物でも、少しは恥ずかしいという思いをしっていたのかしら？　そうだとしたら、謝らなくちゃね。恥しらずなんてごめんなさい、ただの醜い豚野郎だったのに、ってね」

秀麗をきわめる容姿に反して、なんという口の悪さ。

これはだめだ。血がふる。だれもがそう考えたことだろう。

貴族はもはや一言もなく、いや口では勝てないと判断したのかもしれないが、とにかく腰間の剣を不器用に抜き放って、少女へ向けてかけ出した。

だめだ。

「お待ちください！」

気づくと、ぼくは、その貴族の突進のまえに土下座していた。

「この娘は自分が何をいったのか、わかっていないのです。どうか閣下の広いお心をもってご寛恕くださいませ！」

貴族は、かすかにとまどったようすで、ぼくの姿を見下ろした。

「何ものだ！　貴様、邪魔立てするようなともに斬り捨てるぞ！」

「は。わたしはヒロトと申す者。〈勇者〉ミュウ・ミュウテイシアどのの友人にして、そこの大教会で客分をしている身にございます。閣下、どうか、どうか、この娘にご容赦を」

「勇者だと？」

貴族の口調がかすかに、しかし、はっきりと変わった。困惑と、計算。

「貴様、勇者と知りあいなのか？」

しめた、とぼくは思った。釣り糸にかかった。

「はい。〈光の勇者〉ミュウ・ミュウテイシア様は、わが命の恩人。わたしが盗賊どもに襲われて難儀しているときに風のようにあらわれ、助けてくださったのです。そして、わたしどもはふしぎと意気投合し、親友と呼び合って、後日の再会を約して、別れたのです」

半分は嘘。しかし、半分は真実だ。これでだまされてくれれば助かるのだが。

「その言葉、まことか？」

「神に誓って」

「〈勇者〉の友人だと？」

「はい。ミュウ・ミュウテイシアはわが同胞にございます」

ただの平民ではなく、〈勇者〉の親友となれば、斬り殺せば大きな問題になる。これで、この男が剣を納めてくれれば、あとはどうにかなるはずだ。そう思った。

しかし、男は、怒りのために計算を忘れることにしたらしい、ぼくの言葉を言下に否定して、剣を振りかぶった。

「ばかめ、そのような戯言、だれが信じるものか。貴様も虚言の責を取るがいい！」

剣が振り下ろされる。ぼくは恐怖のあまり、思わず目をつむった！

命がすり減るような数瞬が過ぎ――しかし、剣はついに落ちてくることはなかった。おそるおそる見あげると、もう一本の剣が、男の剣をかるがると受けとめていた。

「ミシア！」

美貌の少女がその剣の主に抱きつく。それはまだ二十代前半と思しい若々しい女性だった。銀いろの髪を短く刈り込んでいる。少女ほどではないが、なかなか端正な容姿のもち主だ。

「貴様！　何やつだ！」

男の怒号を、彼女は平然と受け止めた。剣をくと、その柄の紋章をを男に向けて見せる。

「わたしは護法騎士ミシア。そうと知っても相手取るかな――？」

「護法騎士――！」

赤く茹だっていた男の顔が、さあっと青ざめていった。もごもごと何かつぶやく。

「いや、そうとわかれば、問題ない。護法騎士どの、これで、わたしは失礼する」

そして、男は従者を蹴っぽりながら、どこかへ去っていってしまった。結局、男の名前も、素性も、わからなかった。この男とは、その後、二度と逢うことはなかった。

わあっと喝采が起こり、人びとがぼくやもともと絡まれていた少年の背中を叩いてきた。嬉しがっても良かったところだが、正直、命の危険をくぐり抜けたショックで、何も感じなかった。

「きっと助けてくれると思っていたわ、ミシア」

べたべたと甘えるように抱きつく少女に、ミシアと呼ばれた女性はため息をついた。

「まったく毎度、無茶をなさる。お怪我をされていたらわたしの首が飛ぶところでしたよ」

「あら、わたしには神と救世主さまのご加護があるもの。あんな似非貴族に斬られたりするわけがないわ」

少女は澄ましていうと、息を切らしているぼくに話しかけてきた。

「そこのきみ。ひとのことはいえないけれど、無茶をしたわね。勇者の友だちなんて、ハッタリもいいところだわ」

「本当だよ」

ぼくは荒い呼吸を整えながら答えた。

「ミュウ・ミュウテイシアは、ぼくの友人だ。向こうはそう思っていないだろうけれど」

少女はかるく目を円くした。もともと並外れた美貌だけに、そういう表情もとても可愛い。

「ふうん、どうりで勇気があるわけだ。感心したわ。わたしの護衛に雇ってやってもいいくらい。わたしはターニャ！　また逢うことがあったらお話しましょう。じゃあね！」

そういって、少女は、ごほう騎士を名のるミシアとともに、あっさりと去っていった。

「なんだったんだ」

ぼくはほとんど腰が抜けていたので、ナローラに助け起こしてもらった。

まさか、この少女と本当に再会することがあろうとは思わなかった。つくづくぼくは甘いと思う。この少女、〈ジャナスリアン一のトラブルメーカー〉とぼくの運命は、なぜか太い糸で絡み合っていたらしいのである。

第三話「覆面作家」

「どうでしょう？」

内心、緊張にふるえながら尋ねると、男はじろりと上目遣いでこちらを睨んだ。

「ふむ」

そしてふたたび原稿に目を落とし、一から読みはじめる。しばらくすると、ぼくは緊張感に耐えかねて、もう一度訊いてみた。

「どうでしょう？」

男はいかにも気に入らなそうな目つきでまたもこちらを睨んだ。

「ふむ」

そしてさらに原稿を読み進めた。痛いような時が過ぎてゆく。そうして、どれくらい経ったことだろう。何しろ時計がないものだから正確な時間はわからないが、男はふうっと大きなため息を吐き出すと、お茶をひと言、飲み込んで、いった。

「めちゃくちゃだ」

心臓を杭で突かれたような気がした。やっぱりそうか……。

だが、男は、こちらの気分などまるでおかまいなしに先を続ける。

「物語を語る規則をまるでわきまえておらん。主人公は奇人だし、叙述のルールは守られていない。必要なことが書かれていない一方で、不必要なことが書かれてある。いやはや、まったく、こんな物語は読んだことがない。まるでめちゃくちゃだ。しかし――」

男は、大きく破顔した。

「この作品は、おもしろい！」

それまでの狷介な印象が一気に崩れる。男――切れ者編集者のタイナムさんはその場で立ち上がると、ぼくに握手を求めてきた。仕方なく、おずおずと手を出すと、かれはそれを熱烈に握ってきた。

ぼくはようやく安心して、ほっと吐息をついた。

「そうですか。おもしろいですか」

「ああ、新時代を切り拓く名作になるだろう。文章も様式もめちゃくちゃだが、そこがいい！　何より、このだれもしらないことを推理であてるという発想が新しい。いったい、どこからこんなことを考えだしたんだね？」

「それは、その――」

「ふむ、作家自身にもわからないという奴か！　きみは天才なのかもしれんね。いや、失礼した。ムラカミ先生。ぜひ、当社であなたの作品を出版させてください。これは、貸本史上空前のヒットとなるぞ！」

事情を説明しよう。

以前、子どもたちに作家になればいいといわれたぼくは、一念発起し、小説を書きはじめたのだった。といっても、ぼくにそれほどの才能があるはずもない。この世界の様式に合わせたものを書くことは不可能だ。

それでは、ぼくにできることは何か？

異世界――地球の名作の数々を応用することだ。

たとえば、この世界には「推理小説」という概念がない。「ＳＦ」という概念もない。この世界にはまだ、エドガー・アラン・ポーも、ジュール・ヴェルヌもいないのだ。いい方を変えると、だれかがポーやヴェルヌになれるチャンスはのこされているということである。

そこで、ぼくがなることにした。

ぼくが読書を趣味にしていることは語ったと思う。じっさい、ぼくは相当量の本を読んできた。それらの本の内容を、今度は創作に応用してみることにしたのだ。完全な盗作をすることはさすがに良心が痛んだから、ただアイディアの中核をいただくことにした。推理小説やＳＦの世界では、先人のアイディアを応用してあらたなものを付け足していくことは常識だから、この程度なら盗作とはいえないだろう。

いや、それでも、この作品を、日本で発表したなら、盗作だといわれたかもしれない。しかし、ぼくはほとんど罪悪感をおぼえなかった。どう考えても巨匠たちの著作権はジャナスリアンにまで及ぶとは思えなかったし、ぼくがこうすることでだれが迷惑をこうむるとも思えなかったのだ。ぼくはべつに偉大な芸術家になりたいわけ

ではない。お金が懐に入ってくればそれで良いのだ。

そして、ぼくの目論見は成功したのだった。

ぼくが書いた『私立探偵エルキュール・ホームズ』は、あるいは、日本の新人賞に応募したら二次選考あたりで落選するしろものであるかもしれない。しかし、この世界には存在しないアイディアが大量につまっている。探偵は露骨にシャーロック・ホームズ（や、エルキュール・ポワロや御手洗潔やメルカトル鮎）を意識した傲岸不遜な正義感で、まるで独創性がないのだが、この世界では独創的なのだ。そして、かれが見ぬくトリックも、ごくシンプルなものなのだが、この世界では圧倒的に斬新なはずだ。この世界には魔法のような〈トリック〉という力があるから、その扱いには苦労したけれど、とにかくぼくは書き上げ、つてをたどってこの出版社に持ち込みしたのだった。

そして、ぼくは勝った。

ぼくの書いた稚拙な本は、みごと出版されることになったのだ。

完全にぼくの能力といえるものではなく、ただぼくの世界の財産を利用しているに過ぎないわけだが、それでもうれしかった。この世界に来て初めて、自分の能力が認められたような気がしたからだ。思えば、この世界に来てから、野盗に襲われるか、奴隷にされるわ、横暴貴族に斬られそうになるわ、ろくなことがない。

しかし。

この原稿の出版は、その流れを変える一手となるように思えた。

「ところで」

と、切れ者編集者は訊ねて来た。

「名前はどうするね？　ムラカミヒロトのままいいかね？」

「いえ――そうですね、女性名のアリシア・ラーダットにしてもえらますか？」

「ほう。なぜ？」

「ある理由で、正体を知られたくないんです」

「ふむ？」

「だめでしょうか？」

「こちらはかまわんが。きみ、有名になりたくないのかね？」

「まったくなりたくありません」

ぼくは正体を知られれば死が待っている〈漂流者〉なのだ。有名になどなったらどうなることやら。ぼくの作品が有名になってくれれば十分だ。

そして、このあと、ぼくは作品の細部と出版の条件を煮詰めたあと、契約書にサインして帰った。少し雨がふっていたが、それこそ『雨に歌えば』のようにダンスしたい気分だった。うちに帰ったら、ナローラを思いきり抱きしめてやろう。どんな顔するかな？

しかし、実はぼくの喜びようはそれでも足りないくらいだっただろう。この頃、このアイルズの国では出版事業はまだそれほど大きくなく、貸本が中心になっていた。また、この世界での本はぼくたちの世界よりも貴重だったが、だからこそ売れれば金になる商売でもあった。

そして、ぼくの怪作『私立探偵エルキュール・ホームズ』は売れた。異常なまでに売れた。評判が評判を呼び、あっというまにこのナナルルで知らないものはいなくなり、やがてアイルズ全体で読まれるようになっていった。そしてまた、ぼくがとまどっているうちに、ぼくのふところには莫大な印税が入ってきた。

この一冊で、実に、ぼくの生活費を百年分払ってもお釣りが来るくらいのお金が入ってきたのである。そして、ぼくは憑かれたように新作を書き（『あしながおじさん』ならぬ『神さまおじさん』）、それもまた爆発的ヒットを記録した。今度もまた使い切れないくらいのお金が入ってきた。

覆面作家アリシア・ラーダットは人びとの話題の中心となり、その正体を探る議論があちこちでくり広げられた。あたるはずもなかったのだが。あるひとがいうにはアリシアは貴族の令嬢で、正体を明かすわけにはいかないということだった。なるほど、もっともらしい説明だが、外れている。本当はただ金がほしいだけの地球人が書いているのだ。名作文学よ、ごめんなさい。

そして、気づくと。

ぼくは、あっというまに金持ちになっていた。

第四話「聖女との再会」

オーバーナイトセンセーション。

つい昨日までひとに養われていた身が、突然に、お金持ちになる。こういうとき、ひとは自分の身の程を忘れ、贅沢や浪費に走ったりする。しかし、ぼくはふしぎと、手もとの金が自分のものだという気がしなかった。たぶん、ここがぼくにとって異世界だったからだろう。異世界での貨幣カペルは、やはり、故郷の円ほど価値があるようには思われなかったのだ。それでも、お金があるということはありがたかった。生活のあらゆる側面において、気がねせずに済む。

使い切れないくらいのお金だから、ひとのために使ってみようという気になる。そこで、ぼくは教会の困っている知人に金を貸すことにした。かれらは、なぜぼくが急に羽振りが良くなったのかわからないようすだったが、貸りる立場である以上、文句はないようだった。一応、借用書は書いてもらうが、貸したとはいってもあげたようなものである。それで、自分の人間環境が良く変わるなら安いものだと思った。

金に余裕ができても、ぼくは教会を出てゆく気にはなれなかった。ひとつには、あの勇者ミュウ・ミュウテイシアが訪ねてくるのではないかという希望を捨てられなかったということもある。そして、慣れない土地でひとり暮らしをするよりはこの教会で暮らしていたほうが良いように思ったのだ。まあ、ようするにただ怠惰だったというだけのことかもしれない。

そして穏やかに日々は過ぎ、ぼくはナローラをからかったり逆にからかわれたりしながら、ぼんやりと暮らしつづけた。生活基盤も

できたことだし、このまま、もとの世界に帰ることができなくてもかまわないような気がしてきていた。両親にだけは申し訳ないが、ほかにもきょうだいはいることだし……。

そのうち、ぼくが金を貸した人びとは、恩に着たというよりは後ろめたさからだろうが、ぼくに何かと便宜を計ってくれるようになった。むしろ、かれらはそのためにぼくが金を貸したのだと判断したらしい。ぼくのもとに、いろいろな情報などを持ち寄ってきた。本当に、ぼくにはそんなつもりは一切なかったのだが。

ある日。

「聖女？」

ひとりの男の言葉に、ぼくは首をかしげた。

「そう、さる貴族の宴にて、いと気高き聖女さまが下々のものと交流してくださる機会があるそうなのだ。こんなことはめったにあることではないが、間違いがない情報だ」

「その聖女さまはいま、ナナルルにいるのですか？」

「ああ、お前に説明してもわからないだろうが、ある大きな儀式があってな、しばらくはナナルルに滞在していたのだ。そろそろナナルルを出るはずだが、その前にその貴族の宴に出ることになっていたらしい」

「へえ。それはすごいですね」

聖女。

それは神に選ばれた子どもにして、この世界を席巻する宗教〈銀十字教〉の頂点に位置する存在。チベット仏教におけるダライ・ラマか、キリスト教におけるマリア様みたいなものだ。その権力は各国の王侯の上にあり、また、その聖なる力は数しれぬ奇跡を起こすという。この世界にあって聖女は最も神聖な存在であり、彼女を侮辱したら大貴族といえども生きてはいられない。勇者が「いつか魔王を倒すかもしれないという希望」だとすれば、聖女は「この世界を守りつづける光」なのだ。

聖女か。

さぞ神聖で気品あふれる女性なのだろうと思ったが、ぼくは正直、あまり興味がなかった。教会に厄介になっていて何だが、あまり宗教などとはかかわりになりたくないし。そこのところ、ぼくはあくまで現代日本人なのだ。

しかし、説明した男は、ぼくの生返事を聴いても興奮冷めやらぬようすで、続けた。

「そこで、だ。実はその宴に参加できるってがあるのだ！　ということは、聖女に拝謁することができるかもしれんということだ！」

「はあ。それは良かったですね」

「何をいっている。ヒロト、きみが拝謁するんだぞ」

「え？　ぼくが？」

「そうだ。聖女に逢って、お言葉のひとつでも賜ったなら、きみの

人生にどれほど益になるかわからん。「聖女に逢ったことがある」という事実が重いのだ。まして、聖女に気にいられでもした日には、一気に上流階級の仲間入りだぞ！」

「ぼくはべつに仲間入りしたくないんですけれど」

「ばかな！　ひととして生まれたからには向上心を持て！　必ず上流階級に割り込んでみせるくらいのことは考えるんだ。ところで、だ」

そのひとはひとつ、わざとらしく咳払いをした。

「最近、物入りでな、少々融通していただけると助かるのだが――」

「はいはい。いいですよ」

「そうか。それは助かる。聖女の宴の件、任せておけ！」

その頃、ぼくは新作の執筆で忙しかったので、正直、そんなところに行きたくもなかったのだが、押し切られるかたちで出席することになってしまった。

どうも、ぼくから金を借りたひとたちは、ぼくがコネを作りたがってしていると思い込んでいるらしい。そう思い込んでくれるならそれで問題ないので、放置することにした。

付記。

「聖女さまはそれはそれは美人らしいですよ？」

と、ナローラはいやみっぽくいったものだ。

「う、うん。そうらしいね。それがどうしたの？」

「べつに。ご主人様は綺麗な女の人を見るとすぐふらふら付いていっちゃうから困ったものだな、って思って」

「そ、そんなことないよ」

「そうですか？　ご主人様の本心はナローラにはお見通しなんですよ」

と、ほんとうに何でもお見通しのような目で見つめられると、その通りのような気がしてくる。もちろん、美人はひと目見てみたいけれど、ただ押し切られただけなのに。このごろのナローラは、なんだかちょっとこわい。

そして――

否応なく、その宴の日がやって来た。

詳細に語ることはよしておくが、それは盛大な宴だった。いくつも並べられた円卓に山海の珍味が並び、高級な酒のびんが大量に用意された、いわゆる立食形式のパーティーだ。参加者のほとんどが身分ある大人だったので、ぼくは所在なく壁のほうにつったっていた。やっぱり来なければ良かったな、と思ったくらいだ。

しばらくすると、この宴の主催らしいひとりの貴族が壇上に立ち、高らかに告げた。

「皆さん！　何ということでしょう。われわれ信心深き聚集にお声をかけてくださるため、かの聖女ソーニャさまがおいでくださいました！」

その言葉とともに、その場の全員が一斉にこうべを垂れたので、ぼくもそうする。なるほど、聖女というやつは偉いものなんだ、といまさらながらに思う。しばらく経つと、甲高い足音とともに、ひと組の人物があらわれたようだった。

「皆の者、頭をあげなさい」

ありがたいお言葉が降りそそいだので、慎重に頭をあげる。ぼくはこの世界の常識がないから、失礼がないようにしなくちゃな。

見上げると、壇上に、聖女と、護衛の騎士は佇立していた。きれいに化粧がほどこされた恐ろしく秀麗な顔の美少女と、凛と背筋をのばした妙齢の女性だ。ふたりそろうと、まるで物語のなかの人物のよう、一幅の絵画のようだった。騎士と姫君――そんな言葉が浮かぶ。それは見事な、まさに絵になるひと組だったのだ。

しかし。

ぼくは困惑した。ありがたい聖女様とその護衛に、どうも見覚えがあるような気がしたのだ。もちろん、そんなはずはないのだが、たしかにどこかで見たことがある――。

そのとき、記憶の火花が散って、ぼくは思い出した。

ターニャ！

このあいだ、横暴な貴族に果物を投げつけたターニャと、その護衛の騎士じゃないか！

ぼくは壇上で艶然とほほ笑む少女を、ただひたすら呆然と見つめたのだった。

第五話「ひとつの依頼」

間違いない。あれはターニャとミシアだ。しかし、どういうことだ？　なぜ、教会の奥深くましましているはずの聖女とその護衛が、あんな市街地にいたんだ？　お忍びで外出していたということか？　それにしても、あの口の悪さ、とても聖女とは思えないが、まさか双子の姉妹とかだったりしないかな？　妹のほうは性格が歪んでいるとか？

ひとりでいくら考えたところで、答えが出るはずもない。ぼくはパーティー会場をうろうろして肉などつまみがら、ぼくはここから安全に脱出する方法を考えた。もとより、呼ばれたわけでもない身、このまま逃げることもできるかもしれない。なぜか、いま逃げ出さないとトラブルに巻き込まれるという気がしてならない。ぼくのカンは、たまにあたる。

「きみ」

そうだ。だれにも気づかれないようそうっと、逃げ出そう。ぼくひとりいなくなってもだれも気にしないに違いない。

「そこの、きみ」

ターニャと聖女の関係は気になるけれど、好奇心は猫をも殺す、というじゃないか。ぼくは物語の主人公じゃないんだから、謎のひとつやふたつ、いくらでも放置することができるはずだ。そうだ。さっさと逃げよう。そうしよう。

「そこにいるお前！」

耳もとで怒鳴りつけられて、ようやくぼくはびくっと振り返った。
ふと気づくと、長身の女性がそこに佇んでいた。〈護法騎士〉ミシアだ。
「な、何でしょう？」
「とぼけるな。わかっているくせに」
ミシアは苦虫を十匹くらいまとめてかみつぶしたような表情でいった。
「来い。聖女さまがおお呼びだ」
「は？」
「物わかりの悪い奴だな。聖女さまがお前をお呼びになられている。すぐに参上しろ」
「え？　どうして、聖女さまがぼくを？」
「本当にわからないのか？」
いっそ憐れむような目つきでミシアがぼくを眺めた。長身の凛とした女性だけに、こういう表情をされるときわめてみじめな気分になる。天をゆく鳥に見おろされる虫けらの気分というか。ええ、ええ、ぼくはつまらない人間ですよ。
しかし、いじけているわけにもいかなかった。

聖女が呼んでいるということは、やはりあのターニャと聖女ソーニャは同一人物なのだ。そうでなければ、聖女がぼくなどに用があるはずがない。

ぼくは一瞬でこの場から逃げ出す方策を考えだそうとしたが、残念ながらぼくはそんなことができる天才ではなかった。そこで、こくりとうなずいた。

「わかりました。連れていってください」

運命には従え、だ。

「よし」

ミシアはうなずいて、ぼくを先導し、会場を出ていった。恐ろしく目立つ女性だから、彼女がぼくを連れていくところはひと目についただろうが、かまわないのだろうか。ぼくはちょっと心配になった。あとでひどい目にあうなんてことはないよな。

大いにありそうなのが困ったところだが、この異世界でもまれて、ぼくも多少は度胸がついている。みっともなく叫びだしたりはしなかった。

歩くこと数分。

ひとつの壮麗な扉の前で、ミシアは止まった。

「失礼します」

室内からの返事を待って、扉をあけ、入室する。仕方なくぼくもあとに続いた。

「あら、よく来たわね」

そこに、〈彼女〉が立っていた。純白の清楚なドレス姿の美少女。ターニャであり、ソーニャ。

「そこらへんに座ってよ。ちょっと長い話になるかもしれないから」

「はい。失礼します」

聖女さまあいてに粗相があってはならない。ぼくはひとつのソファにそうっと座った。すると、こともあろうか、ターニャ――ではないソーニャが、ぼくのとなりにぴったりと肌がくっつくくらいの距離で座った。あの、このソファ、とっても広いんですけど？

「呼び出したのはほかでもないわ」

ソーニャはなぜかぼくの手を取りながら告げた。

ミシアは冷然とした顔でぼくたちを見下ろしている。わずかでも聖女にふらちなことをしようとしたりしたら、一刀両断にされそうだ。

「あなた、何ものかしらないけれど、わたしたちがお忍びで外出していたことをしっているわね。そのことを黙っていてほしいの」

「やっぱりそのお話ですか」

ぼくはため息をつくことを懸命にこらえた。

「了解しました。この命尽きるまで、聖女さまの秘密は決して口には出しません」

「そのかたくるしい喋り方やめてよ」

ぼくの指をおもちゃにしながら、ソーニャがうんざりしたように呟く。

「ただでさえこっちは、礼儀作法の鬼みたいな連中と日々顔をあわせていてうんざりしているんだからさ。ね、聖女なんて思わず、知りあいの女の子と話すつもりで話してみてよ」

「そうはいきません」

「どうして？」

「あなたは聖女さまだからです」

「だ〜か〜ら〜、聖女なんてただのお飾りで偉くも何ともないの。そりゃ、いくらかの理力はあるけれどさ。中央教会の大司教にだって負けやしないけどさ。でも、わたしはふつうの女の子なの？　わかる？」

「は。はあ」

「それが聖女なんて地位を与えられて教会に閉じ込められているわけよ？　可哀想だと思わない？」

「お、思います」

「じゃ、ふつうに話して」

「う、うん」

ぼくはミシアのようすを横目で見ながら、何とかふつうの口調にしてみた。もし彼女が怒るようすを少しでも見せるようだったら、すぐに元に戻すつもりで。しかし、そんなことはなかった。

「わかった。じゃあ、ふつうに話すよ」

「良かった！　それでこそ――それでこそ――ね、きみ。名前はなんて言うんだっけ？」

「ヒロト。ムラカミヒロト」

「ヒロト、か。うん、いい名前だ。気にいった。それでこそ、ヒロトだ。単刀直入にいうわ。ここにきみを呼んだ理由はふたつ。ひとつはわたしたちが外出していたことの口封じ。もうひとつは――」

ソーニャはかるく流し目をした。思わず心臓がかるくタップする。この子、自分がたぐいまれな美少女だってこと、完全に自覚しているな。タチ悪いなあ。

「ヒロト、きみに頼みがあるの」

いやな予感がする。

「〈黒の森〉はしっている？」

「知っている。人跡未踏の広大な森で、奥には魔族やら魔物やらが住んでいるとか。古代王国の遺跡がのこされているというううわさもあって、〈冒険者ギルド〉の冒険者たちがしょっちゅう探検に行くけれど、生きて帰ってきたものはいないとか」

「そう、その〈黒の森〉よ」

ソーニャはこぶしを握りしめながら立ち上がった。

「ヒロト、あなたには、そこに行って古代魔導帝国の秘宝を手にいれてきてほしいの」

第六話「黒の森」

愛馬にまたがり草原を往く。

言葉にするとこのように妙に格好よくなるが、じっさいは少しも格好よくない旅を、ぼくはもう何日も続けていた。青々と草木がしげる広大な草原を旅することは、初めのうちは気分よくなくもなかったが、しだいに飽き、そのうち苦痛になってきた。

そもそも、本来、ぼくは馬を乗りこなす能力などないのだ。しかし、いまぼくがまたがっているこの雌馬〈メルカサス〉はだれでも乗れるよう訓練された名馬らしく、ここまで問題なく騎乗してこれた。問題なく、といっても慣れない乗馬にからだの疲労がのこったことはいうまでもない。夜、宿を取り、あるいは野宿するために馬から降りると、自分がどれだけ疲れはてているのか思い知らされた。この調子で行くと、目的地に着く頃には廃人になっているのではないかと思ったくらいだったが、さすがに何日も乗っているとからだが慣れてきて、筋肉痛も治まってきた。ここらへんは、さすが若さというべきか。

「遅いぞ、ヒロト」

悠然と前を往くミシアが、冷たい口調で叱責する。

「は、はい、すいません」

ぼくは情けなくもうなずいて、手綱を通し、メルカサスに「もう少し早く走ってもらえませんでしょうか」とお願いする。すると、メルカサスは「やれやれ。仕方ないか」といわんばかりに歩速を上

げてくれた。

ほっ、とひと息。

「その馬は銀十字騎士団でも最高に賢い名馬だ。その馬を乗りこなせないようでは、話にならんぞ」

あいかわらず冷ややかな口調で淡々といわれて、ぼくははい、と頭を下げた。そもそも、ぼくは馬に乗る必要なんてないはずだったんだよ、と口答えすることはやめておく。

なぜ、覆面作家として小銭を稼ぎ、安定した生活に入ったはずのぼくが馬に乗って旅をしているのか。その理由は、あのパーティーの日にさかのぼる。

「ヒロト、あなたには、そこに行って古代魔導帝国の秘宝を手にいれてきてほしいの」

あの日、そういい放ったソーニャに向けて、ぼくは即座に「いやだ」と答えた。ちょっとでも遅れると押し切られてしまうという予感がしたのである。となりに佇むミシアの瞳が冷たく煌めいたが、気づかないふりをすることにした。

「そう」

ソーニャは頭の悪い可哀想な生きものを見るような目でぼくを見た。

「それなら、この世界におけるあなたの立場は非常に悪くなるでしょうね。聖女のお願いを断るのだから。可哀想に、これから生きづ

らくなるでしょうねえ。残念だわ。あなたのしあわせを祈っていたのに」

「ぼくにどうしろっていうんだよ！　ぼくは戦士でも騎士でもない、ただの一般人なんだよ！」

あいてがお偉い聖女さまだということもなかば忘れて抗議すると、ソーニャはちょっと首をかしげた。

「そういえば鍛えたからだをしていないわね。勇者の友人だというから、てっきり腕におぼえがあるのかと思ったんだけれど」

「ない、ない。これっぽっちもない」

「嘘よ」

ソーニャはあっさり告白した。

「あなたに剣技の実力がないことは知っているわ。でも、わたしにはあなたの協力が必要なの。あなたには、功績を立てて偉くなってもらわないと困るのよ。どういうことかわかる？」

さっぱりわからなかったので、ぼくは首を振った。

「わからない」

「そうでしょうね。簡単なことなのよ。このあいだ、夢を視たの。これでも聖女、わたしの夢は普通のひとの夢とは違うわ。予知夢というのかしら？　未来の出来事や重大な事件がかたちを変えてあらわれることがあるの。その夢のなかで、ひとりの老人があらわれて、

わたしに告げたわ。もうじき、お前の前に〈天秤の保ち手〉があらわれる。そのものに力を貸せ。そうすれば、かれはお前のために尽力してくれるであろう、と」

「〈天秤の保ち手〉？」

どこかで聴いたことがあるような言葉だが、思い出せなかった。

「きょう、ひと目見てわかった。それはあなたのことなんだって。わたしにも言葉の意味はわからないけれど、あなたに力を貸さなければならないということはわかったの。あなたはわたしにとって重要なひとだって」

「ちょっと待ったよ。話が違うじゃないか。きみがぼくに力を貸すんだろ？」

「そうよ。でも、ちょっと考えてちょうだい。聖女が突然、一民間人を重用しはじめたらどうなるか。あなたは疑われ、器量を測られ、蔑まれて、抹殺されるわ」

「抹殺……」

ゾッとして、ぼくは自分の肩を抱きしめた。なんでぼくがそんな目に！

「だから、あなたにはわたしのために功績を立ててもらわなければならないの。そうしてもらって初めて、わたしもあなたを重用できるのよ。でも、ゆっくり功績を立てる機会が巡ってくることを待っているわけにはいかない。そこで、〈黒の森〉というわけよ」

「〈黒の森〉に貴重な宝物が眠っていることはだれでも知っている」

それまで彫像のように押し黙っていたミシアが突然、話を受け継いだ。

「しかし、いままでそれを手にいれたものはいない。逆にいえば、宝物を手にいれることに成功し、それをソーニャさまに献上すれば一信徒として大きな功績を果たしたことになる。そうなれば、もうソーニャさまがお前を重用してもだれも疑わないというわけだ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

ぼくは困惑のあまり叫んだ。

「なぜ、ぼくが聖女さまに重用されなきゃならないのさ？　ぼくはべつに教会で出世したいなんて思ってもいないんだよ？　ただ自分の生活を守れればそれでいいんだ」

「そうでしょうね」

あくまでも冷静に、ソーニャは続けた。

「だから、これはあくまでわたしたちのわがままということになるわ。あなたには何の利益もないかもしれない。でも、わたしにはあなたが必要なの。正確には、その人格を信頼できる味方が必要なのよ。いまの教会でわたしは孤立している。このままではウーラムの大司教に対抗できない。わたしが夢に視たということは、あなたには何らかの隠された力があるんだわ。〈天秤の保ち手〉――意味はわからないけれど、たしかに何かを感じる。だから、あなたには〈黒の森〉に行ってほしいの」

「ひとりで行けとはいわない」

ミシアが決然といった。

「いや、お前は付いてくるだけでいい。わたしが森を切り拓き、財宝を手にいれてみせよう。お前はその功績を自分のものにして、ソーニャさまに宝を献上するのだ。どうだ。お前にとっても悪い話ではあるまい？　教会での出世が約束されるのだからな」

それは、生きて帰ったらという話でしょう。

ぼくはそういいたくてたまらなかったが、ソーニャとミシアの必死な目を見ていると、かれらも冗談やいやがらせでいっているのではないとわかった。たしかにかれらはぼくの力を必要としているのだ。しかし、だからといって、だれも帰ったことがない森に挑むなんて冒険は気がひけた。いったいどうすればいいのか……。

「こうしましょう」

ぼくが悩んで頭を抱えていたとき、ソーニャが呟いた。

「ミシアがひとり森に入り、財宝を探す。あなたは森の入り口でミシアを待つ。それなら、あなたには何の危険もない。そうでしょう？　それなら、どう？」

「そ、それなら――」

あまりにも都合のいい話だと思ったが、ぼくはもう、断れなかった。断ったならぼくの異世界人生はそこで終わるのだという気がし

たこともたしかだが、その一方で、ぼくはたしかにこのふたりの力になってあげたかったのだ。ふたりとも、それくらい必死な表情をしていたのである。

そうして、いま、ぼくは悪霊が住むという〈黒の森〉にたどり着こうとしている。ここでぼくは人生の一大事を迎えるのだが――そんなこと、当然、事前には予想しようもなかったのであった。

第七話「騎士陵辱」

〈黒の森〉と俗称されるシュタイトハイト大森林の傍には、いくつか村が点在している。王都ナナルルから移動すること数日、ぼくたちはついにその村のひとつにたどり着いた。

朴訥そうな村人たちは、王都から森に入るためやってきたと告げると、たちまち渋面になり、やめろやめろと止めてくれた。あの森には悪霊が住んでいて、ひとを食らうのだと。いままでも何人もの冒険者がやって来たが、だれひとり生きて帰っては来なかったと。それはそれは親切に説明してくれた。

しかし、どれほどいってもぼくらが、というかミシアが心を変えるようすを見せなかったので、とうとうあきらめたらしい。宿を提供してくれた。かれらのぼくらを見る目が、死者を見るそれだったことは仕方ないことなのだろう。

翌日。

専用の装備を身にまとい、様々な道具が入った袋を担いで森へ向かうミシアを、ぼくは見送ることになった。

「それでは、行く」

命がけの冒険に旅立とうというのに、感傷のひとかけらもなく、どこまでもクールにミシアはいい放った。

「二、三日で帰って来るからそれまで暇を潰していろ。それではな」

そうして、彼女はすたすたと森のなかに歩み去った。否。歩み去ろうとした。その服の袖を、ぼくは反射的に握りしめていた。

「なんだ？」

驚いたようすもなくミシアが訊く。

「ひとりでは不安なのか？　あの村なら心配いらん。王都と同じくらい安全だ」

ぼくは首をふって否定した。

「やっぱりぼくも付いて行きます」

「なんだと？」

「あなたひとりを行かせて自分は安全なところにいて、それで功績だけいただくなんてことはできません。いくらぼくが恥知らずでも、それはあんまりだ。だから、ぼくも行きます。何の役にも立たないかもしれないけれど、それどころか足手まといかもしれないけれど、お願いします。ぼくもいっしょに行かせてください」

ぼくにしてみれば、何日も悩みに悩んで下した決断だった。森の奥に入れば生きては帰れない可能性も高い。また、ぼくがいっしょに行っても、何の役に立つわけでもないだろう。それでも、ミシアをひとりで行かせることはどうしてもできなかった。

ここでもまた、ぼくは自分にのこされたわずかなプライドを優先させたのである。

「そうか」

ミシアの冷ややかな表情が、このとき、わずかに緩んだように見えた。

「思ったよりも骨があるようだな。それでは、村に戻って装備を取ってこよう。実は、お前のぶんの装備も用意してある」

「は、はい！」

そうして、ぼくたちはシュタイトハイト大森林に入っていったのだった。

森。

あなたは、その言葉からどんな印象を受けるだろうか？　〈黒の森〉は、少なくともぼくの意味での想像したような森ではなかった。まず、樹々が密集しているため、昼間でも暗い。ひとが歩ける道などは当然なく、樹木の隙間を探し、ときには木々を伐採して進むしかない。あちこちに色々な虫が這っているのはいうまでもないが、毒虫がいると困るので、ミシアの持ってきた宝珠で虫除けはしてあったが、それにしても、その気味の悪さは想像を絶した。赤、青、黄、紫、白、黒、橙、そのほか、自然界にあるとはとても思えないような色の虫たちが、そこらじゅうを這いまわっているのは、全くゾッとする光景だった。

ぼくたちは、正確に方向を指し示す宝珠を頼りに、その森を遅々と進んでいった。ぼくがいなければ、おそらくミシアはもっと早く進むことができただろう。しかし、それでも彼女は文句ひとついわなかった。ただあの冷ややかな表情のまま、なすべきことをなしていっただけだ。歳はぼくより数上という程度だと思うが、精神年齢

はもっと遥かに離れている気がする。

夜。

ぼくたちは、なんとか見つけた広い場所に、テントを広げて眠ることにした。もちろん、どこに猛獣や魔物がひそんでいるかわからない〈黒の森〉のなかだ。火を絶やすわけにはいかず、両方が同時に眠りにつくことはできない。そこで、その日は、ミシアが先に寝ることになった。

起きているときと同じくクールな寝顔を見下ろしながら、ぼくはミシアについて考えた。

このひとはいったいどうして若くして騎士として栄達したのだろう。〈護法騎士〉というものが、教会の銀十字騎士団に十二人しかいない最高位の騎士であることを、ぼくもいまでは知るようになっていた。あのランパー・カルネイドもそうだが、この若さでその地位にまでのしあがるのは並大抵のことではないだろう。どんな理由があって、彼女は〈護法騎士〉になったのだろうか――。

やがてミシアは起き、ぼくが眠ることになったが、ぼくのなかでその疑問は消えることはなかった。

翌朝。

目ざめると、ミシアが見たことがない獣の肉を焼いていた。どうしたのかと尋ねると、昨夜、襲いかかってきたから斬り殺したのだという。起こしてくれれば良かったのに、と驚くと、起こしたら何か役に立ったのか、といい返された。全くその通りだったので、反論のしようもない。その後も、何匹かの獰猛な獣に襲いかかられた

りしたが、ミシアはただひとりでかれらを全くあいてにもしなかった。恐ろしい強さだ。〈護法騎士〉というものは、全員がこれほどの実力を備えているのだろうか。

そして、進むこと数日。汗と泥にまみれ、足は棒になり、いいかげんうちに帰りたいと泣き言を吐きたくなってきた頃に、ようやく広いところに出、そしてその建物はあらわれた。

それは薄よごれた白い石で築かれた、壮麗な建築物だった。奇妙なほどならめらかな石で築かれているとおぼしく、ちょっと表面を磨いてやれば鏡のように顔が映るのではないか、と思える。四角形を組み合わせて作られたかたちは、何かの神殿のように見える。

「ここだ」

ミシアが、さすがに疲労をにじませた声でつぶやく。

それこそが、ぼくたちの目的地である古代王国の遺跡であるらしかった。このなかに、王国の財宝が眠っているのだ。

「生きては帰れない森なんていわれているわりに、案外、あっけなかったですね」

ぼくがいうと、ミシアは厳しい目つきをした。

「油断するな。このなかこそが危険なのかもしれん」

まったくその通りだったので、ぼくは一言の反論もなく、黙った。そうだ。まだ宝を手にいれたわけでもない。まだ道は半ばにすら到達していないんだ。浮かれるな。

ミシアはぼくを置きざりにして、ゆっくりとその建物へ近づいていった。その目には、やはり何かしらの安堵が浮かんでいるように見えた。彼女にとっても、命がけの冒険であったには違いないのだ。

そのとき。

突然、建物に絡まっていた蔦が鞭のように素早く動いたかと思うと、ミシアの四肢に絡みついた。彼女は、しまった、と叫ぼうとしたのだと思う。しかし、次の瞬間、ミシアの口はふさがれていた。よく見ると、蔦と見えたものは、ぬるぬると濡れた生きものの触手のようなものだった。その触手は、ミシアの服のなかに忍び込み、何か妖しくうごめいていた。服が破れ、ミシアのふくよかな乳房があらわになる。そこにも触手が這っていた。それは、何か恐ろしく淫猥な、ひとの心の禁忌にふれる光景だった。あの最強の〈護法騎士〉ミシアが、触手の攻撃に、なすすべもなく、ただ悶えているのだ。ミシアの顔は紅潮し、そのひとみには、かすかに涙まで浮かんでいるように見えた。

ぼくは、思わず息を呑んだ。

しかし、次の瞬間、ようやく正気に返ると、ぼくは腰間の剣を抜き放って、触手生物に向けて斬りかかった。

ミシアの火照った顔が、烈しい苦痛ではなく、耐えがたい淫らな快楽によるものだと、このときはまだ、気づいてはいなかった。

第八話「淫ら騎士」

ミシアを玩弄する触手は、当然、こちらにも攻撃を仕掛けてきた。しかし、不意をつかれたミシアは倒せても、こちらには用意がある。ぼくは剣を大地に突き立てると、懐からひとつの宝珠を取り出した。強力な魔力を秘めた聖なる珠――それを思いきり、触手に向け投げつける。瞬間、鮮烈な光があふれた。

思わず目をつむって、そして開くと、触手は力を失ってその場に倒れていた。その皮膚？はひどく焼けただれている。死んだわけではなようだが、ひとまず力は失ったみたいだ。ソーニャが護身用に持たせてくれた攻撃宝珠の威力である。ひとつでぼくの一年分の支出くらいはするらしいが、使用をためらいはしなかった。ぼくは剣にかんしては素人だ。自分の力でたたかおうなどという無謀なことは一瞬たりとも考えなかった。

「ミシア！」

叫んで、半裸の女騎士のからだを抱きかかえる。ミシアはぐったりして、意識を失っているうようだった。仕方なく二、三度、頬を叩くと、彼女はうっすらと目を開いた。

「ミシア、わかりますか。建物に取り付いていた怪物に襲われたんです。どうやら、この森に入った冒険者が生きて返ってこないのはあいつのせいらしいですね」

「う……」

ミシアはまだ意識が完全に戻らないようすだった。その頬は、発

熱しているように火照っている。何か毒を受けたのでなければいいが。

ぼくはとりあえず彼女に絡み付いていた触手をすべて切断したが、この生きものはいくら末端を斬っても死なないのではないかという気がした。それでは、本体はどこにあるのか。考えたくもないので、考えないことにしよう。

「ミシア、ひとまず逃げますよ」

彼女に肩を貸して、逃げ出すつもりだったが、ミシアは首を振った。

「いや――このまま、建物のなかに入ろう」

「え？」

「機を逃してはならん。わたしなら、大丈夫だ」

半裸の上、全身をねばねばの粘液で濡らしたいまのミシアは恐ろしく色っぽかったが、同時に、やはり侵しがたい威厳を備えていた。仕方なく、ぼくはうなずいた。

「わかりました。でも、本当に大丈夫なんですね？」

「ああ。心配するな」

いって、ミシアは立ち上がった。ふくよかな乳房が露出しているが、気にしているようすはない。また、気にしている場合ではないこともたしかだった。そのまま彼女が〈神殿〉のなかへ駆け込んだ

ので、不承不承、ぼくはあとに続いた。ここは体制を立てなおして再挑戦するべき場面だと思うのだが――ぼくには彼女の行動は止められない。

入口から建物のなかに入ったところで、光を放つ宝珠を使用する。この世界には、科学文明は存在しないが、ある種、それ以上に便利な文化があるといえそうだ。

ところどころ、虫や動物が入り込んだ形跡こそあったが、屋内は意外に綺麗だった。ちょっと掃除すれば住めるようになりそうだ。こんなところに住みたがるひとがいればだが。やはり屋内も鏡のように綺麗な物質で築かれているようだ。地球でも見たことがない建築素材。こんなものを造り出す文明とは、いったいどんなものだったのだろう？

しばらく進んで、広いところに出たところで、ミシアを下ろすと、彼女はその場に座り込んだ。

「本当に大丈夫なんですか？」

ミシアに問いかけてみると、弱々しい応えが返ってきた。

「大丈夫」

どう見ても大丈夫ではない。頬は火照り、呼気は荒く、何かに必死に耐えているように見える。まさか苦痛があるのにやせ我慢しているのでは？　ミシアならありえる。

「正直にいってください、ミシア。苦しいんじゃないですか？　とても平気には見えませんよ」

「苦しくはない。ただ――」

「ただ？」

ぼくが問い返すと、ミシアはぼくのひとみを覗き込んで、そっと逸らした。

「なんでもない。平気だ」

だから、どう見ても平気には見えないんだってば！

しかし、それからのミシアの行動はぼくの予想を超えていた。「暑い」とひと言いうと、なかば破れた上着を脱ぎさってしまったのだ。豊かな乳房が完全にあらわになり、目のやり場がない格好になる。いったい何を考えているんだ？

「暑い。暑いよ。からだが、熱い」

ミシアはかすかに腰をうねらせていた。その唇から、かすかに、しかしたしかに、あえぐような声がもれる。

事ここにいたって、ぼくにもようやく、彼女に何が起こっているのかわかった。

ミシアは、発情しているのだ。

そういえば、本で読んだことがある。かつて、催淫物質をそなえた粘液をもつ生物が存在したと。その植物に　耐えがたいほどの欲望を感じ、その場で処置しなければ、ついには発狂して死にいたる

と。この森のなかに、その絶滅生物が生きのこっていたのだろうか？

処置。

適切な薬物が存在しない場合、その方法は、ひとつしかない。

「あっ。あっ。あっ」

ミシアの声がいよいよ大きくなる。

どうする？　このまま放置すれば、あまりの快絶に耐えきれず、気が狂ってしまうのだ。そして、彼女がいなければ、ぼくもまた、この森から生きて帰れるとは思えない。となると、ぼくが採るべき手段はひとつしかない。しかし、本当にそれで良いのか？

「ヒ、ヒロト」

ミシアのうるんだひとみがぼくを見つめた。

「お願いだ。わたしを、見ないでくれ」

そのひと言が、ぼくのなかにのこっていた躊躇を吹き飛ばした。

ぼくはミシアを抱きしめると、その柔らかな唇に自分の唇を重ねた。ミシアは一瞬驚いたようだったが、すぐに舌をいれ絡めてくる。ミシアの舌が、ぼくのくちびるのなかで、奔放に踊った。さらに理性が吹き飛ぶ。

「ミシア、ミシア、ミシア」

名前を呼びながら、ぼくは彼女のむき出しの乳房をまさぐった。ミシアが甲高い声を上げて、あえぐ。その姿には、もうあの冷徹な騎士の面影はなかった。

ああ、もう、どのくらいの強さで握ってもいいのだろうか？　ぼくには経験がないからわからない。ぼくのなかで、烈しい欲望がすべてを押し流そうとしていた。もう、ミシアの肉体のことしか考えられない。

「いいんだね？」

ぼくがたしかめると、女騎士は子どものようにこくんとうなずいた。

「お願い。ミシアを――」

その先の言葉を、彼女は、ぼくの耳もとでささやいた。それは、あまりに甘い許可の言葉だった。その瞬間、ぼくのなかにのこされた、最後の防波堤が決壊した。

もう何も考えられない。

ぼくはその場でミシアを押し倒すと、彼女の魅力的な乳房に舌を這わせ、さらにその秘密の部分に手をのばし、そして、淫蕩な快楽のなかで彼女と溶け合い、ひとつになった。

〈神殿〉の床に、ひと筋の赤黒い血が、したたり落ちて痕をつくった。

第九話「ミシアの過去」

「あ、起きました？」

ミシアがぼんやりしながらも目ざめたようすだったので、ぼくは声をかけた。

「憶えていますか？　ここは古代帝国の遺跡です。あなたは触手の化物に襲われて――」

瞬間、ミシアのひとみに火がともった。彼女はかけておいた毛布を跳ねのけると、かたわらに置いておいた剣を手に取り、それをぼくののど元に突きつけた！

「殺す」

しぼり出すような声音。

「よくもこのわたしにあのようなことを――。殺してやる！」

「落ち着いてください。ああしないと、あなたは気が狂って死んでいたんですよ！」

「なんだと？」

ぼくはあわてて催淫生物と、その効果について説明した。おそらく、彼女にも知識があったのだろう、しだいにミシアの目に理解が満ちていった。しかし、理解することと納得することはべつで、納得することと怒りを収めることもべつだ。

「だからといって、ここまでする必要があったのか？　前から後ろから、よくもやってくれたものだ」

「後ろからやってくれって頼んだのは自分じゃ――」

「なんだと？」

「なんでもないです」

ぼくは素直に頭を下げた。あのときのミシアと、いまの彼女じゃ別人のようだ、と思いながら。やはりあのときは錯乱していたのだろう。

「たしかにひどいことをしました。謝ります。謝って許してもらえることじゃないかもしれませんが、ぼくには謝るしかできません。この通りです。申し訳ありませんでした」

その姿を見て、ミシアは何かちょっと哀しげにうつむいた。

「いや」

突きつけた剣をひく。

「お前は正しいことをした。赦されないのは、わたしのほうだ」

そして、その場に座り込むと、白い手で顔を覆った。ぼくは彼女が泣くんじゃないかと思った。ところが、そののどから漏れでたのは、低い自嘲の笑い声だった。

「これが、お偉い騎士さまというわけか。本心では淫らなことを考えているくせにそれを隠して、さも謹厳実直に生きてきた結果がこれか」

「ミシア……？」

このときのミシアは、清廉な騎士というよりも、ただの小さな寄る辺ない女の子みたいに見えた。ぼくは何か声をかけたかったが、何をいっていいのかわからず、そのまま見守った。すると、ミシアのほうから、ぽつぽつと、話しはじめた。

「わたしは、騎士になんてなりたくなかった。本当は、お菓子職人になりたかったんだ。お菓子が好きだったからかな。しかし、わたしの家は騎士の家系で、父は息子に騎士の道に進むことを求めていた。それなのに、ひとり息子が事故で亡くなってしまった。それで、わたしは騎士になることにした。父が喜ぶと思ったんだな。わたしには才能があったんだろう。どんどん出世していった。そして、二十歳かそこらで、騎士団の頂点、〈護法騎士〉にまでのぼりつめた。わたしは父が喜んでいてくれると思っていた。しかし、ひさしぶりに逢った父はこういった。女だてらに騎士などと、恥さらしめ、と」

淡々としているが故に、悲痛な語りだった。

「女ではだめだったんだ。わたしではだめだったんだ。父が求めていたものはあくまでも息子で、娘は必要なかったんだ。そのひと言で、わたしの心には穴があいた。いまのいままで、その穴を隠して生きてきた。初めて聖女と出逢ったとき、この子のためなら命を捨てられると思ったよ。それくらい、華奢で可愛い女の子だった。わたしがなりたかった女の子だった。しかし、それもきょうまでだな。わたしの心は折れてしまった。もう、やせ我慢してお偉い騎士さま

じゃいられない」

そして、低く笑った。ぼくはそれまでこれほど痛々しい笑い声を聴いたことがなかった。何かをいいたくて、いってあげたくて、ぼくは必死に言葉を探した。

「ミシア。ぼくはあなたを尊敬しています。あなたはぼくの理想です」

「わたしにあんなふうに口でさせておいてか？」

「ミシア！」

「冗談だ」

ミシアは自暴自棄になっているように見えた。何とかしなくては。

「自分では気づいていないかもしれないけれど、あなたは若くて綺麗です」

「ヒロト、それは――」

「聴いてください！　ぼくはあなたはあの聖女にだって負けやしないと思います。それは、顔かたちの美しさをいったら、ソーニャみたいなひとはなかなかいないでしょうよ。でも、あなたには自分を信じて生きてきたひとだけがもつ凛とした美しさがある。やせ我慢、けっこうじゃないですか。あなたのやせ我慢が、ぼくは好きです。嘘だって最後まで貫き通したら本物ですよ。最初の動機が何であれ、あなたは立派な騎士としてこれまで生きてきたんでしょう？　だったらこれから先もそうやって生きていったらいいじゃないですか。

ぼくは応援しますよ。ぼくの応援なんて何の意味もないかもしれないけれど、きっと、あなたを尊敬しているひとたちはいっぱいいると思います。それじゃだめですか。お父さんの代わりにはなりませんか」

「ヒロト――」

ミシアは両目をつむって、何か考えこむように見えた。そして、しばらくして目を開くと、彼女は片手でぼくを呼び寄せた。

「来い」

「は？」

「野暮な奴だな。いっている意味がわからんか」

そしてミシアは、ぼくをひきよせると、そっと目を閉じて、唇を奪った。それは優しいキスだった。ぼくは思いきり彼女をむさぼりたいのをこらえて、そっと唇を離した。

「礼だ。ありがとう」

ふたりのあいだに、何かあたたかい空気が流れた、と思ったのは、ぼくの錯覚ではないと思う。

「ところで、だ」

ミシアはちょっと照れたように顔を背けて続けた。

「はい」

「わたしの身体、どうだった？」

「は？」

「その、どこか変じゃなかったか？　ほら、どこもかしこも筋肉だらけだし、きっと女としては魅力がないと思うんだ。お前にいやな思いをさせたのではないかと思って――」

「最高でした」

ぼくは断言した。

「素晴らしかったです。とても綺麗だったし、それに、とんでもなくいやらしかった。できれば、もう一回したいくらいです」

「ばか」

ミシアはちょっと笑ったように見えた。自虐的じゃない、本物の笑顔。

「わかった。生きて帰ったら、もう一回しよう」

「え？」

「なんだ。いやなのか」

「とんでもない！　ぜひお願いします」

しかし、ぼくはそっと呟いた。

「死亡フラグだ」

「何？」

「なんでもありません。そうですね、生きて帰ったら村の宿でもう一回しましょう。そのときは、もっとあなたを気持ちよくしてさしあげますよ、ミシア」

「そうか。それは楽しみだな」

ミシアはまたも低く笑った。とても気持ち良い笑い声だ。もっとこの声を聴きたい。

「ところで、ミシア」

「なんだ？」

「裸では風邪をひくので、服を着替えたほうがいいと思うんですけれど」

「あ」

彼女の裸をじっと眺めてにやにやしていると、ゲンコツが降ってきた。

痛い。

第十話「財宝獲得」

ぼくたちは装備を整えなおして、遺跡の先に進むことにした。ぼくもミシアも〈トリック〉と呼ばれる超常の力を使いこなすことはできない。持ってきた宝珠がたよりだ。光を放つ宝珠で辺りを照らしながら、少しずつ、注意して先に進んだ。あの程度の獣、あの程度の怪物だけだったなら、この森に挑む冒険者たちが全滅することはなかっただろう。きっと、この先にも何かある。

しかし、遺跡は迷路ではない。本来、ひとが生活するために作られた空間なのだ。そこかしこに、案内の文字が書かれていた。

「ミシア。この先を進むと〈最高危険実験領域〉だと書かれていますが――」

「は？　どこに？」

「ここです。ほら、この文字」

ぼくが壁の文字を指し示すと、ミシアは呆れたようにため息をついた。

「あのな、それは上級カナン語。既に失われた言語だ。だれにも読めん」

なるほど。しかし、ぼくには読めるのだ。なぜかはわからないが、日本語を読むのと同じように、すらすら読めてしまう。ぼくが文字を読みあげてみせると、ミシアの表情が変わった。

「本当に読めるのか？」

「読めます。だから、この先は行かないほうがいいですよ。たぶん、この文字が書かれて何千年後のいまも危険な場所でしょうから」

ミシアはしばし考えこむようすだった。

「よし、お前を信じよう。どちらに行けば安全なのかわかるか？」

「はっきりしたことはわかりませんが――」

そして、ぼくは壁面の文字を読み込んでいった。あとでわかるのだが、この能力がぼくたちを救ったのである。壁面にはこの施設に関するあらゆる情報が記されており、ぼくはそれを読むことによって安全な場所を調べることができた。壁には立ち寄ってはいけないところの警告がいくつも書かれていたのである。もし、ぼくがこの文字を読むことなく先に進んでいたなら、ぼくたちは過去、この施設に入り込んだ冒険者と同じ目に遭っていただろう。すなわち、考えられる限りの無残な死である。

遺跡は広大で、迷路ではないが迷路じみたところがあった。ぼくは日本の駅を思い出していた。便を求める代償として、わかりづらくなってしまうことはよくあることだ。しかし、ぼくたちは壁の文字に従って、迷うことなく進むことができた。

そして、ぼくたちは入口からなかに入ったと思われる幾匹かの獣たちと遭遇し、それを退けたりしながら、ついにひとつの荘厳な扉の前にたどり着いた。その扉には、上級カナン語で「重要宝物保管庫」と記されていた。

「親切なことだ」

ぼくはふふん、と鼻で笑った。

「わざわざ宝物はここにありますよ、と記してくれているんだから。さあ、ミシア、先へ進みましょう。そして、さっさと財宝を手に入れて帰りましょう」

「待て」

ミシアは緊張にみちた表情で続けた。

「この先から殺気がする。ここには、何かがいる！」

瞬間。

大きな音を立てて扉が内側から開き、なかから一匹の生物があらわれた！　否――それを生物と呼ぶのがあたっているのかどうか、ぼくにはいまもわからない。それは身長2メートルほどもある、巨大な泥の人形のようなものだった。目もなく、口もなく、ただからだつきそのものはひとに似ている。古代王国では〈ゴーレム〉と呼ばれていたその怪物が、いま、巨腕を振りまわしてぼくたちに襲いかかってきた！

「避けろ、ヒロト！」

ミシアはいって、剣を振りまわした。目にも留まらぬ速度でゴーレムの頭に斬りつける。

決まった！とぼくは思った。決定的な一撃だと。しかし、あろう

ことか、ゴーレムは頭に斬りつけられたまま、腕を振りまわしてきたのである。

その一撃を受け止められたのは、ミシアだからこそだろう。しかし、そこから徐々に、形勢は彼女に不利になっていった。

ゴーレムはおそろしく強かった。一撃一撃はむしろ鈍重なほどなのだが、どうやら人間をはるかに上回る怪力の持ち主であるらしく、ミシアですらしばしばその打撃を受け止めかねていた。それでもときにミシアは会心の一撃をいれるのだが、ゴーレムはおかまいなしとばかりに襲ってくるのである。

不死の怪物――ぼくの心に、そんなひと言が浮かんだ。

「ミシア、逃げましょう！　こいつはきっとこの建物の外には追ってきません！」

「ばかをいうな！　ここまで来ておいて、おめおめと逃げられるか！　いま、このでかぶつを倒してみせるから、そこで見ていろ！」

なんという強情な、と思ったが、ミシアがそういうなら仕方ない。ぼくははらはらしながら見守った。いざとなったら、のこりの攻撃宝珠をすべて使いつくしてでも、ミシアを救い出すつもりだった。

しかし。

ミシアはやはり最強の騎士だった。彼女はゴーレムに圧されているように見えて、巧妙にその攻撃パターンを読み切っていたのである。次の瞬間、彼女の剣がゴーレムの首を跳ね飛ばした！　ゴーレムはそれでもなお鈍重に動こうとしたが、さすがに頭を落とされて

はそのままの動きはできないらしく、どうっという重たい音を立ててその場にくずおれた。

ミシアが小さな吐息とともに額の汗をぬぐう。

「どうだ。見たか、ヒロト。わたしの力を」

「はい！　ミシアは本当に強くて格好いいです。ぼくなんて、一生かかってもあなたの半分にも達しませんよ」

「あたりまえだ、ばか」

ぼくの頭をかるく小突いて、ミシアは剣を鞘にしまった。

さあ、いよいよお宝部屋だ。いったいどんな宝が眠っているのか。金銀財宝のたぐいか。それとも、古代魔導王国の叡智を秘めたマジックアイテムなのか。ぼくは楽しみでしょうがなかった。まさかツタンカーメンのような黄金のマスクなんてないよな。

そして――

じっさいに室内はぼくたちの期待に違わなかった。

そこには、まばゆいばかりの黄金と宝石が山と積まれていたのである。古代王国で使われていたらしい金貨が、持ち切れないほど入った箱もあったし、いかにも高価そうな宝石が陳列されている棚もあった。また、高度な技術で作られたとおぼしい装飾品もあり、古代王国の文明の高さを思わせた。そこはまさに宝の部屋だった。ぼくは思わず夢中になって、部屋中を探ってまわった。金貨、宝石、美術品、装飾品のほかにも、本があることが嬉しかった。読んでみ

ると、どうやら高度な〈トリック〉の説明書らしい。持ち帰ることにして、ぼくは背中の袋にいれた。

ぼくとミシアは、相談しあい、たがいに楽に持てるだけのものを持って帰ることにした。身動きが取れないほどのものを持って帰って、命を落としたらなんにもならない。ここにたどり着くための正解ルートは既に判明しているのだ。あとで取りに来てもらえば良い。それに、ぼくたちの目的は、ソーニャのために功績を立てることであって、財宝そのものではないのだ。あまり欲ばりすぎると、必ず対価を払う羽目になるだろうと思われた。

そこで、持てるだけのものを持って外へ出ようとしたとき――ふと、ぼくは部屋の片すみに落ちていたひとつの小さな指輪に目が行った。べつだん、高価そうなわけでも、絢爛と輝いているわけでもなかったが、なぜか目を惹かれるのだ。ぼくは何気なくその指輪をポケットにいれた。この決断がどれほど重い意味を持っていたのか知るのはやはりのちのことである。

その後、ぼくたちはふたたび数日かけてそれなりの艱難辛苦の末、村に帰り、村人の大げさな歓迎を受け――そして、村のとある家で、あの約束を守ったのだった。

幕間「背教騎士ランパー」

「ランパーさま、ランパーさま」

教会の長い回廊を、甲高い声でわめきたてながらひとりの男が走っている。見るからに品性卑しげな中年男だが、その服装はかれが司祭の地位に就いていることを意味していた。男は、大聖堂で静かに祈りをささげていたひとりの若者に駆け寄ると、話しかけた。

「ランパーさま。聴かれましたか。あの小僧のことを」

「さわがしいぞ、ラーサム。何の話だ？」

若者――〈護法騎士〉ランパー・カルネイドに冷ややかにたしなめられ、男――王都ナナルル某教会の司祭ラーサムは、恐縮したようすを見せた。ランパーは気にしたようでもなく、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「どうしたというのだ。お前ともあろうものが、何をそんなにあわてている」

「それが、予想外の事件が起こったのです。いえ、ランパー様のお耳を汚すほどのことではないのですが……」

「何だ？　重要なのかそうでないのか、どっちなのだ。はっきりしろ」

「それが、その、わけのわからない話でして」

ランパーはかるく眉をひそめた。このラーサムという男の愚鈍さは、ときにかれを苛立たせるのだ。しかし、かれはそれ以上に感情を露出することはしなかった。とにかく、いまはまだ利用できる男である以上、あまり刺激する意味はない。

「まあ、いい。とにかく最初から話してみろ。何があったというのだ」

「はい。実は以前ランパーさまがお助けになられた小僧が、実は聖女さまに見いだされまして、先日、司祭および銀十字騎士の地位をあたえられたのです」

「小僧？　司祭だと？」

ランパーの明敏な頭脳は、ラーサムの要領を得ない話から、正確な事実を導き出していた。あのとき、気まぐれに救った小僧、たしかヒロトとかいったが、その小僧が司祭の地位を与えられたというのか！　ばかな。

「なぜそんなことになった。詳しい事情を話せ」

「は」

ラーサムは語った。

ヒロトが、単身、〈黒の森〉と呼ばれる大森林に入り、聖女のために金銀財宝を手に入れ、それを聖女に献上し、その功績によって司祭の地位を与えられたらしい、と。いまや聖女はヒロトを信頼すること篤く、直に言葉を賜り、仕事を与えるほどである、と。

「ほう、あの小僧がな」

ランパーはいくらか感心した。どう見ても無能な小ネズミにしか見えなかったが、案外、知恵が効く輩であったのか。しかし、いずれにしろ、かれが気にかけるほどのものとは思われなかった。かれにはより重要な案件がいくつもあり、そちらに気を取られていたのである。

「良いではないか」

とランパーはいった。

「その小僧が、今後どれほど出世するとしても、われらの敵に回らなければ問題はない」

「しかし、その――」

そうか。

狼狽するラーサムを冷たく見下ろして、ランパーは悟った。この男は、その少年を虐待していたのだ。それで恨まれているのではないかと疑心暗鬼になっているに違いない。仮にそうだとしても、ランパーが関与するべきことではない。この程度の手駒、いくらでも換えが効くのだ。

しかし――。

「その小僧、監視しておく必要があるかもしれぬな」

「は、はい」

自分に配慮してくれたと思ったのだろう、ラーサムが歓んでうなずく。むろん、そうではない。ランパーはラーサムの心情になど、毛ほどの興味も抱いていない。ただ、その少年の急速な出世ぶりが気にかかったのだ。つい最近まで奴隷だった身が、あっというまに聖女に拝謁する栄を得、若年にして司祭の地位を得るとは、只事ではない。あるいは、敵に回らぬかどうか見はっておくべき人物ではないのか。ランパーはそう考えたのだ。

「パロット、パロットは控えているか」

ランパーが呼ばわると、近くの席から、ひとりの小柄な少年が姿をあらわした。全く気配を感じ取れなかったラーサムは驚いたが、ランパーにとって驚くべき理由はない。この少年は、そのような専門訓練を受けているのだ。

「お前にひとつ、たのみがある」

ランパーがいうと、パロットと呼ばれた少年はその場にひざまずいた。

「何なりとお申しつけください」

「ラーサムに詳細を訊き、ヒロトという名の小僧を見はれ。そして、もし、われらの敵となるかもしれぬと感じたなら、殺せ」

「はい」

剣呑をきわめる内容であったが、命じる側も、命じられる側も、一切問題があるとは思っていないようだった。

「すべては、あのお方のためだ」

ランパーの言葉に、パロットは深くうなずいた。

「まことに。あのお方のためならば、死もいといませぬ」

少年はすっと立ち上がると、ふたりの会話に怯えているラーサムに優しく声をかけた。

「では、ラーサムさま、あちらで、その少年についての情報をお聞かせ願えますか」

「あ、ああ」

そして、少年はラーサムをひきずるようにして去っていった。あとには、ランパーひとりがのこされた。ふたたび、祈りをささげる姿勢に戻る。

しかし。

こうして、祈るふりをしながらも、ランパーにはそのような敬虔さはかけらもない。そもそもランパーは神を信じていない。救世主も、聖女もこれっぽっちも信仰していない。かれが信じるのは、より現実的なもの、即ち、力である。ランパーはいまでもそれなりの権力を持っており、また、かれ以上の権力者に仕えているが、それでは満足できないのだった。かれはだれよりも強い力を手にいれたいのだ。そう、聖女よりも。勇者よりも。そして、ダークランドの魔王よりも強大な力を。

そのためには、さまざまな犠牲が必要になるであろう。しかし、かれにとって、犠牲にすることを躊躇することなど何もない。ランパーには生まれつき良心と呼ばれる心が欠落していた。ひとを見て同情したり共感したりすることは、かれにとって、脆弱さの表れにほかならなかったのだ。

だから。

かれはいま、思う。

もし、神に祈って求める力を得られるのならば、いくらでも祈ろう。もし、悪魔にこの世界を捧げて欲する力を手にいれられるならば、いますぐにも世界を売ろう。そして、もし、支配者を裏切ることで力を入手できるのなら、躊躇するべき理由は何もない、と。

世界とは、かれにとって、賭けるべきコインの一枚に過ぎなかった。

予告しよう。いつの日か、かれの生き方は、ヒロトの生き方と交わることだろう。そしてふたりは、たがいの生き方を否定しあい、対立し、対決することになるだろう。そのとき、そのたたかいに巻き込まれ、多くのものが犠牲になって失われてゆくことだろう。

しかし、それはいまではない。

ランパーはあたかも敬虔な信徒のように祈りを捧げるかたちをとりながら、悪魔のように秀麗な微笑を浮かべた。

第一話「勇者ふたたび」

ぼくはどんなに離れていても、携帯電話で簡単に連絡がとれる世界からやって来た。インターネットもあれば郵便システムも整っているし、そう簡単にひととひとが音信不通になったりしない世界だ。しかし、このジャナスリアンは違う。ここはひとたび別れたなら、次に生きて逢うのがいつになるのか全く保証されていない世界なのだ。

そういうわけで、ぼくが勇者ミュウ・ミュウテイシアと別れてから数カ月が過ぎていた。人間とは薄情なもので、そういうふうに長いあいだ離れていると、思い出すことも減れば、面影もしだいに薄れてゆく。しかし、ぼくの命を救ってくれたひとには違いないので、感謝の気もちは変わらなかった。

そのあいだ、ぼくは居候として、作家として、司祭兼教会騎士として、多忙な日々を送っていた。

人びとのあいだで、ぼくの地位は「聖女が信頼する友人」というところで決まったらしい。これは、この世界で、きわめて高い地位である。キリスト教社会での「ローマ法王の友達」よりも、もっと遥かに高いだろう。何しろ、この世界では聖女は諸王の上に立つ存在――キング・オブ・キングスなのだ。その友人といえば、これはもう、ものすごい地位なのである。

おまけに、教会にぼくを連れてきたのが勇者だという話まで広がり、これは只者ではあるまい、ということになった。本当は只者も只者、ザ・只者といいたいくらいなのだが、ひとの見る目というものはそういうものではないらしい。

当然、人びとのぼくに対する程度は変わった。変わりまくった。だれもが敬語を使って話すようになり、ほとんど目を直視することすらなくなった。奴隷だった頃、さんざんぼくを虐待した連中は、恐れるような媚びるような目つきでぼくを見あげ、道にひざまずかんばかりの卑屈な態度を見せた。そうでない人びとも、なんだかびくびくするようになった。

まったく扱いが変わらないのはナローラくらいのものだった。ナローラはあいかわらずからかったり、怒ったり、皮肉をいったりしてくれたのだ。それでぼくがどれほど助かったことか。しかし、正直をいえば、もう少し優しくしてほしかったのも事実だ。

たとえば、ぼくが朝寝坊を楽しんだりしていると、ナローラはたたき起こしにくるのである。

「ご主人様！　朝はちゃんと起きるものですよ！」

叩き起こす、という言葉はたしかにあるが、文字通り叩き起こされたのは、ぼくは、初めての経験だった。布団を剥ぎ取られ、揺さぶられ、叩かれて、ぼくは起こされた。

「頼むよ。昨日は遅くまで執筆していたんだ」

というと、

「何を書いていたんですか？　そもそも光宝珠を無駄遣いして夜更かしすることがいけません。夜は寝るものです。そもそも、ご主人様は――」

と説教された。

この子、優しくて暖かいお姉さんタイプだと思っていたんだけどなあ。全然違った。ま、ぼくはいまのほうがずっと好きだけれど。

そんなある日。

ぼくが教会の庭で土いじりなどしていると（この世界の果物を栽培しているのである。ぼくはこの世界に来てから土いじりの楽しさを学んだ）、上から声をかけてくるものがあった。

「こんにちは。ヒロト、いる？」

ひとのことを友人みたいに呼び捨てにする奴はだれだ？

そう、ちょっと腹立たしく思いながら視線を上げると、そこになつかしい姿があった。

「勇者さま！」

「やだな、他人行儀な。ミュウって呼んでよ」

光の勇者ミュウ・ミュウテイシアがそこに佇立していたのだ。あいかわらず、光り輝くように美しい少女だ。ソーニャと美人コンテストに出たら、人気を二分することだろう。地球にも綺麗なアイドルスターはいるが、このカリスマ性というか、生まれながらの人柄の良さみたいなものを持った少女は、なかなかいるものではないと思う。

「いやあ、ヒロトをここに預けたまま旅に出ちゃったからさ。内心、

無責任だったかな、と思っていたんだ。もっとも、冒険に連れていくわけにもいかないから、仕方なかったんだけどね」

そういって、勇者は頭をかいた。

ぼくは複雑な気分だった。たしかに、奴隷にされ、勇者を恨んだ時期もあった。しかし、彼女がここに連れてきてくれなかったら、ぼくはそもそも草原で野垂れ死にしていたに違いないのだ。いや、その前に野盗に斬り殺されていたか。とにかく、いまぼくがここにあるのは彼女のおかげである。いくら感謝してもしたりない。

ぼくは恨み言をいうのはやめにして、その場に立ち上がった。

「無責任なんてとんでもないです、ミュウさま。あなたがここに連れてきてくださったおかげで、色々なひとに出逢えました。とても感謝しています。ありがとうございました」

「ん。そっか」

勇者は照れたように笑った。

「それならいいんだ。それから、ぼくのことはミュウ、と呼び捨てにしてくれていいからね。だって、ヒロトはもう友達だもん」

「ゆ……いや、ミュウ」

ぼくはじいんと来て、思わず涙ぐみそうだった。

この子はたしかに、勇者と呼ばれるにふさわしい優しい心を備えている。そう思った。

「じゃあ、あっちでお茶をご馳走するよ、ミュウ。最近は聖女さまのつてで王室御用達のお茶を飲んでいるんだけれど、これがびっくりするくらい美味しくてさあ」

「え？　聖女？　なんで聖女のつてが？」

「それはおいおい説明するよ。さあ、こっちへ」

そして、ぼくは室内でお茶を飲みながら、いままでの事情を話した。ミュウはふむふむ、とうなずきながら、興味深げにぼくの話を聴いてくれた。そして、苦しげに首を振った。

「ずいぶん苦労させちゃったんだなあ。ぼくのせいだね。ごめん」

「そんなことないよ！　ミュウがいなかったら、いまごろ死んでいたんだから。それに、いま思えばたいした苦労でもなかったよ。〈黒の森〉では死ぬかと思ったけれど――」

でも、おいしいこともあったし。そう続けようとして、ぼくはあわてて口を閉じた。だめだだめだ、ミシアとのことは永遠に秘密にしなくちゃ。

「ふうん」

勇者はなんだかにやにやしながらぼくの顔を眺めた。

「なんだかちょっと男らしい顔になったと思ったら、そういうことか」

「え、そう？」

「うん。精悍な顔つきになったよ。初めてここに連れてきたときとは別人みたいだ」

「そうかな……」

自分では気づかないうちに、変わっているのだろうか。たしかに、最近は体力をつけるために運動を欠かさないし、日本にいた頃とは違っているかもしれないが……。

ぼくが困惑しながらも歓んでいると、ミュウはうっかりと紅茶をこぼしかけた。こぼしかけた、というのは、紅茶をいれたカップが倒れかけた瞬間に直したからで、さすがに勇者というべき異常な反射神経だ。勇者はテーブルに置いた袋を気にしているようだった。

「危ない、危ない。本にお茶がかかっちゃうところだったよ」

「本？　何の本を読んでいるの？」

ぼくが何気なく訊くと、勇者も何気なく答えた。

「知らない？　いま、話題の作家アリシア・ラーダットの新刊。これがおもしろくてさあ。ぼく、大ファンなんだ」

「へ、へえ、そうなんだ」

ぼくは怪しい受け答えをしながら、冷や汗を流した。いかん、狼狽するな。勇者にばれるぞ。

しかし、ミュウはぼくの顔など見てもいないようだった。袋から本を取り出し、うっとりと眺めながら、ほっと恋する乙女みたいなため息をつく。

「覆面作家だから、正体はわからないんだけどね。きっときれいなお姉さんか、それとも優しいおばあさんだよ。うん、ぼくにはわかる！　文章を読めばわかるよ！　いっぺん逢ってみたいなあ。勇者の権力を使って出版社にねじ込んでみようかなあ」

「やめろ」

「え？」

「な、なんでもないよ。うん、ラーダットさんか。ぼくもそのうち読んでみるよ。ところで――」

ミュウには一生、秘密を守ろう。乙女の切ないあこがれを壊したら可哀想だ。ぼくは内心でそう決意した。

第二話「勇者の実家へ遊びにいこう」

ぼくとミュウはよもやま話に話を咲かせた。ミュウはぼくが教会生活を送っているあいだに、ダークランドから侵入してくる魔族を倒したり、北方のドラゴンと仲良くなったりしていたらしい。凄いというか、凄すぎて現実感がない話だ。ドラゴンと仲良くなったってどういうこと？

「つまり、ぼくは北嶺のドラゴンキングダムに招待されたんだ」

何がつまりなのかわからないが、ふむふむ。

「本来、そこはひとが踏み込んではいけないところなんだけれど、ぼくは勇者だから特別にね。いやあ、素晴らしいところだったよ。ドラゴンたちもみんな親切だったし、王女のシーダ姫とはすっかり仲良くなっちゃった。可愛い子なんだあ」

「へえ」

スケールが大きすぎて正確に認識できているのかどうか怪しい話だな。

とにかく、そんな波乱万丈な人生を送っているミュウがぼくのことを憶えていてくれたことは嬉しかった。ほんとうならぼくのことなどとうに忘れ去っていて当然の身の上なのだ。それが、こうして気にかけてくれている。さすが光の勇者だ。思いやり深い。

「それで、ヒロトはこれからどうするの？」

勇者に訊かれて、ぼくは考え込んだ。

「そうだなあ。ずっとここにいても、地球に還る手段は見つからないだろうからなあ」

そもそも、こうしてミュウと再会できた以上、もはやこの教会にいる必要はなくなったわけだ。どこかにひっこしでもするか。流行作家にして司祭にして教会騎士にふさわしい広壮な住宅を借り受けるのも悪くない。もっとも、前者は覆面作家だし、後者ふたつは名のみだけれど……。

聖女の友人なのに、聖女と離れていいのか、と思われる方もいらっしゃるかもしれないから説明しておくが、ソーニャはとっくにこのナナルルを離れ、べつの大都市に去っていってしまった。いつかまた逢うこともあるだろうが、忙しい奴である。

「じゃあ、さ」

ミュウは湖水色のひとみをきらきらさせた。

「ぼくといっしょに冒険しない？　悪を求めて東奔西走、楽しいよ」

「冒険？」

それはまた、非日常的な……。

「ヒロトは知らないかもしれないけれど、勇者は〈冒険者ギルド〉に属する冒険者の頂点でもあるんだ。だから、いろいろな遺跡や廃墟を冒険して、さまざまな宝物を捜したりすることも仕事のひとつなんだ。ヒロトがシュタイトハイト大森林でそうしたようにね。も

ちろん、各地に出没する魔物を倒したりもする。ほんとうはいますぐダークランドの魔王城に乗り込みたいんだけれど、そういうわけにもいかないからね」

ミュウによると、魔王打倒は歴代勇者の悲願なのだという。しかし、魔王はダークランドの奥深く、魔王城と呼ばれる巨大なダンジョンにひそんでおり、勇者といえどもなかなか倒せるものではないらしい。それでも、ある魔王と一騎打ちをくりひろげ、歴史に名をのこした勇者もいるが、結局、勝負は相打ちに終わり、勇者の悲願は次代に持ち越されたのだそうだ。それなら、勇者がいる意味がないかというと、そうでもない。勇者がいるからこそ、宿敵である魔族はダークランドから攻めて来ないという側面があるのだ。

「もっとも」

と、ミュウはため息をついた。

「魔王ひとりを倒したところで、すぐにダークランドが亡びるってものでもないんだ。そもそもいまの魔王はもうすぐ身罷るって噂もある。そうしたら、魔王の子どもが位を継ぐんだろうね。敵の組織は堅牢で、いったいどうやったら倒すことができるのか。さっぱりわからないよ」

「大変だね」

「うん」

場の空気が重くなってしまった。話を変えなければ。

「と、ところでさ、ぼくにも冒険ってできるのかな？　きっと危険

なんだろうけれど」

「まあね」

ミュウはにっこり笑った。

「危険じゃなければ冒険じゃないからね。次々襲いかかる魔族や魔物、悪漢どもと戦って生き抜くには、それなりの実力が要求されるよ。でも、いまのご時世、自分の力を強化するマジックアイテムがたくさん流通しているから、それを使えば比較的安全になるだろうね」

「マジックアイテムかあ」

剣や盾、指輪、腕輪、冠、あるいはガラス瓶などに魔力を込めたマジックアイテムは、いうまでもなく古代王国の遺産である。現代でもマジックアイテムを造り出すことができる〈錬金術士〉は存在しているが、数は非常に少ない。

マジックアイテムの効果はさまざまだが、最も冒険に役立つのは、いうまでもなく武器防具のたぐいだ。世の中には、〈バスタードソード＋1〉とか〈シェルアーマー＋2〉とかいう、魔法の装備があり、それを使うと、平凡な剣士が熟練の戦士にあっさり勝てたりしてしまう。なかには、勇者が持っている〈ただひとりのための剣〉のように〈銘入り〉と呼ばれる伝説的な名品もあり、その価値ははかり知れないということだ。もっとも、価値が高いということは入手も困難だということで、そうそう簡単に市井の冒険者が入手できるものではないらしい。ある意味、夢のアイテムだ。

「もちろんほしいけれど、ちょっと手に入らないよね」

ぼくが苦笑すると、ミュウはぱちぱちと可愛くまばたきした。

「あるよ」

「え？」

「マジックアイテムならうちにいっぱいあるよ。ヒロトがほしいならあげるけど？」

「は？」

マジックアイテムといえば、最も平凡なものでも、ひとつ数万カペルで取り引きされている貴重品だぞ。それを気軽にあげてしまうって、どんな金持ちだ？

「ミュウって、ひょっとして大資産家のご令嬢だったりするの？」

恐る恐る訊ねると、ミュウはあわてて首を振った。

「違う違う。そうじゃないよ。ただ、うちには父さんと母さんが自力で取ってきたマジックアイテムが山ほどあるから、あげてもいいってだけだよ」

意味がわからない。父さんと母さんが取ってきたマジックアイテム？　あなたのご両親は何ものですか？

「あれ、説明してなかったっけ？　ぼくの両親は、先代勇者の仲間だったんだ。〈狂戦士〉マジェストと〈魔法使い〉ミランダっていったら、相当に有名なんだけどなあ」

「狂戦士に魔法使い……」

そういえば、以前、本で読んだことがある気がする。先代勇者には五人のたよりになる仲間がいたが、そのうちふたりは結婚して子どもを作ったらしいと。

「それが、ぼくの両親だよ」

ミュウはあたりまえのようにいった。

「いまはイシュトリアの端っこのほうの田舎村に住んでいるよ。そこまで来る気があるなら、ヒロトに合うマジックアイテムをプレゼントするけれど？」

「……本当ですか」

あまりにもおいしすぎる話だが、ほかならぬ勇者がいうのだから、嘘ではないのだろう。そうでなければ詐欺を疑うところだが。

ぼくは迷った末、結局、この教会の部屋を引き払い、勇者に付き合って旅に出ることに決めた。どうせ、もう、ここにいる必要はないんだから。

ぼくがここを出ていくと聴いて、ナローラは沈んだ表情を見せた。

「いままでありがとうございました、ご主人様。あなたさまのご恩は忘れません」

ぼくは二、三度まばたきして、笑った。

「何いっているんだよ！　ナローラも付いてくるに決まっているじゃないか！　ナローラがいなかったらだれがぼくを朝起こしてくれるんだよ！」

「ご主人様！」

ナローラのひとみから、ひと筋、雫がこぼれた。

彼女はひと目もはばからずぼくに思いきり抱きついてきた。その柔らかな背中を撫ぜる。

「大丈夫だよ、ナローラ。ぼくたちはいっしょだ」

「はい、はい」

ナローラが泣きやむまで、ぼくはとても優しい気もちで、彼女を抱いていたのだった。

第三章「レーム村」

そうして、長い旅が始まった。ぼくはまだしも、ナローラは馬に乗れないから、馬車を借りて旅することになった。その代金はぼくが払う。ミュウはぼくが急に金持ちになったことに驚いたようでいろいろ訊いてきたが、何とかごまかした。

この世界の旅は飛行機で数時間、というわけにはいかない。ましてミュウの実家はアイビス王国の彼方、西方はイシュトリア王国にある。アイビスとともに東方を形成する国のひとつだが、噂によると、アイビスとはまるで文化が違うのだとか。

「イシュトリアは、ダークランドと領土を接しているだろう。ダークランドの文化がいろいろ入ってきているんだ」

馬車のなかで、あたりまえのようにいうミュウに、ぼくは驚いた。

「え？　ダークランドと文化交流があるの？」

「もちろん、公式には認められていないよ。でも、となりあっているわけだからね。それは影響を受けるよ。イシュトリアには魔族の血をひいているひとだっている。ひどい差別にあっているけれど、とにかくいることはいる。とってもいい人たちだったよ。魔族だからって、皆が皆、邪悪だとはいえないと思う」

「ねえ、ミュウ」

ぼくはそっと訊ねた。

「ほんとうに魔族とは戦わなくてはならないの？　平和共存は無理なのかな」

「無理だね」

ミュウはきびしい表情で断定した。

「ぼくはダークランドの魔族によって亡ぼされた村を見たことがある。それはひどいありさまだった。とても細かく説明する気にはなれないけれど――でも、あの日、ぼくは自分の無力さに泣いたよ。必ず魔王を倒し、ダークランドを滅ぼすと決めた。それはぼくの命にかけてもなしとげなければならない使命なんだ。勇者はそのために、そのためだけに存在しているといってもいい。仮に魔族と和平を結べるとしたら、魔王を倒した、そのあとだね」

「で、でも」

ぼくは食い下がった。

「魔王は代替わりするんだろう？　新しい魔王は新しい政策を持っているかもしれないじゃないか。そしたら、今度は仲良く――」

「無理だろうね」

ミュウの表情は変わらなかった。

「ダークランドには魔王のほかにも何人かの大貴族がいる。その大貴族たちの支持を取り付けなければ、たとえ魔王の子といえども新魔王に就任することはできないんだ。大貴族たちが考えを変えないかぎり、きっと魔王も侵略政策を改めたりしないと思うよ。つまり、

この東方をダークランドの侵略から守る術はただひとつ、ぼくが魔王を倒すことであるわけさ」

ぼくは嘆息することをかろうじてこらえた。

この少女は、この小柄な身体に、なんと重い宿命を背負っているのだろう。ただ勇者に生まれたというそれだけの理由で、ひとつの国どころか、ひとつの文明を背負わなければならないのだ。彼女が命をかけて戦っているあいだ、各国の王侯たちは何をしているだろう？　美酒でも食らい、美女をはべらせているのだろうか。それは途方もない不公平であるように思えた。

「ま、そんな重い話はよそうよ」

一転して、ミュウは笑顔になった。

「ぼくの実家は楽しいところだよ！　お父さんもお姉ちゃんもいい人だから、きっとヒロトたちを歓迎してくれるよ。また宴会かなあ。お父さん、飲みすぎないといいんだけれど」

ミュウが意図して話題を変えたことはわかったが、前の話を続けたいとも思わなかったので、ぼくは黙ってうなずいた。ひとつ気づいたことがあったので、訊ねてみる。

「お母さんは――」

「ぼくを出産するとき、亡くなった」

ミュウはなんでもないことのようにいった。その表情には微塵の変化もない。

「もともと、トリックの才能には恵まれていたけれど、それほど身体の強いひとじゃなかったんだ。ふたり目の出産は無理だってお医者さんにいわれていたんだって。でも、それでも産むことを選んで、そして、亡くなっちゃった」

ミュウはちょっと照れたようにはにかんだ。

「誤解しないでね。ぼくは自分がお母さんを殺したなんて思っていない。だって、お母さんはぼくをとっても愛していたんだよ！　ぼくを命がけで産んでくれるくらい。そう、お母さんは自分の命を使ってぼくを守ってくれたんだ。だから、ぼくもそうする。この命をかけて、ぼくの愛する人びとを守る。たとえそれが、ほかのだれかの幸せを崩すことになるとしてもね」

この勇者は、すべて覚悟の上なんだ。ぼくはそう悟った。彼女は、自分が絶対正義ではありえないことを知っている。知った上で、たとえダークランドの秩序を崩すことになるとしても、東方の平和を守る意思を固めているんだ。

それが、勇者というものなのか。

問題があまりにも重すぎて、ぼくには何が正しいのかわからなかった。

ただ――

「勇者さま。わたしはあなたがわたしたちの勇者さまであることを、誇りに思います」

それまで黙っていたナローラが、勇者の手をそっと握っていった。ぼくもまったくその通りだと思った。だれかが勇者の重責を背負わなければならないとすれば、それがこの子で、良かったのかもしれない。

旅は続いた。

アイビスの王都ナナルルとミュウの故郷レーム村は、国境を超えるとはいえ、比較的近いところにあるのだが、それでも馬車だと長い時間がかかった。新幹線があればなあ、と何度思ったことか。実はミュウひとりだけなら〈転移〉のトリックで帰れるらしいのだが、彼女はぼくたちに合わせてくれた。つくづく、優しい子だと思う。

そして、長く単調な行程の末に、ぼくたちはついに国境をまたぎ、イシュトリアの荒野を駈け、レーム村までやってきた。人口数百人ばかりという、ほんとうに小さな村だった。ぼくたちの馬車が入っていくと、客などめったに来ないのだろう、村人たちがぽかんとした顔になった。しかし、ミュウが顔を見せると、人びとの表情がぱっと明るくなった。

「あらまあ、ミュウちゃん、帰ってきたの」

「うん、一時帰宅だよ！　友達も連れてきたんだ！」

ぼくたちは馬車を村の外に止めて、村に入っていった。道行くひとのだれもがミュウを見かけると朗らかに挨拶してきた。そして、なぜかぼくを見るとこそこそと耳うち話をする。なんだろう。ぼく、そんなにひどい形相をしているかな？　金が入って、人相が悪くなったとか？

首をかしげながら歩いて行くと、ミュウは一軒の木造住宅の前でとまった。

「お父さん！　あなたの大事な娘が帰ってきたよ！」

「――なんと！」

どたばたとかけ出す音がして、扉が大きく開いた。あまりに勢い良く開けすぎて、反動で閉まりかけるくらいだった。そこから出てきたのは、ひとりの髭面の大男だった。

「お父さん！」

「おお、ミュウ！　帰ってきたのか！」

ふたりがかたく抱きあう。というか、大男がミュウを抱きあげる。

となると、このひとが狂戦士マジェストか。先代勇者の仲間だったというくらいだから、さぞ強いのだろう。というか、ひと目見て恐ろしく強いことがわかる。隆々と盛り上がった筋肉は、日本でいうならプロレスラーさながら。そして、この世界で魔物たちと戦って生き抜くには、プロレスラーどころではない実践能力を要求されるに違いない。このひとは、怒らせないようにしよう。

しかし、マジェストは、愛娘のとなりにぼくが棒立ちしていることに気づくと、じろりと、剣呑な目つきで睨みつけてきたのである。あの、ちょっと怖いんですけれど……。

「ミュウ、この方たちはどなただ？」

「ぼくの友達だよ」

「そうか。ミュウの友人か。まあいい、入ってください」

マジェストの剣呑な表情は変わらず、ぼくとナローラは顔を見あわせて首を傾げたのだった。

ぼく、何かしましたか？

第四話「恋人疑惑」

「まあ、座れ」

室内に入ったマジェストは、あくまでも機嫌わるく命令した。日本人としてはわりあい背が高いぼくより２０センチは長身の男にこうして睨まれていると、人食い熊と相席しているようで、実に落ち着かない。

それにしても、古ぼけた木組みの家だが、意外にもなかは清潔で快適だった。文字通り埃ひとつ落ちていない。この熊男、意外と清潔好きなのかな？　それともお姉さんのほうだろうか？

「ミュウ。帰ってきたことは歓迎する。ここはお前の家だ。いつでも好きなときに帰ってくるいい。だが、いったいこの男は――」

「ミュウ！」

マジェストの言葉を遮って、若い女性の声が聴こえてきた。と、部屋の奥からひとりの娘が飛び込んできて、ミュウを椅子ごとぎゅうっと抱きしめる。

「ミュウ！　ミュウ！　わたしのミュウ！　ああ、嬉しい。帰ってきてくれたのね！」

「あの、お姉ちゃん、ちょっと苦しいんだけれど」

ひと目見て、ミュウのお姉さんであることがわかった。それくらい顔だちが似ていたのだ。ただ、ミュウの顔に少年めいた凛々しさ

があるとすれば、このお姉さんの顔だちは、より優しく柔らかく女性的だった。きっとふたりとも、母親に似たのだろう。熊おやじに似なくて、ほんとうに良かったね。

しかし、お姉さんの性格は、ミュウとはだいぶ違っているようだった。

「ああ、ミュウ。もうどこにも行かさないわ。一生、わたしが面倒を見てあげる」

いかにもいとおしそうに妹に頬ずりする。

「お母さんがいないいま、この世にたったふたりの家族なんだもの。いっしょに暮らすのがあたりまえでしょう？　魔王なんて聖女にでもなんとかさせればいいんだわ。そうよ。わたしたちふたりはおばあちゃんになるまでいっしょに暮らすのよ」

「いや、家族は三人なんだが――」

マジェストが気まずそうに訂正するが、あきらかにお姉さんは聴いていなかった。仕方なく、ミュウがお姉さんの腕のあいだからそっと抜け出す。むろん、ミュウの力と技をもってすれば簡単なことだっただろうが、お姉さんを傷つけまいと気を遣っていることがよくわかった。

「紹介するよ。ヒロト、ナローラ。このひとはぼくのお姉ちゃんでトパーズ。こっちがお父さんのマジェスト」

「あら、お客さまがいらしたのね」

トパーズはようやくぼくたちのことに気づいたようで、二、三回まばたきすると、にっこり笑った。さすがミュウのお姉さんだけあって、ものすごい美人だ。いったいこの世界はどれだけ美女に恵まれているんだろう？

「さあ、さあ、こちらにお座りになって。あら、椅子が足りないわね。奥から持ってくるからちょっと待っていてね」

有無をいわさずふたたび奥へ戻ってゆく。しばらくして、椅子を二脚持って戻ってきた。

「さあ、どうぞ」

「はあ。失礼します」

ぼくたちは否応なくその場に座ることになった。

ミュウがちょっと苦笑しているのがわかる。なるほど、このお姉さんはこういうひとらしい。

「ところで、だ」

主導権を奪われたマジェストがわざとらしく咳払いをした。凄い迫力だ。

「ミュウ、お前とこの人はどういう関係なんだ？　見るからに細っこい奴だが――」

「だから、友達だよ」

いとも無邪気にミュウが答える。

「この旅のあいだに、すごく仲良くなっちゃった。アリシア・ラーダットの小説にすごく詳しいんだ」

それはまあ、ぼくが書きましたから。

マジェストは納得できないようすで、腕を組んだ。ようやく何を疑われているのかわかりはじめたぼくは、かれの機嫌を損ねないようにと小さく口を挟むことにした。

「あの」

「何だ！」

怒鳴りつけられた。

ぼくは泣きそうになりながら続ける。

「ぼくとミュウはほんとうにただの友達です。決してやましい間がらじゃありません。今日ここに来たのだって、ミュウが誘ってくれたからで、べつにそういう関係じゃないんです」

ミュウはわけがわからないようすでぱちぱちとまばたきしていたが、そのうち、何をいわれているのか悟ったのだろう、可愛い顔を沸騰したやかんのように真っ赤にして、父の肩を叩いた。

「お父さん！　ひょっとしてヒロトとぼくが恋人同士だと思っていたの？　違うよ！　ぼくたちはただの友達！　ヒロトはただここにマジックアイテムを取りに来ただけなんだよ」

「マジックアイテムだと？」

マジェストの眉が、さらに剣呑につり上がった。ぼくはかれが一歩でもこっちに向かってきたら、ナローラを連れて逃げ出そうと身がまえたが、瞬間、かれの顔はぱあっと笑顔に変わった。ホッキョクグマの笑顔を想像してもらえば、あたらずといえども遠からずだろう。

「なんだ、そうだったのか。先にそういってくれればいいのに。それじゃ、ミュウとヒロトくんは特別な関係じゃないんだね？」

「違う違う。もう、お父さんったら、すぐそうやって疑うんだから」

ミュウが父の背中をばんばん叩く。そうとう痛いんじゃないかと思うのだが、マジェストは山のようにびくともしなかった。さすがだ。

「マジックアイテムなら倉庫にいくらでもあるから、適当に持って行きなさい。なあに、うちにあってもどうせ宝の持ち腐れだ。ミュウの友達の役に立てるならそのほうがいい。好きなだけ持っていきたまえ」

えらく気前のいいことをいう。ひとつで家が一軒買える額のアイテムも少なくないんだが。

ぼくはマジェストが機嫌を直してくれたことにほっとして、かるくほほ笑んだ。しかし、そこにトパーズお姉さんが、いかにも哀しげに嘆息しながら爆弾を放り込む。

「でも、ミュウはヒロトさんのこと、好きなのよね」

「なんだと！」

マジェストが立ち上がる。ぼくはあわてて手を振ったが、マジェストはきつい目でぼくをにら見据えていた。暴力反対！

「昔からミュウが好きになるのはこういうタイプの子なのよね」

トパーズお姉さんは続けた。

「ひと目で気に入っちゃったんでしょう？　わかるわ。ヒロトくん、っていったわね。男の子なのに、可愛い顔をしているもの。そっか、わたしの可愛いミュウも、いつまでもわたしのものではいてくれないのね。哀しいわ。でも、祝福しなくちゃね……」

お姉さん、頼みますから爆弾に火をつけて火薬庫に放り込むのはやめてください。

そういいたかったが、いうわけにもいかず、ぼくはわれながら欺瞞にみちた愛想笑いを浮かべた。マジェストは、おそらくいまでもひとのひとりくらいかるく殴り殺せるであろう拳を握りしめる。お父さん、大人気ないですよ？

「違うよ！」

ミュウが叫んだが、マジェストの耳には届かないようだった。哀れ、一巻の終わりかと思われた、そのとき。

「そう、違います」

ナローラが冷めた口ぶりで呟いた。

「考えてもみてください。このご主人様が勇者さまが惚れるほどの男に見えますか？　たしかに背丈こそそこそこ高いけれど、腕は細いし、体力ないし、八方美人だし、口先で生きているし、どうしようもないひとですよ？　こんなひとにミュウさまが惚れる？　冗談いわないでください。天地が逆さになったってありえません」

その場が、しいん、と気まずい沈黙に静まりかえった。ナローラは無表情のままその場に座りつづけている。マジェストがまたも咳払いした。

「そうか。それもそうだな。ヒロトくん、疑って申し訳なかった。お詫びにうちのマジックアイテムを一式プレゼントしよう。お礼はいらん。さっきもいったが、娘の友人なんだからな」

「――ありがとうございます」

こうして、この場はなんとかうまく収まり、何ひとつ砕けることはなく終わったのだった。

ぼくの繊細なハートを除いて。

第五話「魔槍の呼び声」

誤解が解けたところで、ぼくたちはさっそくマジックアイテムの倉庫を見せてもらうことにした。

それは家の裏手にある小さな小屋だったが、恐ろしいことに、ほんとうに魔法の道具が山と積まれていた。むろん、ぼくにはひと目でマジックアイテムと見抜く眼力はないのだが、あきらかにこの時代のものではない繊細な装飾がほどこされた剣や防具が整然と並べられているところは圧巻だった。ひとつの小さな美術館のようにすら思えた。ここにあるものすべて合わせたら総額でいくらになるのか、検討もつかない。

「これ、もっと厳重に警備したりしなくていいんですか？」

思わず訊ねると、マジェストは獰猛な笑顔を見せた。

「おれの家から盗みだせる奴がいると思うか？」

もっともだったので、ぼくは黙った。それにしても、これほどのものをただでいただいて良いのだろうか。やはり、心ばかりでも、代価は置いてゆくべきだろうな。

ぼくの内心などおかまいなしに、ミュウとマジェストはアイテムの品定めを始めた。

「これはどう？　〈暗殺の短剣〉。武器の気配を消してあいてを攻撃できるよ」

「だめだめ。男の武器なんだ。もっと正面からの戦闘を想定したものじゃないとな」

「じゃ、これ。〈バスタードソード＋2〉。かなりの戦闘力を期待できるんじゃないかな」

「ふむ。しかし、小僧に使いこなせるかなあ」

「それじゃ――」

延々とそんなやり取りが続く。ぼくはなんだかいたたまれなくなって、外へ出た。すると、そこにはトパーズさんが待ち受けていた。

「ねえ、ヒロトさん」

さりげなくぼくをとなりに座らせて、彼女はじっとぼくの目を覗き込んできた。

「ほんとうのところ、ミュウのことはどう思っているの？」

ええと、ここはどう答えるべきなのかな。

「強いし、格好いいし、凛々しいし、尊敬しています」

「それだけ？　ほんとにそれだけなの？」

「え、ええ」

自分でも確信はなかったが、とりあえずうなずいておくと、トパーズは何か失望したようにため息をついた。

「なあんだ。心配して損しちゃった。あなたがミュウを連れていってしまう人なのかと思った」

「ミュウを連れていってしまう人？」

「そう。いつか誰かがミュウを連れていってしまって、そしてもう、あの子はわたしたちのもとへは戻ってこない。それはわかっているんだけれど、その日が来るのが怖くてね」

「は、はあ」

ぼくにはまだ、年長の女性の悩みを優しく聴いてあげるなんてことはできそうもない。生返事を返してしまった。トパーズは気にしたようすもなく、からだを寄せると、目を覗き込んできた。

「やっぱり可愛い顔している。ミュウの好みだわ」

こちらに来てからいくらか慣れたとはいえ、もともと女性に免疫のなかったぼくだ。美女に正面から覗き込まれてあわてた。しかし、トパーズはそれを無視してぼくの頬にふれる。

「やだ、お肌すべすべ。食べちゃいたくなってしまうくらい」

「トパーズ、さん……？」

「わたしみたいな年上の女は、嫌いかしら？」

「い、いえ、大好きです」

トパーズの顔がゆっくりと近づいてくる、と思ったとき、後ろで咳払いの音がした。見ると、けわしい表情をしたナローラがそこに立っている。ぼくはあわててからだを離した。トパーズはなぜか残念そうに指を咥えている。な、なんなんだ、このひと。

見ると、マジェストとミュウがひと組の装備を抱えて小屋を出てくるところだった。

「結局、これにしたよ。〈ロングソード＋3〉と〈シェルアーマー＋2〉。これならヒロトでも使いこなせると思う。もちろん、それなりの修行は必要だけれどね」

「へえ」

ぼくはその剣と鎧を手にとって見てみた。

たしかに、いずれも重厚な見た目に反して、異様に軽い。ぼくの上半身ほどもある長大な剣を振るっているのに、ほとんど棒切れを振りまわしている程度の実感しかないのだ。それでいて、威力はふつうの剣を遥かに上回る。癖になりそうなアイテムだった。

「もっとも、こんなものただの気休めさ」

マジェストがふんと鼻を鳴らした。

「たびかさなる戦闘を生きのこるコツはな。いいか。自分より強い奴とは戦わないことだ。あいての実力を正確に見極め、己の実力を的確に認識し、倒せるあいてとだけ戦うこと。それだって確実だとはとてもいえん。命がけの実戦ってやつはな、くり返せばいつかはジョーカーをひく運命なんだ。まあ、とにかくなるべく戦わないこ

とだな」

「なるほど」

身も蓋もないが、ありがたいアドバイスだった。何より、勇者の仲間として、おそらくいくつもの死線をくぐり抜けてきたであろうひとのいうことなのだ。参考にならないはずがない。

「まあ、小僧、いや、ヒロト、死にたくなければ冒険の旅になど出ないことだ。〈ギルド〉の若造どものは一様に冒険にあこがれ、荒野へ旅立っていくが、たいてい待ち受けるものは骸骨になる運命だよ。冒険は楽しいものでも愉快なものでもない。絶え間ない緊張を強いられ、精神がおかしくなる奴もいる。一部の限られた人間だけが冒険を真に味わうことができるんだ。そう、おれのような英雄だけがな」

大言壮語、というべきだろうか。否。たしかな実力に裏打ちされた発言だった。ぼくはほとんど圧倒されて、小さくうなずくことしかできなかった。

と。

ぼくは、倉庫の奥に、薄よごれた白い布で包まれた一本の長い棒のようなものを見つけた。それは、ふしぎと心惹かれる棒だった。何だろう。手にとって、布を外してみたくなる。あれが自分のものになったらどんなにいいだろう。きっと綺麗な道具に違いない……。

「あれはだめだ」

ぼくの視線を読み取り、マジェストが厳しい顔で否定した。

「あれは〈呪われた魔槍グングニル〉。かつて先代勇者が敵の暗黒騎士団長を破って奪った武器だ。ミランダが何重ものトリックをかけて厳重に封印したんだが、いまでも何かとうめきやがる。いいか。決して手をふれるんじゃないぞ。奴はいまでも解放されるときを待っているんだからな」

「はい」

ぼくはそう答えるしかなかった。〈呪われた魔槍〉というからには、何かしら副次的な作用があるのだろう。しかし、それでもぼくはその槍を触ってみたかった。なぜだろう、槍がぼくに呼びかけている気がするのだ。

ほら。

槍が、力をくれてやろう、といっている。

非力なぼくに、強大な力をくれると。ぼくの弱さを補ってくれると。あの槍さえ手にいれれば、ぼくは無敵になれるんだ。だれにあなどられることも、嘲られることもない、最強の存在に――

「どうしました、ご主人様」

ナローラに呼びかけられて、ぼくははっとした。何か白昼夢を見ていたような気分だ。

「なんでもない」

ぼくは首を振って、その場を立ち去ることにした。

しかし、倉庫の奥で低く哀しげにすすり泣く〈呪われた魔槍〉の声音は、ぼくの耳に、いつまでもいつまでも響きつづけていたのだった。

第六話「世界の王」

鋭く踏み込んで裂帛の気合を込めた一撃を打ち込むと、ミュウはそれをかるく逸らして、ぼくの後ろへ回り込んだ。

ぼくは素早く向き直り、ふたたび気合を込めて木剣を振るう。初めは彼女を傷つけないよう手加減していたが、いまではぼくの攻撃があたることは絶対にないとわかりきっているので、本気の一撃だ。しかし、その本気を、ミュウは自分の木剣で軽々と受け止めた。

「なかなか良くなったね」

余裕の微笑を浮かべてみせる。

「あと一ヶ月くらい打ち込みをすると、下半身が安定して威力が増すよ」

くそ。

最強の勇者だとわかっていても、同い年くらいの女の子にこうもたやすくあしらわれると悔しい。ぼくは力みかえって打ち込み、そのたびにはね返された。戦えば戦うほどに、根本的な能力が違うのだ、とわかる。その気になれば、ミュウは、ぼくなど指一本であしらえるかもしれない。

もうぼくはこうして二週間も修行していた。もちろん、木剣での模擬戦だけではない。基礎体力をつけるための走り込み、剣の打ち込み、ロッククライミングなど、実に多岐にわたり、しかも厳しいトレーニングを、必死にこなしている。

ぼくはほんとうに非力だった。

日本にいた頃はそんなこと気にしたこともなかったのに、いま、その非力さはぼくの大きな劣等感になりつつある。勇者であるミュウや先代勇者であるマジェストはともかく、そこらの村人にすら勝てないのだ。まあ、かれらは日々力仕事をしているのだから当然なのだけれど、それにしても、情けない。

「大丈夫ですか、ご主人様」

模擬戦を終え、荒い息でぶっ倒れているぼくに、ナローラが泉の水で絞ったタオルを優しくかけてくれた。

「だ、大丈夫だよ」

あわてて起きあがろうとすると、ナローラに寝かされた。

彼女はいかにも気遣わしげな表情でぼくを見おろしていた。厳しいとはいえ、あくまでただの修行なのに、何がそんなに心配なんだろう？

「ご主人様」

ナローラはそっとぼくの頬を撫ぜた。

「ご主人様は、なぜ、こんなに過酷な修行をなさるのですか」

「なぜって」

質問の意味がわからず、ぼくはあいまいな微笑を浮かべた。

「それは強くなりたいからだよ」

「そこまでして、強くならなければならないものでしょうか」

ナローラの表情は、まるで子どもが無茶をして怪我をしてきたときの母親だった。

「わたしにはわかりません。強くなくても良いではありませんか？どんなに弱くても、ご主人様はわたしの大切なご主人様です。優しくてちょっと気弱で、でもひとには親切なご主人様です。それではいけませんか。それだけでは、足らないのですか。こんなに傷を作ってまで強くなったりしなくてもいいのではないでしょうか。それともわかしは、間違えているのでしょうか」

「ナローラ」

ぼくは彼女に何かを伝えたくて、でもそれが何なのかわからなくて、もどかしかった。

そうじゃない。

そうじゃないんだ。

ぼくは、ただ力を求めているわけじゃない。強くなることそのものに溺れているわけじゃない。でも、ぼくは、このままじゃ終わりたくないんだ。

ぼくは、日本で、ただの平凡な高校生だった。どこにでもいる、

あたりまえの、何百万分の一かの高校一年生に過ぎなかった。あの頃は、そのことに何の不満も持っていなかった。でも、いま、ぼくは変わりたいと思う。成長したいと願う。もっと上へ行きたいと感じるんだ。

なぜ、そうなったのか。それは、ミュウとの出逢いのおかげかもしれないし、それこそナローラを守るためなのかもしれない。ぼくにはわからない。でも、いま、ぼくは全力を振り絞ってでも、強くなろうとしている。向上しようとしている。そのことを認めてくれたっていいだろう？　だって、だれも裸の情けないぼくなんて必要としてはいないんだから。もともとのつまらないぼくという人間を認めてくれるひとなんてだれもいないんだから。きみだってそうだろう、ナローラ？　ぼくが金持ちで強くて有名になったほうが誇らしいだろう？　だったら、いまのぼくを少しは褒めてくれたっていいじゃないか。

そういうふうにいいたくて、でもいえなくて、ぼくは困った。なんでわかってくれないんだ、と八つ当たりのような腹立ちを感じた。

結局、どんなにちゃちなものであれ、男の野心なんて、女の子にはわからないのかもしれない。ナローラだって、しょせんは他人だ。わかってもらえると思うほうが甘えているのだろう。

「ヒロト！」

マジェストの鋭い声がぼくを呼びつけた。

「さあ、いつまで休んでいる。休憩はもう終わりだぞ。いいか、魔物はお前の体力回復を待ってくれたりしないんだからな」

「はい！」

ぼくは無理にからだを起き上がらせた。ほんとうのところ、あと一時間でも二時間でもそこに横たわっていたかったのだが、そうするわけにはいかないのだった。日本にいた頃のぼくならそのままごまかして寝転がっていただろう。しかし、ぼくはこの世界でミュウという理想を目にしてしまった。ナローラという愛情を知ってしまった。もう逃げることはできない。だれよりもぼく自身がそれを許さない。

ほら、こういうぼくは偉いだろう？　そのことだけでもわかってくれないかな。

しかし、ナローラはそんなぼくをひたすら心配そうに見つめるばかりで、ぼくはそれがひどく気に入らなかった。

どうしてぼくを認めてくれないんだ！　こんなに努力しているっていうのに。

（犯っちまえよ）

ぼくのなかで、誰かがささやいた。

（あんな女、押し倒して犯してしまえばいうことを聴くようになるさ。それでも従わないようだったら、お前の力を魅せつけてやればいい。お前はもう、無力じゃないんだから）

それは、とても甘い囁きだった。そうだ、とぼくは内心で呟いた。ぼくはもう弱くなんかない。ぼくは強い。力を持っている。女の身体も知っている。あの、非力な童貞坊やはどこにもいないんだ。

ぼくは強い。

（そうだ。お前は強い。どんな女もお前の力にひれ伏し、従うことだろう。それが力の持つ魅惑だ。お前はもう、奪われる側から奪う側へと回った。もうだれもお前をばかにすることはできない。もう二度と奴隷になることもない。今度はお前が奴隷を生み出す番だ。さあ、あの女を犯せ。勇者だか聖女だか知らないが、あの高慢な連中も組み敷いてしまえ。お前は世界の王になるだろう。それだけの力をおれがくれてやろう）

世界の王。

あまりにも魅力的な誘惑だ。

すべての男たちがぼくの前に従い、すべての女たちがぼくに身体を開く。ああ、それはなんて素晴らしい桃源郷。ぼくが支配し、ぼくが管理する。ぼくが蹂躙し、ぼくが征服する。そう、このおれがこの世界を血で――

「何しているの、ヒロト」

ミュウに呼びかけられて、ぼくははっと吾に返った。

何を考えていた？

ぼくは自分の思考の変遷にぞっとして、勇者に向けて「なんでもない」と首を振ってみせた。

なんでもない。そのはずだ。

第七話「ヒロト変貌」

その日は猛烈な雨で、ぼくたちは外へ出ることができなかった。この世界、この時代には、現代日本のような多彩な娯楽はない。雨に閉じ込められてしまえば、ひたすら何らかの作業に没頭して時間を潰すことしかできない。ぼくが知りあったこの世界の人びとは、そういう時間の潰し方がとてもうまかった。ナローラなど、糸と編み棒さえ与えておけば何時間でも編み物をしていたし、ミュウやマジェストですら、部屋の中に閉じ込められることに退屈を感じてはいないようだった。ただ、ぼくだけが何かに急かされていた。

「ねえ、ヒロト、そんなに身体をいじめると、かえって良くないよ」

ミュウにいかにも心配そうに忠告されて、ぼくは腹筋をやめた。

そろそろどこかを壊しかねないほどの負荷が身体にかかっていることはわかっていた。それでも、何かしていないと不安で、居ても立ってもいられないような気がして、ぼくは自分をいじめていた。つい数ヶ月前は、身体を動かすことなんて億劫でならない帰宅部だったのに、変われば変わるものだ。

いや――ほんとうは何も変わっていない。ぼくの本質はあの頃の怠惰な子どものままだ。ただ、そこから変わろう、変わりたい、とそう思っている。そこだけがたったひとつ違う。ぼくはいまもむかしも臆病なネズミだ。しかし、そのままでは終わりたくない。だから、頑張らなければならないのだ。たとえ、どれほど努力しても届かないところがあるとしても。それでも、だ。

一心に身体をいじめていると、しだいに、周囲の音が耳に入らな

くなってくる。烈しく降りしきる雨の音が耳から消え、周囲の人びとの声が消え、ありとあらゆる雑音が消え、世界そのものがぼくのなかから消失する。のこるものは、ただ筋肉の痛みだけ。ぼくは自分の肉体と対話しながら限界のポイントを探っていく。それはいままでは想像したこともなかったような形の快楽だった。

なるほど、とぼくは思った。スポーツ選手たちはこの快感に取り憑かれているのか。たしかにちょっと癖になりそうだ。

しかし、あまりに肉体を苛みすぎれば、それはぼく自身に反逆する。適度なところでやめておかなければならない。それはわかっているのだが――。

「ねえ、ヒロト、何をそんなに焦っているんだい？」

勇者の言葉に、ぼくは二、三度まばたきした。

「焦っている？　ぼくが？」

「そうだよ。ぼくにはそういうふうに見える。ゆっくり成長していけばいいのに、一日でも早く一人前になろうとしているように見える。なぜだい？　どうしてそんなに急ぐんだい？」

「どうしてって……」

どうしてだろう？　ただ、思うのだ。もっと強くならなければならない。もっと賢くならなければならない。もっと、もっと、もっと、と。

心を焦燥が灼くのだ。己のふがいなさに歯噛みさせられるのだ。

ああ、ぼくはなんと弱く、なんと愚かで、なんと矮小なのだろう。ぼくは無だ。無価値であり、無意味だ。ここから己という存在を確立するためには、決死の努力が必要になるだろう。なんて遅くまで時を無駄にしてしまったのだろうか。早く、早く、早く取り戻さなくては。もっと、もっと、もっと獲得しつづけなくては。時が過ぎる。非情に過ぎてゆく。もうのこされた時間は少ない。そうして、ぼくは焦る。

「ねえ、ヒロト。ぼくは思うんだ。そんなに焦る必要はないって。ヒロトなら、いつか必ず、屈強の戦士になれるよ。たしかに、その歳で新しいことを始めようってことは楽じゃないけれど、剣技は舞踏とは違う。早く始めたものにしか資格がないってものじゃない。だから、もうすこし気を楽に持ってよ。ね」

いつか。

ぼくはその言葉に苦笑させられた。

いつか、とはいつのことだ。いつになったらぼくは強くなれるのだ？　それがわからないというのに、どうして気楽に時を過ごすことができるだろう。もっと自分をいじめつくし、持てる力を振り絞らなければならない。それだけが王へ続く唯一の道。ぼくが世界の王になるためのたったひとつの方法だ。

王？

ぼくはいったい何を考えているんだろう。ぼくなんかが王になんてなれるはずがないじゃないか。ぼくはただの平民。それも最も下等な人種に過ぎない。それが王になるなんて、笑い話だ。

否。

そうじゃない。

覇王となるための資格はただひとつ。力だ。万人を睥睨する絶対の力こそが、王の唯一の条件なのだ。それさえあれば、勇者も、聖女も、魔王も、従えられる。絶対の支配者になれる。至尊の玉座に座し、ダイヤモンドの宝冠を被り、王土を平定することができる。

それはきっと真紅と暗黒に輝く夢。しかし、決して不可能ではない。そう、不可能ではないのだ――。

「ヒロト、ヒロト」

気づくと、ミュウに肩を揺さぶられていた。

「ねえ、この頃のヒロト、なんだか変だよ？　なんだか思いつめたような目つきをして、どこかにひとりで行ってしまいそうに見える。どうしたんだい？　何か悩みがあるなら相談してよ」

「なんでもないよ。ちょっと疲れがたまっていたみたいだ」

ぼくはミュウの手を払いのけた。なぜかいまに限って、その手が鬱陶しくてならなかった。なぜ、ぼくに優しくしたりするんだ？　ぼくの非力さに同情してでもいるのか？　ずいぶん上から目線だな。光の勇者だなんて思って、調子にのっているんじゃないか？

（そうだ）

またも、あの内なる声が囁きかける。

（お前は暗黒世界の血まみれの王。われの支配者。そのような女のいうことなど、歯牙にもかける必要はない。お前を統べるのはただお前自身。そのほかのものは、ことごとく雑音に過ぎぬ。さあ、われのもとに来るが良い。そして、われを忌まわしい封印から解放せよ。そうすれば、お前自身もいまのお前から解放されることであろう）

そうだ。

ぼくはこのぼく自身から解放されたいんだ。自由になりたいんだ。あらゆる法、あらゆる道徳、あらゆる倫理を蹂躙しよう。獣のように世界を駈け、全土を血の色に染めよう。それが、それこそが覇王の道。選ばれしものの使命。そのためには、あれを、あの槍を――

「マジェストさん！」

そのとき、雨のなかを、ずぶ濡れになって、ひとりの男が駈け込んできた。

「大変だ！　結界を超えて魔物が現れた！　ひさしぶりの大物だ！　ミロンとクラックが怪我をしている。早く来てくれ！」

「おう」

そう、ひと言だけ応えて、マジェストは娘を見やった。ミュウもまた、無言でうなずく。

「ぼくたちは魔物を退治に行く。ヒロトはここに残って、万が一のときのためにお姉ちゃんとナローラを守っていて」

「待ってくれ！　ぼくも行く！」

「そうは行かないよ。ナローラたちをふたりきりにするわけにはいかない」

「気の毒だが、ヒロト」

たいして気の毒そうでもなしにマジェストが告げた。

「いまのお前じゃ、ついてこられたら足手まといだ。おれたちふたりで十分よ。お前はここで、お嬢ちゃんたちを守っていればいい」

「そんな――」

くやしかった。その場で地団駄を踏みたいほどくやしかった。足手まといだといわれたことより、マジェストに戦力と数えてもらえなかったことがくやしくてくやしくてたまらなかった。自然と涙があふれ出てくる。生まれて初めてのくやし涙だ。

しかし、ふたりはそんなぼくを置いて立ち去ってしまった。ミュウは最後まで心配そうにぼくを見ていたが、それすらも屈辱の原因にほかならなかった。

ナローラが肩に手を置こうとする。その手を乱暴に払いのけた。

力がほしい。

どんな力でもいい。ぼくを一人前の男にしてくれるだけの力が、ほしい。

そして、いま、ぼくが思いあたるものは、ただひとつしかなかった。

ぼくは追いすがるナローラたちを置いて、烈々と降りしきる雨のなかを飛び出していった。

あの、〈呪われし魔槍グングニル〉の封印を解くために。

第八話「人槍一体」

ぼくはいまや、力に飢え、欲望の充足に渇いていた。吸血鬼が血を欲するように力を欲し、幼児が玩具を求めるように欲望を充たすことを求めていた。ぼくの思考はただ、何かが足りないという不全感で占められていた。そして、その何かとはより強大な力だ、と耳もとで囁くものがある。

（そうだ、主よ）

いまや何ものであるのか瞭然としてきた声は告げた。

（それでいいのだ。お前は地上の帝王となる身。東方とダークランドのあらゆる王国を打ち倒して、新たな暗やみの王朝を築きあげよう。そこには臣民はなく、ただ奴隷があるのみ。すべての人間がお前の気まぐれを恐れ、卑屈に振る舞うことだろう。そしてお前は一片の憐憫すらなく、そのものたちの命を奪い、髑髏の杯に血を充たして飲み干すことだろう。お前こそは暗黒と邪悪の主人、忌まわしい者どもの王。火の心と昏い魂魄を持つもの）

素晴らしい、とおれは思った。それこそ、おれが待ち望んでいたものだ。

そうだ、手始めにあの勇者の誇りを陵辱しよう。彼女の心が折れ、その目から光が失せるまで犯しつくそう。両手両足の腱を切り、動けなくしてから、その口を、乳房を、尻を、性器を犯し抜くのだ。勇者は初めて暴力の恐怖を知ることだろう。世界の光は、闇に染められ、単なるひとりの性奴と化して、わがもとに跪くことだろう。

おれはそう思い、雷雨のなか、哄笑した。そして、そのためには、わがものであるあの〈魔槍〉をこの手にする必要がある。急がなくては。魔槍がおれを呼んでいる。

おれは倉庫の扉を開け、無数のマジックアイテムを乱暴に倒しながら、その槍を求めた。

あった――！

これだ。この倉庫の奥の棒状のもの、これがおれの下僕、おれの武器だ。何重もの魔術封印を施されていることが、いまのおれにはわかる。しかし、それは数十年に及ぶ歳月を経て、ほんのわずか劣化し、穴が生まれていた。これならなんとかなる。おれは近くに並べられた魔剣を手に持つと、魔槍に向け、思いきり振り下ろした。爆発のような衝撃があって、吹き飛ばされる。魔剣と封印の魔力が干渉しあい、封印がひとつはじけ飛んだのだ。

おれは微笑した。

いいぞ。この調子ならなんとかなる。

そして、ふたたびべつの魔剣を手に取ると、重じことをくり返す。数回そうすると、あきらかに封印は弱まった。これなら、もう封印の用を為さない。

「来い！」

おれは下僕に命じた。

「来い、グングニルよ！　かつて七代前の魔王そのひとの手によっ

て鍛えられた悪夢の顕現よ！　不愉快な繁栄に驕る東方と、堕落せしダークランドにふたたび暗黒時代をもたらすため、わがもとに来るがいい！　そして、主従ふたりで屍山血河を築こうぞ！」

いらえはなかった――言葉にしては。

しかし、さらに幾重にものこる魔術封印の奥で、グングニルはたしかに覚醒し鳴動していた。それどころか、いまやおれとグングニルはひとつの意識を共有していた。あるいはそれは傍目に見ればおれの意識がグングニルに侵食されたということなのかもしれぬ。しかし、いまやおれとグングニルは一体なのだから、彼我の区別を付けることに意味があろうとは思われなかった。

おれはただ叫んだ。

「来い！」

そして――

おお、グングニルは来たのであった。

〈魔法使い〉ミランダがほどこしたという精緻な魔術封印は、いま、力づくで吹き飛ばされ、魔槍は邪悪な歓喜とともにおれの腕に飛び込んできた。漆黒と真紅が螺旋状にうずまく、惚れぼれとするほど美しい槍だ。まだ最後の、最も強力な封印ひとつが残っていたが、この程度、問題にもなるまい。

おれはグングニルから暗い魔力が流れこんでくることを感じながら、傲然と笑った。いまや封印されし魔槍は黄泉がえった。地上に屍の山と血の河をつくり出すまで、われら主従は止まるまい。

そこに、遠く、一匹の魔獣が見えた。鋭い牙を生やした醜い姿は、巨大ないのししに似る。しかし、いのししより遥かに獰猛かつ貪婪そうな目をしていた。永遠に癒えぬ魂の飢えに突き動かされ、ひとを襲い食らうたぐいの魔獣だ。どうやら、ミュウとマジェントが取り逃がしたらしい。格好の獲物だった。

おれは雨中に飛び出ると、ひとっ跳びして、その魔物〈クレイジィボア〉の前に躍り出た。最前までのおれには決してできなかった人間ばなれした跳躍だ。してみると、少しでも筋力を上げようとしたおれの努力は全く無駄だったのだ。なんというばかばかしさ。おれは魔物以上に獰猛に笑った。

おれの前に突進してきた魔物は、急停止した。本来、いかなる障害をもはじき飛ばしながらただひたすらに突き進むはずの魔物であるが、おれをまえに、絶対的な実力差を悟ったのだろう、あきらかに怯んだ。

唾棄すべき怯惰。

おれはげらげらと哄笑しながら、魔槍を一閃し、クレイジィボアの皮膚を切り裂いた。たちまち、魔物は悲鳴をあげ、遁走しようとする。そこを狙い、おれはグングニルを投擲した！　まさに、必殺の一撃だった。魔槍は魔獣の巨大な身体を貫通し、大地に縫いつけたのである。クレイジィボアの悲痛な叫びが夜暗に響く。

しかし、奴はそう長く苦しみはしなかった。クレイジィボアの身体を貫いた槍は、たちまち、その肉体をことごとく吸い取ってしまったからである。あとには、そこに魔物がいたという痕ものこらなかった。ただ、大地に一本の槍が突き立っているだけである。おれ

はいま死したばかりのその魔物の生気が流れこんでくることをたしかめながら、槍をひき抜いた。

これがグングニル。

かつてダークランドの暗黒騎士団長に愛用された呪われた魔槍。

この槍は、殺したものの生気を奪うため、殺せば殺すほど強くなっていくのだ。

「素晴らしいぞ、グングニル」

おれは唇を獣のように開き、狩猟の淫猥な快楽に浸りながらまたも笑った。先ほどから、何もかも愉快でたまらなかった。あるいはそれはようやく解放されたグングニルの歓喜であったのかもしれないが、もう、おれにはその区別はつけられなかった。

「――ヒロト！」

悲鳴に似た声がして、おれは、ミュウとマジェントがようやく魔物に追いついてきたのを発見した。ふたりとも、返り血にぬれている。

「おお、わが花嫁よ」

おれは槍を雨天にかざしながら、語りかけた。

「血まみれとは美しい。そなたには純白のドレスより血にぬれた甲冑がよく似合う。いますぐわがもとに拝跪し、忠誠を誓うなら、その手足は残しておいてやるが如何？」

「グングニルを、抜いたのか――」

ミュウの声音には深い絶望が感じ取れた。おそらく、こうなる以前のおれを惜しんでいるのだろう。あの惰弱な輩を。それが最強の勇者の趣味とは、信じがたいが。

なぜか苛立たしさにかられ、おれは魔槍をかまえた。さすがに勇者と狂戦士ふたりを相手取るには、さきほど魔物を倒したようにはいかない。

「ミュウ、こいつはだめだ」

マジェストが苦々しげに呟いた。

「ヒロトは力の誘惑に屈したんだ。見ろ、最終封印をのこし、すべての封印が解けてしまっている。いまのヒロトは魔槍と精神結合し一体化している。別人だと思ったほうがいい」

「そんな。そんなことって――」

決めた。

この娘は、父の目の前で陵辱してやろう。泣いても叫んでも許しはしない。その高貴な魂がわが暗黒に染まるまで、犯しつくしてくれよう。そのとき、この鳥がなんと啼くか楽しみだ。

おれは破壊と殺戮と陵辱だけがもたらす原初の喜悦にひたりながら、魔槍をかまえなおした。

第九話「キス」

おれは狂おしい性的興奮に駆られながら、勇者の肢体を眺めた。牝鹿さながら、いままでともにありながら、なぜ、組み敷かずにいられたのか不思議なほど優美な身体だ。この身体を押し倒し、その奥に精を放つことを考えると、高揚せずにはいられなかった。

「勇者よ」

おれの唇は自然と動いて言葉を紡いだ。

「わが花、わが姫、わが玩具、わが花嫁よ。おれのもとに跪くつもりはないか？　われらふたりが組めば、地上はおろか、天上すら穢すことが叶おうぞ」

「否」

勇者は震える唇で応じた。

「ヒロト。ぼくは正義のしもべ。たとえきみでも、邪悪に屈するわけにはいかない！」

「それでは、ひとまず串刺しにしてから、その屍体を犯すとしよう」

いや、グングニルでその身体を吸収してしまっては、それもかわなぬか――そう思い、冷笑しかけた、その、刹那。

身体じゅうが総毛立つような凄まじい鬼気に驚いて見やると、マジェストの顔がまさに狂戦士の形相に変わっていた。娘を侮辱されて怒ったか。いや、そうではあるまい。この気は、そのような不純なものではない。ただ純粋かつ膨大な殺気がこのおれを圧している。

これが、先代勇者とともに各地を転戦した最強剣士の真の姿か。

しかし――いまのおれに恐れるものはない。おれは恐怖を超越し、戦慄を支配した。もはや、悪鬼の群勢といえども、このおれを震慄させることはできぬ。

と。

マジェストが、駈けた。

熊のような巨体にもかかわらず、異様に素早い動作で、その手に持つ魔法戦斧を振りまわす。一気に斧の間合いにまで詰め寄られた。おれが後方に跳ぶのがいま少し遅かったなら、おれの肉体は両断されていたに違いない。否――その斧があたった地面が吹き飛んで穴があいたところを見ると、戦斧の魔力で圧殺されていたか。

いずれにしろ、この男は、間違いなく一片の情もなく、おれを殺しに来ている。

「いいぞ」

おれは独語した。

「さすが先代勇者の仲間。このおれの敵はそうでなくてはな！」

グングニルはその威力に反し、見かけはいかにも華奢な槍である。おれはその細槍を片手に持ち、突進した。斧で切っ先を逸らす。

二対一の戦いを覚悟したが、じっさいには勇者は戦いに参加せず、ただわれわれが戦うところをとまどったような表情で傍観するだけ

だった。覚悟のない奴。失望したぞ！

もとより、槍と斧では間合いが異なる。本来、まともな勝負になるはずもない。しかし、マジェストは驚嘆すべき集中力で槍先をさばき続けた。さすが歴戦の戦士の技といえよう。魔槍の記憶によると、このグングニルを相手取って、ここまで立っていられた男は数少ない。しかも、この男は、となりに勇者である娘がいるにもかかわらず、彼女に頼る気はまったくないようだった。先代勇者以来のひさびさの好敵手だ！

攻守一体となった超高速戦闘は続く。おれは次々と必殺を繰り出しつづけたが、マジェストはそのことごとくを紙一重で防ぎ切った。超人的な身体能力というしかない。たしかに、この男ならば、最強クラスの魔物たちを相手取っても、一歩もひくまい。

たがいの武器の衝撃波が、たがいの頬を切り裂いて、おれたちは離れた。

「楽しいな、マジェスト」

おれは高揚にふるえながら笑った。

「お前もこのような戦闘を望んでいたのだろう？　お前ほどの超戦士が、このような村の生活に馴染めようはずもない。内心ではおれのような新たな宿敵の登場を待ち望んでいたのではないか？」

「くだらん」

マジェストは口中の血をぺっ、と吐き捨てると、いい捨てた。

「お前は魔槍の力に幻惑されているだけだ、ヒロト。正気に戻ればお前もくだらんと思うだろうよ。しかし、いったん魔槍に取り込まれたものを正気に戻す術はおれにはない。お前には、死んでもらうよりない」

「できるかな？　死ぬのはお前のほうかもしれんぞ」

「ああ、そうかもしれんな。しかし、おれは負けん。おれが負けたのはただ一度、先代勇者がおれを仲間にひきいれたときの勝負だけだ」

「ならば、二度目が最後になると知るがいい！」

そしておれがふたたび戦闘に移ろうとした、そのとき、遠く、女の姿が見えた。ナローラだ。それにトパーズ。女たちめ、何をしに現れた……？

「やめてください！」

ナローラは、長い髪を雨にぬらしながら、われらの戦場に平然と立ち入って、叫んだ。

「ご主人様、やめてください！　こんなこと、全然ご主人様らしくありません！　わたしの知っているご主人様はこんなことをするひとじゃない！　ご主人様は――」

ばかか、この女。

男と男の戦場に無防備に入り込んでくるとは。殺されても文句はいえんのだぞ。

いや、そうだ、待つ必要はない。じっさいにグングニルで串刺しにしてやろう。この女の生気はどんな味がするか、楽しみだ。そうら――

（やめろ）

おれの心のなかで何かがささやいた。聴き逃してしまいそうな、小さな、小さな声音。

（やめるんだ。ナローラに手を出すな）

ほう。惰弱なおれよ、まだおれのなかで生きていたか。いま、貴様の愛する女をこの槍の錆としてくれるところだ。さあ、見ているがいい。この魔槍の秘められた力を。

（やめろ！）

瞬間。

ぼくはかろうじて肉体の制御を取り戻し、おれはうめきながらグングニルを落とし、ぼくは自分の身体を抱きしめて七転八倒した。ナローラが無防備に歩み寄ってくる。

（殺せ！　あのうるさい女を殺してしまえ！）

ぼくのなかで、おれの声がする。おれはふたたび肉体の制御を取り戻す。おれはついにナローラをこの腕に抱き、その背骨を折ってくれようと力を込め――

「いいですよ」

奴隷娘は、何もかも許すかのような優しげな表情で告げたのだった。

「わたしを殺してもいいですよ。だから、お願い、もとのご主人様に戻ってください」

そして、彼女はそっと、おれの――ぼくの唇に口づけた。

その唇から、光そのものがそそぎ込まれたかのようだった。ぼくのなかを、何かが凄まじい速度で駈けめぐり、全身を刺激した。ナローラを抱き殺そうとする腕を、ぼくは渾身の力でとどめた。やめろ。自分自身に命令する。やめろ――！　そうしてぼくは力を増し、最後の、ひと握りの力でナローラを殺そうとする自分を圧倒した。もはや内なる声はぼくを支配してはいなかった。しかし、それも長くはもたないだろう。このままでは、ぼくは、ふたたび、あいつに支配される。だから――

「ぼくを殺せ！」

大音量で叫んだ。

「いまのうちにぼくを殺すんだ！　もう長くは続かない！」

それだけが採りうる唯一最善の手段だった。事ここにいたっては、ほかの方法はない。しかし、そのとき、トパーズが進みでて、呟いた。

「その必要はありません」

彼女の表情はふだんとは別人のようだった。ただ美しいだけではなく、崇高で、神秘的ですらある。

「わが母から受け継いだ魔術の奥義、いまこそ見せましょう」

それから何が起こったのか、ぼくにはわからない。光が爆発した、とだけ見えた。おそらく、トパーズが何かトリックを使ったのだろう。そうして、太陽がのぼるとともに影が消えるように、ぼくの心のなかから、闇は消えていった。否――消えたわけではない。ただ、封印され、力を弱めただけだ、ということはわかった。烈しい暴力の渇望が消えてゆく。それとともに、ぼくのなかの激烈な気力も消え失せたようだった。

ブラックアウト。

第十話「先代勇者の伝説」

それから三昼夜、ぼくは懇々と眠りつづけた。そして、そのあいだ色々な夢を見た。グングニルに憑依され、人槍一体の邪悪の化身と化し、世界を炎に包む夢。あるいは、ナローラとただふたり、いずこともしれぬ田舎村に引きこもり、平和に暮らす夢。いずれもぼくの深層心理の具現であったのかもしれないし、ただの夢にすぎないのかもしれない。ぼくは夢に神を視る聖女ではない。おそらくただの夢だろう。

そして、三日、惰眠を貪った末、ぼくはようやく目醒めた。窓から差し込む日のまぶしさに薄く目をあけ、白い清潔なベッドの上に上半身を起きあがらせると、ぼくの身体にもたれるようにしてナローラが寝ていた。それは胸が痛くなるような光景だった。疲れた表情に、三日三晩、ぼくの看病をしてくれていたことがわかったのだ。

ぼくは烈しい羞恥にかられて、ここから逃げ出したいと思った。何ということをしでかしてしまったのか。そして、何ということを考えていたのだろう。ぼくは罪人だった。たとえ咎めるものがいないとしても、刑死の時を待つ重罪人にほかならなかった。

そうっとベッドから抜け出ようとすると、ナローラがびくりとして、目を醒ました。

「ご主人様……？」

寝ぼけまなこでたしかめると、見る見るその瞳に涙の雫がたまっていった。

「ご主人様っ！」

叫ぶとともに抱きつく。その声を聴きつけて、奥の部屋からミュウたちがやって来た。ぼくはひどく気まずく、顔を合わせられないような気分だったが、ミュウとトパーズは一向に気にしたようすもなくぼくの手を握った。

「良かったよ、ヒロト。このまま目が醒めなかったらどうしようかと思った」

「そうよ。ミュウったら、わたしが大丈夫だっていうのに全然信用してくれないんだから」

「それは、ほら、心配だったから――」

「そうね。でも、心配しすぎ。わたしがいった通りだったでしょう？」

「うん！」

ミュウの笑顔はまぶしいようだった。綺麗な湖水色のひとみの下に、かすかに隈が出来ているところを見ると、ほんとうに心配してくれたのだろうと思う。申し訳なさで、気分が悪くなるようだ。ぼくはそんなに価値がある人間ではないのに――。

「よう、ヒロト、起きたか」

少女たちの後ろからマジェストがのそりと姿をあらわした。この家はかれの身長に合わせてすべての扉が大きく作ってあるのだが、それでもやはりその体？は圧倒的だった。この巨漢と、命がけの死

闘を演じたなどと、とても信じられない。

「それじゃ、だれもいわねえだろうから、おれがいってやるとするか」

マジェストは面倒くさそうにベッドの脇に歩み寄ると、腰をかがめて、ぼくの頬をかるく叩いた。頬に激痛が走る。それは、おそらくかれにしてみれば本当に手加減した一撃だったのだろうが、それでも、十分に痛かった。肉体的にはもちろん、精神的にも。

「ヒロト」

しんと静まりかえった室内で、かれはぼくの目を正面から覗き込んだ。

「自分が何をしたのかはわかっているな？　もう少しで、お前はおれやミュウ、いや、村人全員の命を奪うところだった。たしかに魔槍に操られてはいたんだろうさ。しかし、それは理由にならん。あくまでお前がやったことには違いないんだからな。おれも男だ。お前が力に憧れることはわかる。しかし、お前はそのために超えちゃならねえ一線を超えちまった。すべてお前の責任だ。噛み締めろ」

「はい」

ぼくは、懸命に落涙をこらえた。自分の愚かさが情けなく、また悔しく、しかしそれを素直に外に出すことだけはどうしてもできなくて、懸命に感情の爆発を耐えた。ぼくは、やっぱりただの愚物だった。少しでも成長したいと思い、また、そうできると信じて、しかし、最後に掴んだものは泥に過ぎなかった。

「厳しすぎるよ！　お父さん」

ミュウが庇おうとしてくれたが、ぼくは片手を上げてそれをさえぎった。

「いや、マジェストさんのいう通りだ。何もかも皆、ぼくの責任で、ぼくが背負わなければいけないことなんだ。ぼくは魔槍の誘惑に負けた。そして、力ですべてを支配したと思った。ぼくはきみたちを支配したいと願ったんだよ、ミュウ。それは、ぼくの弱さであり、愚かさだ。弁解のしようもない」

室内に重苦しい空気が充ちた。だれもひと言も口にすることができず、ただ沈黙のうちに時だけが過ぎていった。そして、初めに口を開いたのは、ナローラだった。

「それでいいではありませんか、ご主人様」

彼女は、まだぬれたままの双眸で、ぼくの目をじっと見つめてきた。

「わたしにとっては、どんなに重い罪を犯されても、ご主人様はご主人様です。そして、今回は幸い、だれも傷つかずに済みました。あとは、ご主人様が自分の責任を噛み締めて、反省なされば、それで済むことではありませんか」

それは、あまりに甘い言葉だった。それで済む話ではない、と当事者であるぼくですら思う。ぼくは、あやうく封印された魔槍を世に放つところだったのだ。そうなっていたなら、どれほどの被害が生まれたか、想像もつかない。

それにしても、ナローラは、なぜ、こうも、ぼくを全肯定してくれるのだろう。ぼくは、彼女にその信頼に値する何をしてあげられたというのだろう。疑問に思ったが、当然、答えは出なかった。ただひとついえることは、ぼくは、その信頼に応えなければならないということだった。それができなければ、ぼくは、最低の下衆にも劣るだろう。

「まあ、たしかに、ヒロト。お前はよく頑張った」

驚いたことに、マジェストがそういってぼくの肩を叩いてくれた。

「あの魔槍の支配力に、いっときでも抗ってみせるとは、並の根性じゃねえ。感心したぜ。いいか、たしかに今回のことはお前の責任だが、それでお前のすべてが否定されるわけじゃねえ。堂々と胸をはれ。たとえ虚勢でも、そういうふうに生きてゆけ。おれたち凡人にできることは、精々それくらいのものなんだからな」

凡人？　あなたが？

ぼくがよほど驚いた顔をしたのだろう、マジェストは顔をしかめた。

「何だよ、おれが凡人っていっちゃおかしいか。いや、おれもお前とおんなじ凡人だよ。そりゃ、昔は自分はたいしたものだと思っていたさ。村じゃあ、おれより強い奴はいなかったし、そいつは都会に出ても変わらなかった。だから、おれは世界一の剣豪になれるんじゃないかと自惚れた。いや、もう世界一なんじゃないかとすら思っていた。若気の至りってやつだな。おれは増長し、ろくでもない奴になって、さんざん乱暴を働いた。自分は無敵だと思った。どこかの国の大将軍になろうかとすら考えた。だが――それもすべて、

勇者に出逢うまでだった」

マジェストはどこか遠いところを見つめる目つきになった。きっと、先代勇者の勇姿を思い出しているのだろう。

「勇者に逢って、おれは本物ってやつがどういうものなのかを思い知った。見た目はそう強そうには見えなかったよ。むしろどこにでもいる優男といった風情だった。しかし、いったん本気になると、強いのなんの。たぶん、いまのミュウですら全く相手にならんだろう。それくらい破格の実力だった。おれはあいつを見て、わかったんだ。おれはこいつみたいにはなれねえと。おれとこいつの間には絶対的な差があると。剣の実力じゃねえ。ただ自分より強いだけだったら、おれはいつか追い抜けるかもしれねえと思っただろう。だが、そんな瑣末なことじゃねえんだ。もっと根本的なところで、勇者は圧倒的に本物だった。ひと言でいえば、背負うものの重さ、ってやつかな。あいつはひとつの世界をひとりで背負っていた。それでいて、あいつはいつも飄々として気負わなかった。心の底から、かなわねえ、と思ったよ」

マジェストが圧倒されるほどの「本物」。先代勇者とは、どんな人物だったのだろう。たしかにかれの伝説的偉業に関しては様々な文献が存在するが、実像はそんなものではわからないのだろう。マジェストの目には、いまもその残像がのこっているのだ。

「おれは生まれて初めて心から負けを認めた。だが、ふしぎとそれが厭な気分じゃなかった。何か心の重石を取り除かれたような、そんな気分だったな。だからよ、ヒロト。お前も腐るんじゃねえよ。お前なんか、その歳の頃のおれに比べりゃ、ずっとましだ。偉いくらいだっていってもいい。つまりは、お前にもまだまだ可能性はあるってことさ」

「はい」

ぼくはそうとしかいえなかった。そのほかに何かいえば、今度こそ涙がこぼれると思ったからだ。

そうして、ぼくは朝日のなか、唇をきつく噛みしめたまま、必死に落涙をこらえていたのだった。

第十一話「理想と快楽」

翌日。

いまだに消えやらない、消え去るはずのない恥辱を噛みしめながら、ぼくは村の端の木陰に座っていた。いまはミュウにもナローラにも逢いたくなかった。慰めの言葉など聴きたくもなかった。だれがなんと慰撫してくれようとも、ぼくが惨めな咎人であることに変わりはない。あと少しでぼくはミュウたちを嬲り殺すところだったのだから。

かたく拳を握りしめ、樹に打ち付ける。幾度も、幾度も打つうち、拳の皮が剥け、血がにじんできた。その拳の痛みが、かすかにぼくの心痛を和らげてくれる。皆は、ぼくが愚行をしでかしたことで落ち込んでいると思っているだろう。それもある。それもあるが、それだけではない。

だれにもいえない。あの昏い欲望は、いまなお、ぼくの胸のなかにあるのだということを。あれは、紛れもなくぼく自身の欲望だった。魔槍は、ぼくのなかにあったものをひきずり出してみせたに過ぎない。ぼくは、魔槍に、自分がいかに下衆な人間であるかを思い知らされたのだった。

「あらあらあら」

聴きおぼえのある声に振り返ると、そこにトパーズが佇んでいた。

「やめたほうがいいわよ。樹が痛むから」

手が傷つくから、といわれたら反発していたかもしれないが、こういういい方をされたら抵抗できなかった。ぼくは気恥ずかしくて、拗ねたような声を出してしまった。

「何か用ですか」

それが、自分でも、ひどく子どもっぽいいい方であるような気がして、さらに落ち込む。

「ご機嫌斜めね」

トパーズはその刺を完全に無視して、明るくほほ笑みかけてきた。本当に捉えどころのないひとだ。何を考えているんだろう。

彼女はぼくの横に腰かけた。まさか座るなというわけにもいかず、ぼくは黙りこむ。

「恥ずかしいって思っている？」

気持ちよさそうに晴れ空を眺めてのびをしながら、トパーズが呟く。

「それはそうよね。魔槍に支配されていたときのきみは、世界の支配者だったんだものね。うわあ、恥ずかしい。自分の分もわきまえず、たまたま手にいれた力に酔って、殺戮と強姦の欲望を顕にして——それって、本当に恥ずかしいわ。顔から火が出ちゃう。生きていけないわね。世間様に顔向けできない」

トパーズの言葉に、ぼくは当然、地の底までへこんだ。

これをいいに来たのだろうか。意外と意地悪なひとだったんだな。

「でもね」

トパーズは突然、空から目を逸らし、ぼくのほうを向いた。ミュウと同じ色のひとみがひどく真剣な表情に変わっていて、ぼくは思わずどきりとした。

「それはべつにきみだけじゃないわよ。心に薄汚い欲望を抱えているのはきみだけじゃない。わたしだって、いっぱい持っている。だれだって持っているのよ。ただ、それを表に出すか、出さないかの差があるだけ。きみは偶然にも表に出してしまった。それはたしかに恥ずかしいことだと思うわ。でも、本当は恥じる必要なんてこれっぽっちもないの。ひとは皆、自分の欲望と折り合いを付けながら生きているわ。醜悪な欲望だけがきみのすべてじゃないでしょう？　綺麗な心だってあるでしょう？　だから、そんなに落ち込んだりしないで、背筋をのばしていなさい、男の子！」

トパーズはぼくの背中を思いきり叩いた。思わずむせてしまう。彼女はそんなぼくを、ほほ笑ましいものでも見るかのように見おろしていた。

「ね。お姉さんが、慰めてあげようか？」

「は？」

何をいわれているかわからない。

「だから、わたしがきみを慰めてあげるっていっているのよ。わからない？　女のほうからここまでいっているのに、鈍感な子ね」

「それは――あの――」

どう対応していいかわからない。童貞を捨てたとはいえ、ぼくはまだ女性の扱いに自信を持てていない。それがこんな美女から誘いを受けている？　それともからかわれているのだろうか？　いったいどう対応すれば良いんだ？

あたふたするぼくを見て、トパーズは小さく少女のように笑った。

「やっぱり可愛い子ね。ミュウがいれこむのもわかるわ。ね、きみは真っ直ぐに生きていこうとしているようだけれど、べつに快楽と刺激で自分をごまかして生きていったってかまわないのよ。きみはまだ知らないかもしれないけれど、そうやって生きている大人はいっぱいいる。ううん、街に出れば、まっとうに生きようとしているひとのほうが少ないかもしれない。それもひとつの生き方。ごまかしてしまいなさいよ。自分の弱さなんて真剣に考えるのはやめてしまいなさい。ただ、可愛い女の子を見つけてひっかけて、愛しあっていると信じればいいわ。それだけで契約成立。きみは幸せを手に入れることができる」

「でも、それは――」

「そう、ただの嘘かもしれない。でもね、その嘘を信じて生きていけるならそれもひとつの選択肢よ。それはとっても気持ちいいことなのよ。ひとの心をとろかしてしまうくらい。きみにはきみを絶対的に信じてくれる女の子がいるじゃない？　あの子と契約を結んでみたら？　どろどろに溶けるくらい気持ちいいわよ」

ナローラのことか。

たしかに、彼女と愛しあったなら、それは恐ろしい快絶だろう。彼女はぼくのすべてを受け止めてくれる。ぼくの弱さも、醜さも、何もかも受け入れてくれる。かぎりない優しさ。しかし、それは――

「そうするつもりはないみたいね」

ぼくのひとみから心を読み取ったのだろう、トパーズはいった。

「残念。人間はからだの快感だけでけっこう生きていけるものなのにな。おいしいものを食べたり、綺麗な子を抱いたり抱かれたり、あるいは鞭で打ったり打たれたり、そういうことだけでけっこう楽しく生きられるものよ。きみみたいに真面目に苦しむ必要は本当はないんだから。たとえば、ほら」

トパーズはぼくの指に指を絡ませ、こすらせあった。

あ。

「これだけで気もちいいでしょう？　ひとの肉体って、そういうふうにできているのよ。心と身体の快楽に溺れて生きて行くのもお姉さんは悪くないと思うなあ。でもね」

トパーズのひとみが深い色にきらめく。

「きみがもし、星のように高い理想を掲げ、その道をどこまでも往くとしたら、それもひとつの生き方よ。そのとき、きみは孤独になるわ。きみを愛するひとたちも、そのうちきみの理想についてゆけなくなる。それでもきみはひとりで星の高みを目ざすのでしょう。身体が灼け、心が歪むとも。男の人はそういうの好きよね。けれど、

それって本当に正しい生き方なのかしら？　友人を作り、仲間を作り、家族を作って、ひととひとの間で生きてゆくことこそが正しい道なんじゃないの？　もちろん、何が正しいのか、わたしにはわからない。だから、これはただの戯言。あらあら。きみを励ますつもりが、つまらないことをずいぶん話しちゃったわね。大丈夫、ヒロトくん？」

「はい」

正直いって、このときぼくは、彼女がいっていることを半分も理解できていなかったと思う。しかし、記憶にとどめておくべき内容であることはわかった。

「それじゃ、本題に入りましょうか」

トパーズは長い髪を指先で梳かしながら続けた。

「魔槍グングニルのことよ。あの槍は、まだ完全に封印されてはいないわ」

第十二話「長い旅路」

ぼくたちはふたたび旅に出るため、旅装を整えていた。ぼくたち、とは、この場合、ミュウとぼくを指す。ミュウはあいかわらず旅なれた少年剣客のような軽装だったが、ぼくはいくつか来るときは持っていなかった道具を持たされていた。

「魔剣〈フォールンエンジェル〉」

マジェストはそう呟きながら、ぼくにひと振りの剣と鞘を手渡してくれた。

「グングニルのように呪われてはいないが、やはり〈銘入り〉の強力な魔剣だ。お前には贅沢すぎる逸品だが、まあいい、持って行きな。なんだ、遠慮するな。ほら」

「あ、ありがとうございます」

ぼくはかるく手渡された剣を呆然と見おろした。

〈銘入り〉ともなれば、普通のマジックアイテムとはまたひと桁違う価格で取り引きされるものだ。こんな、伝説の秘宝ともいえるものを、ぼくがもらってしまっていいのか。

いや。

いいのか、悪いのか、そんなことを考える必要はない。必要なのは、ただ感謝して受け取ること。ぼくは深く一礼して、鞘を腰にくくりつけた。これで、一人前の剣士のように見えるだろうか。

「それから、これだ」

マジェストはいとも気軽な調子で白い布に包まれた棒状のものを渡してきた。ぼくは息を飲みながら、それを受け取る。いうまでもない。呪われた魔槍グングニルである。

ぼくは昨日、トパーズからこの魔槍の由来を聴かされていた。七代前の魔王によって作られたこの武具は、本来、強力ではあったが主を呑み込んで一体化するような呪いはそなえていなかったという。しかし、ある使い手が味方に裏切られ、奸計に嵌められて絶命する時、その使い手の怨念が槍に宿った。爾来、この槍は呪いの武器として知られるようになったのだとか。ぼくに呼びかけてきたのは、その使い手の怨霊だったのかもしれない。

「もう〈魔法使い〉ミランダはおらん。だから、グングニルを完全に封印することはできん。しかし、〈魔法使いの娘〉であるところのトパーズがあたうかぎりの封印をほどこした。これで、魔槍の霊もしばらくは出ては来ねえだろうよ。好きに使うがいいさ。ただし」

マジェストはぼくに釘を刺した。

「封印の効果はせいぜい数年といったところだ。使い方によってはもっと短く切れるかもしれん。そのときまでにお前は魔槍の呪いをかき消す方法を見つけるか、さもなければ魔槍を支配下に置く精神力を身につけておかなければならん。わかるな？」

「はい」

大きくうなずく。

この槍がどれほど危険なものか、それはぼく自身がいちばん良くわかっていた。そした、マジェストとトパーズは、危険を承知で、ぼくにこの槍を預けてくれることにしたのだ。なぜ、ぼくなのか。それは、この槍の主人がぼくだからだった。

マジェストが両手を組んで熊のように唸る。

「なぜ、いままではずっとおとなしくしていた魔槍がお前が来た途端に活動しだしたのかはわからん。しかし、とにかく槍はお前を主人に選んだ。おそらく、お前には槍を刺激するだけの何かがあるのだろう。それが何なのかもやはりわからんが、少なくともグングニルを支配できる可能性があるとすれば、それはお前だけだということだ。おれたちはそれに賭けてみようと思う」

「はい」

ぼくはそれ以外の言葉を忘れてしまったようにただ短く答える。じっさい、それしかいうべきことはなかった。解き放たれればどれほどの惨禍をもたらすかわからぬ悪魔の槍をこのぼくのようなひ弱な若造に託す。常識で考えれば、ありえない選択だろう。しかし、この〈狂戦士〉と〈魔法使いの娘〉は、その非常識な選択肢を選んでくれた。それはおそらくは狂気のギャンブル。しかし、ぼくは必ずかれらをこの賭けの勝者にしてみせる。

必ず。

「さあ、ヒロト、行こうよ」

無邪気な声でミュウがぼくを呼ぶ。

ぼくはマジェストから受け取った槍を背負うと、ふたりに深く一礼してから、外へ出た。

陽光は燦々と降りそそぎ、辺りは明るい。しかし、ぼくの心は深い懊悩に囚われていた。ぼくの内側に、こんな村になど来なければ良かった、と囁くものがある。そうすれば、こんな呪われたアイテムなど背負う羽目にならずに済んだのに、と。それはまるで無意味な後悔だ。むしろ、ぼくはこれほどの事件に巻き込まれながら一命を拾った事実を感謝するべきなのだろう。情けない悔やみなどなど無用。しかし、そうとわかっても、ぼくのなかから、暗い後悔は消え去ろうとしなかった。

ぼくは未熟だ。

日は燦々とあかるく、風は涼やか、しかし、気分はどうにも晴れなかった。しかし、勇者はそんなぼくの苦悩を気にしたようすもなく陽気に声をかけてくる。

「さあ、早く行こうよ、ヒロト、ナローラ。馬車が待っているよ！」

無邪気なミュウ。

しかし、ぼくは知っている。彼女は魔槍をぼくに預けることを躊躇する姉に、こういい放ったのだという。

「もし魔槍がもういちど暴走したら、そのときはぼくがヒロトを斬る」

と。

ミュウは、ぼくを自分の旅に連れていってくれるつもりなのだ。そして、ぼくの命までも背負う覚悟なのだった。それは、本来、光の勇者の職責にないはずの重みである。

ぼくはなんとたくさんのひとに恵まれていることだろう。あまりに幸運なことだった。そうでなければ、ぼくはいま生きていないに違いない。

ありがとう、ミュウ。

「ご主人様」

馬車の赤い敷布に座ると、ナローラが硬い表情で呼びかけてくる。

「これから、どちらへ行かれるつもりなのですか？」

「そうだね。いったんイシュトリアの首都ラバーンへ行こうと思う。そこで、きみの身柄を預ける場所を探すつもりだよ」

そう、ぼくはナローラといったん別れるつもりだった。むろん、彼女を見捨てるわけではない。ただ、危険な冒険行に彼女をつれて行くわけにはいかなかったし、そして、このままナローラといっしょにいると、自分の心が腐り落ちていきそうなほのかな予感があった。彼女のせいではない。ただ、ナローラはぼくの弱さをひき出すようなところがある。

「わたしにはわかりません」

いま、彼女はミュウの目もはばからず、ぼくの胸にすがりついて

きた。

「なぜ、ご主人様が冒険になど旅立たなければならないのです？　そんな槍など、マジェストさんたちに任せておけばいいではありませんか。わたしには、ご主人様がその槍をどうにかできるとは思えません。マジェストさんたちも無責任です。そんな危ないものをご主人様に預けてそれで済ませるなんて。わたしは――」

「違うよ、ナローラ」

ぼくはなるべく優しく聴こえるようさとした。

「そうじゃない。ぼくが行きたいんだ。今回の事件で、ぼくは自分のどうしようもない弱さを知った。そして、思った。このままじゃいけない、って。ぼくは強くなりたい。力を手にするって意味じゃない。ただ、ひとりの男として、ひとりで立っていられるようになりたい。そのために、ぼくは旅をしなければならないんだ」

「そのためには、わたしは邪魔なのですね」

「ナローラ！　そんなつもりじゃ――」

「いいえ」

ナローラは薄くにじむ涙を指先でぬぐった。

「ご主人様はご立派です。どうぞ、行ってください。そして、いつかナローラのもとに帰ってきてください。ご主人様のお好きなものをたくさん用意して待っておりますから」

そのときのナローラの笑顔を、ぼくは一生、忘れないだろう。ぼくは何もいえず、ただ彼女を抱きしめた。

いま、魔術による絶対軽量化がほどこされているにもかかわらず、背の槍はひどく重く、そしてそれはぼくの担う責任の重みそのものだった。そして、ぼくはこのとき、ようやく大人への第一歩を歩みだしたのだった。

長い旅が、始まる。

第十二話「長い旅路」（後書き）

そういうわけで、全十二話をもって、第三章完結です。物語は第四章に続くわけですが（その前に番外編三は挟まるかも）、あらためてプロットを練り直さないといけないので、数日ほど間が空くかもしれません。ご了承ください。

思えば、ろくに設定も作らず、行き当たりばったりで続けてきた物語でした。しかし、ここまで書いてくると、さすがに愛着も湧いてきましたので、いいかげんな話で終わらないよう、話を練りなおし、きちんと完結させたい所存です。まだまだ先は長いので、良ければお付き合いいただきたいと思います。

では、第四章でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9823v/

勇者と魔王と聖女はぼくの嫁！

2011年9月1日19時33分発行